作業療法学科 昼間部

作業療法学科昼間部　１年　（令和２年改定　教育課程）

	科目	講師名	ページ
基礎分野	統計学	手塚　雅之	····· 174
	情報科学	手塚　雅之	····· 175
	心理学	橋本　景子	····· 176
	哲学	井上　環	····· 177
	教育学	井上　環	····· 178
	英語	濱松　健二	····· 179
	保健体育	深瀬　勝久	····· 180
	社会学	服部　慶亘	····· 181
	人間関係論	川村　啓輔	····· 182
専門基礎分野	解剖学Ⅰ	肥後　心平	····· 183
	解剖学Ⅱ	澤井　信彦	····· 184
	解剖学Ⅲ	五十嵐 広明	····· 185
	機能解剖学Ⅰ	福澤　阿弾	····· 186
	機能解剖学Ⅱ	福澤　阿弾	····· 187
	機能解剖学Ⅲ	阿部　英人	····· 188
	生理学Ⅰ	飯村　佳織	····· 189
	生理学Ⅱ	飯村　佳織	····· 190
	生理学実習	坪井　美行、他	····· 191
	運動学Ⅰ	栗原　実里	····· 192
	人間発達学	大山　敬子	····· 193
	臨床心理学	橋本　景子	····· 194
	小児科学	右田 真、他	····· 195
	精神医学	埜﨑 都代子	····· 196
	リハビリテーション医学概論Ⅰ	草野　修輔	····· 197
専門分野	作業療法概論	埜﨑 都代子	····· 198
	基礎作業学	大倉　久美子	····· 199
	基礎作業学演習	田中　克一・栗原　実里	····· 200
	体験学習	手塚　雅之	····· 201
	身体障害評価学Ⅰ	福澤　阿弾	····· 202
	作業療法基礎演習Ⅰ	福澤　阿弾	····· 203

作業療法学科昼間部　２年　（令和２年改定　教育課程）

	科目	講師名	ページ
専門基礎分野	運動学Ⅱ	栗原　実里	····· 204
	運動学実習	栗原　実里	····· 205
	内科学・老年学Ⅰ	宗像　一雄	····· 206
	内科学・老年学Ⅱ	宗像　一雄	····· 207
	整形外科学Ⅰ	小杉　雅英・宮本　哲・佐々木　伸	····· 208
	整形外科学Ⅱ	小杉　雅英・宮本　哲・佐々木　伸	····· 209
	神経内科学Ⅰ	加藤　陽久	····· 210
	神経内科学Ⅱ	加藤　陽久	····· 211
	病理学概論	プルカット　アルミラ	····· 212
	リハビリテーション医学概論Ⅱ	工藤 征四郎・佐々木 和裕	····· 213
専門分野	作業療法管理学	五十嵐　千代子	····· 214
	身体障害評価学Ⅱ	伴野　麻矢・五十嵐 千代子	····· 215
	身体障害評価学演習	伴野　麻矢	····· 216
	発達障害評価学	大西　麓子	····· 217
	精神障害評価学	手塚　雅之	····· 218
	作業療法基礎演習Ⅱ	阿部　英人	····· 219
	身体障害治療学Ⅰ	阿部 英人・五十嵐　千代子	····· 220
	身体障害治療学Ⅱ	五十嵐　千代子	····· 221
	発達障害治療学Ⅰ	大西　麓子	····· 222
	発達障害治療学Ⅱ	大西　麓子	····· 223
	精神障害治療学Ⅰ	山下　高介	····· 224
	精神障害治療学Ⅱ	山下　高介	····· 225
	日常生活活動学	大倉　久美子	····· 226
	地域作業療法学Ⅰ	阿部　英人	····· 227
	地域実習セミナー	大倉　久美子	····· 228
	地域実習	作業療法学科教員	····· 229

作業療法学科昼間部　３年　（平成28年改定　教育課程）

	科目	講師名	ページ
専門分野	作業療法特講	作業療法学科教員 ・外部教員	····· 230
	作業療法研究法	埜崎 都代子	····· 231
	作業療法総合演習Ⅰ	作業療法学科教員	····· 232
	作業療法臨床セミナーⅠ	作業療法学科教員	····· 233
	身体障害治療学Ⅲ	仲木 右京・伊藤　伸・木下　修	····· 234
	身体障害治療学演習	伴野　麻矢	····· 235
	発達障害治療学演習	大西　麓子	····· 236
	老年期障害治療学	阿部　英人	····· 237
	精神障害治療学演習	手塚　雅之	····· 238
	高次脳機能障害治療学	伴野　麻矢	····· 239
	日常生活活動学演習	五十嵐 千代子	····· 240
	職業関連活動学	伴野　麻矢	····· 241
	作業療法総合演習Ⅱ	作業療法学科教員	····· 242
	地域作業療法学	阿部　英人	····· 243
	臨床実習Ⅰ	臨床実習指導者・作業療法学科教員	····· 244

作業療法学科昼間部　４年　（平成28年改定　教育課程）

	科目	講師名	ページ
専門分野	作業療法特論	作業療法学科教員	····· 245
	作業療法臨床セミナーⅡ	作業療法学科教員	····· 246
	地域作業療法学Ⅱ	栗原　実里	····· 247
	臨床実習Ⅱ	臨床実習指導者、作業療法学科教員	····· 248

科　　目	統計学	単位・時間数	1単位・24時間
担当講師	手塚 雅之	学　年	1年生　後期
実績経験	資格 作業療法士・健康運動実践指導者	精神科病院の臨床経験５年、その後「専門学校」を中心に教育歴１８年。養成教育にたずさわりながら、身障系病院、高齢者施設、精神病院などでも経験を重ねた。それらの実務経験をもとに講義を行う。	

授業の位置づけ	現在、医療・福祉の領域では裏付けのあるデータに基づいた治療を進めることが大前提となっており、学会発表や新しい治療法の確立の際などにも統計処理がされることが多くなっている。リハビリテーション領域についても統計処理が用いられることが当たり前となってきているため、初学者向けになるべく身近な例を提示し、わかりやすい資料を用いて解説し、統計学を身近に感じてもらうことを目指す。	
到達目標	（1）統計学の基礎事項について説明できる。（2）裏付けのある医療を進める際に、統計処理が用いられていることを説明できる。（3）社会的なデータを自分なりに解釈し、自分の意見を述べることができる。	
授業形態	講義・演習	対面と遠隔の併用授業

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	統計学の概要	科学的思考と統計学。記述統計、平均、中央値。
2回	統計学の基礎（1）	ヒストグラム、尺度
3回	統計学の基礎（2）	ばらつき、偏差、分散
4回	正規分布	正規分布と仮設検定
5回	正規分布の使用	平均値の比較（t検定）
6回	統計処理について	EBMと統計処理
7回	各種検定（1）	相関関係
8回	データの活用	社会動向と統計
9回	検定の実際	クラス内における実際のデータと統計検定
10回	各種検定（2）	各種統計データ
11回	各種検定（3）	回帰分析・分散分析
12回	データと解釈	社会的データと解釈

成績評価	授業内試験50％、レポート50％	受講上のルール・留意点	3分の1を超える授業時間数を欠席したものは試験が受けられない。

課題やレポートに関するフィードバック
フィードバックは全体に実施する

	書名	著書名	出版社名
教科書	なし　（資料を配布する）		
参考書	・PT/OTのための統計学入門	渡邊宗孝、寺見春恵、金子翼	三輪書店
オフィスアワー	・「木曜日以外」または「メールで相談可」 ・上記以外でも、空いている時間は対応可能です。		

科　　目	情報科学	単位・時間数	2単位・30時間
担当講師	手塚 雅之	学　年	1年生　前期
実績経験	資格 作業療法士・健康運動実践指導者	精神科病院の臨床経験５年、その後「専門学校」を中心に教育歴１８年。養成教育にたずさわりながら、身障系病院、高齢者施設、精神病院などでも経験を重ねた。それらの実務経験をもとに講義を行う。	

授業の位置づけ	現在、IT（information technology）が発達し、情報機器が生活のすみずみに入り込んでいる。若い世代の間でも情報ツール抜きには生活が成り立たなくなっており、卒後に働くであろう医療・福祉の業界では仕事を進めるにあたって様々な情報機器を使いこなす必要がある。スマートフォン以外では、パソコンの操作、ワード・エクセル・パワーポイント、メールでの送受信などは基本技能として身に着けて置く必要があるため、情報リテラシーに関する基本的知識とあわせて解説する。授業方法は「講義」を間に挟みながら「演習」を中心に進める。
到達目標	（1）個人情報の取り扱いに関する基本事項、SNS利用の際の注意点などについて説明でき、社会的モラルを尊重して行動できる。（2）パソコンの基本操作、ワード・エクセル・パワーポイントの操作、メールの送受信、グーグルクラスルームを扱うことができる。（3）情報機器に関するセキュリティ管理について説明できる。
授業形態	講義・演習　　対面と遠隔の併用授業

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	授業オリエンテーション／メール送受信	授業概要の説明。メールの送受信、Gmailの使い方、宛先、Cc、Bcc、添付ファイルを使う
2回	ワープロソフト（1）	ワープロソフトで文章を作る。起動・終了、ファイルの新規作成と保存、ファイルの開き方と上書保存
3回	クラスルーム（1）	ドライブのひとつである「クラスルーム」を使う（クラスルームとは、クラスルームの使い方）
4回	クラスルーム（2）	「クラスルーム」を使う（クラスルームでレポート課題を見る、レポート課題を提出する）
5回	ワープロソフト（2）	ワープロソフトを使って文章を作る　表、罫線、作画、画像や表の挿入
6回	ワープロソフト（3）	ワープロソフトで文章を作る。文書の保存、フォルダーの作成、フォルダーの整理。
7回	インターネット	インターネット検索　情報検索の必要性と効率化、検索エンジン利用の心得、注意すべきこと
8回	ドライブ	ドライブとは、ドライブの使い方、ドライブの中の資料を閲覧する、取り出す
9回	表計算ソフト（1）	表計算ソフト「エクセル」について。エクセルとは。
10回	表計算ソフト（2）	表計算ソフト「エクセル」について。表を作成し、簡単な計算を行う。
11回	表計算ソフト（3）	表計算ソフト「エクセル」について。表を作成して、グラフを描く
12回	プレゼンテーション（1）	パワーポイントの使い方を知る（作成、保存） パワーポイントとは、パワーポイントで作成する
13回	プレゼンテーション（2）	パワーポイントで作成した資料を手直しする(色彩、大きさ、背景など)
14回	プレゼンテーション（3）	作成したパワーポイントを使って発表してみる
15回	まとめ	提出課題の説明と準備（これまで学んできたさまざまなことからテーマを選び、レポート課題を考える。そして、レポートを作成して提出する）

成績評価	授業内試験50%、レポート50%	受講上のルール・留意点	3分の1を超える授業時間数を欠席したものは試験が受けられない。

課題やレポートに関するフィードバック
フィードバックは全体に実施する

	書名	著書名	出版社名
教科書	・30時間でマスター Word&Excel2019 30時間でマスタープレゼン＋PowerPoint2019	実教出版企画開発部編	実教出版
参考書	・SNSにおける個人情報取り扱いガイドブック	吉岡譲治	日本看護学校協議会
オフィスアワー	・「木曜日以外」または「メールで相談可」 上記以外でも、空いている時間は対応可能です。		

科　目	心理学	単位・時間数	1単位・　30時間
担当講師	橋本　景子	学　年	1年生　前期
実績経験	資格 臨床心理士	カウンセラーとして32年間、これまでのべ２万人を超えるカウンセリングを行ってきた。2020年に臨床心理士資格を取得。その後はSCとして、中学校や高校、専門学校、大学等でカウンセリングとそれに関する講義を行ってきたので、人の心について考え、事例を元に実践的な講義を行っていく。(三重県臨床心理士会・元会長)	

授業の位置づけ	今後心理学の分野を学ぶために必要な心理学的思考法、及び基礎知識を身につけることを目的とする。様々な心理学的メカニズムを知ることは、対人関係において直接影響を与えないように見えますが、実は重要なことです。	
到達目標	心理学の基礎を学ぶことで、人の心の成り立ちを理解するとともに、価値観の違いも認められるようになる。	
授業形態	講義	遠隔授業（ZOOM）

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	知覚と認知の心理①	知覚特性/人は心で物を見る
2回	知覚と認知の心理②	認知プロセス
3回	感情と情緒の心理	「感情」というものについて考える
4回	欲求と動機の心理	生理的欲求と心理的欲求
5回	学習と記憶の心理①	学習のメカニズム
6回	学習と記憶の心理②	記憶のプロセス
7回	性格と知覚の心理①	性格についての心理学的アプローチ
8回	性格と知覚の心理②	「知能」についてディスカッションを通して考える
9回	無意識と臨床心理①	フロイト、アドラー、ユング
10回	無意識と臨床心理②	代表的な心理療法
11回	発達と成長の心理①	誕生から学童期まで
12回	発達と成長の心理②	思考の発達と青年期以降
13回	対人と社会の心理	対人関係の持ち方等自分自身を振り返る/学習性無力感はどこから生じるのか
14回	PTSDと多重人格①	解離性同一性障害/ DVD視聴
15回	PTSDと多重人格②	人の心の不思議について考える

成績評価	試験80%、発表や質問等20%	受講上のルール・留意点	日頃からcritical thinkingで物を見聞きする癖をつけてください。心理学を学ぶといかに騙されているか、あるいは自分の価値観で物を見ているかに気づくはずです。講義中、そういう気づきがあれば（例えば昨日のニュースを見てとか）どんどん発表してください。これが心理を理解する近道です。

課題やレポートに関するフィードバック
FBは全体に実施する

	書名	著書名	出版社名
教科書	イラストレート　心理学入門	齊藤　勇	誠心書房
参考書	日々の生活の中にあります。		
オフィスアワー	作業療法学科の教員を通して連絡をしてください。		

科　目	哲学	単位・時間数	1単位・24時間
担当講師	井上　環	学　年	1年生　前期
実績経験	資格		
	教育学博士課程		

授業の位置づけ	生命倫理、とりわけ医療倫理に関わるトピックについて概説する。臨床の場に立ち、他者の生に関わり介入をしていくことには、「その場面でどのような行為が最善であるか」という倫理的な問いがついて回る。この問いは、なにより個別具体的な状況のなかで都度判断されるものであるが、それらの判断を背後で支えるのは、科学や医療技術・生命倫理をめぐる歴史的・現代的な状況の認識や知識である。本授業では、そうした倫理的判断の手助けとなるような概念的な道具立ての獲得を目指す。授業はディスカッションを含めた講義形式で行う。
到達目標	医療倫理に関わる重要な概念や論点を理解し、自らの言葉で説明できる。 学んだ概念や論点を踏まえつつ、関連する問いについて自身の考えを深め適切に表現できる。
授業形態	講義　　対面授業

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	ガイダンス	授業の概要・進め方・評価方法、学問としての生命倫理の歴史
2回	医療倫理	医療倫理の四原則、医師-患者関係の変遷
3回	インフォームド・コンセント	インフォームド・コンセントの歴史的背景と論点
4回	老いと医療	高齢者医療の諸問題、「老い」をめぐる問い
5回	終末期医療	緩和ケア・鎮静、終末期医療の諸問題
6回	医療資源の配分の問題	医療資源の配分をめぐる歴史的・現代的議論
7回	障害者・病者への差別と排除	障害者・病者への差別と排除の歴史
8回	優生思想	優生学の歴史、新優生学・エンハンスメントの問題
9回	出生前診断・人工妊娠中絶	出生前診断・人工妊娠中絶をめぐる論点
10回	歴史文化的なものとしての生命観	文化による生命観・死生観の相違、近代医学をめぐる問い
11回	ケアの倫理・臨床哲学	キュアとケア、ケアの倫理・臨床哲学の議論
12回	まとめ	全体のまとめと振り返り

成績評価	各講義後に提出を求める小レポート評価の集計を成績の100％とする。授業時間数の3分の1以上の提出がない者には単位が認められない。	受講上のルール・留意点	小レポートの内容は、講義内容の要約やこちらから指示した設問への応答を中心とする。分量は200～500字程度。各回の講義内容は進捗状況等により変更する場合がある。

課題やレポートに関するフィードバック
小レポートへのフィードバックは、講義内で全体に対して実施する。

	書名	著書名	出版社名
教科書	なし		
参考書	①『はじめて出会う生命倫理』 ②『テーマで読み解く生命倫理』	①玉井真理子・大谷いづみ編 ②小泉博明・井上菫生・今村博幸・吉田修馬編著	①有斐閣アルマ ②教育出版
オフィスアワー	授業前後の休憩時間		

科　　目	教育学	単位・時間数	1単位・24時間
担当講師	井上　環	学　年	1年生　前期

実績経験	資格	
	教育学博士課程	

授業の位置づけ	教育の思想や歴史を中心に、教育学のトピックについて概説する。リハビリテーションを「その人のできないことをできるようにする支援」として広く捉え直すならば、それは目の前の相手に有用な知識・方法・助言を伝達し、その人固有の成長を支える共同の営みであるという点で、教育的な側面を根幹に持っている。では、教育とはそもそも何なのか、それを人はいかに遂行してきたのか、そこに含まれる危うさとは何か。この授業では、教育学的な知見の共有を通してこれらの問いに向き合っていく。授業はディスカッションを含めた講義形式で行う。	
到達目標	教育学に関わる重要な概念や論点を理解し、自らの言葉で説明できる。 学んだ概念や論点を踏まえつつ、関連する問いについて自身の考えを深め適切に表現できる。	
授業形態	講義	対面授業

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	ガイダンス	授業の概要・進め方・評価方法、教育学を学ぶ意義
2回	教育の目的	有能化・社会化・主体化
3回	子ども	小さな大人としての「子ども」、「子ども」の発見、「子ども」の消失
4回	学校	国民国家統合の装置としての学校、権力への自発的な服従、社会の学校化
5回	日本教育史①	近代以前の人間形成
6回	日本教育史②	戦前における日本型の学校の形成
7回	日本教育史③	戦後における学校の展開と課題
8回	学び	ソクラテス・プラトン～コメニウス、新教育運動、協同的探究としての学び
9回	特別支援教育①	障害児教育の歴史とインクルーシブ教育
10回	特別支援教育②	発達障害のある子どもの教育
11回	現代の教育思想	かけがえなさを支える「関係性」、自己を侵犯する「溶解体験」
12回	まとめ	全体のまとめと振り返り

成績評価	各講義後に提出を求める小レポート評価の集計を成績の100%とする。授業時間数の3分の1以上の提出がない者には単位が認められない。	受講上のルール・留意点	小レポートの内容は、講義内容の要約やこちらから指示した設問への応答を中心とする。分量は200～500字程度。各回の講義内容は進捗状況等により変更する場合がある。

課題やレポートに関するフィードバック
小レポートへのフィードバックは、講義内で全体に対して実施する。

	書名	著書名	出版社名
教科書	なし		
参考書	講義中に適宜指示する。		
オフィスアワー	授業前後の休憩時間		

科　目	英語	単位・時間数	2単位・　30時間
担当講師	濱松　健二	学　年	1年生　後期

実績経験	資格	長年の英語教育経験を活かし、わかりやすく習得できる本「CD付き　書いて覚える！大人のための英語ドリル・ナツメ社」を執筆（共著）しました。代表を務める英語専門機関、中央アカデミーでの指導経験を活かし、授業を進めていきます。
	高等学校教諭（英語）	

授業の位置づけ	例えば「めまいがします。」を英語で聞き取れたり、「ベッドに仰向けになってください。」を英語で話せるコミュニケーション能力は必要です。又、OTのフルスペリングや本来の意味を知るということで、カルテ等で使用される略語も使える必要があります。更に、新しい情報を得るため、論文を読めるようになることも必要です。英語の基本ルールを確認しながら、実際の医療現場で必要とされる英語の４技能「聞ける、話せる、読める、書ける」をバランス良く身につけていきます。	
到達目標	英語を通して日常活動動作の可能性を広げられるようになると同時に、英語の基本構造を身につけることで、医学用語や略語を含む医療関連の英文の理解を深められるようにします。	
授業形態	講義・演習	対面もしくは遠隔授業

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	英語習得法（発音）	初めて見る単語でもおよその発音で読めるようになるルール（フォニックス）を解説します。
2回	英語習得法（意味）	初めて見る単語でもおよその意味や本来の意味がわかるようになります。接頭辞、接尾辞、語根について解説します。
3回	英語習得法（筆記体）・日常の一般的な用語（表現）	筆記体を書けると、速く書けることと同時に腕の動きでつづりりやフレーズを心地よく覚えられます。日常生活でよく使う単語（表現）を発音しながら書けるように練習します。
4回	be動詞・病院内での用語（表現）	・be動詞での表現ができるように理解を深めます。・病院内での一般的な用語（表現）を発音しながら書けるように練習します。
5回	一般動詞・リハビリテーションでの用語（表現）	一般動詞での表現ができるように理解を深めます。・リハビリテーションの現場で使用される略語や用語を解説します。
6回	現在進行形、助動詞・手指の運動	・現在進行形と助動詞の表現ができるよう理解を深めます。・手指回りの運動を指示できるようにします。（基礎）手指回り関連の用語を解説します。
7回	be動詞、一般動詞の過去形・手指の運動	・be動詞と一般動詞の過去形での表現ができるよう理解を深めます。・手指回りの運動を指示できるようにします。（発展）手指回り関連の用語を解説します。
8回	過去進行形・助動詞の過去形・腕回りの運動	・過去進行形、助動詞の過去形での表現ができるよう理解を深めます。腕回りの運動を指示できるようにします。（基礎）腕回り関連の用語も解説します。
9回	疑問詞の疑問文・胸回りの運動	・疑問詞を使って「いつ、どこで」のような質問ができるよう理解を深めます。・胸回りの運動を指示できるようにします。（発展）胸回り関連の用語も解説します。
10回	未来、存在の表現・関節可動域訓練	未来の予定や「人間には約２０６個の骨があります。」のような存在の表現の理解を深めます。リスク対策を心がけながら関節可動域訓練の為の英語表現ができるようにします。
11回	比較級、最上級・立ち上がり訓練	比較級、最上級（例「人間の骨の中で一番大きな骨は大腿骨です。」等）表現できるようにします。立ち上がるための筋肉トレーニングを英語で指示できるようにします。
12回	受け身の表現・医療関連の英文読解	「～された」を表わす受け身形について理解を深めます。・医療について新しい情報を得るために、論文等も読めるように解説します。（基礎）
13回	現在完了形・医療関連の英文読解	「～したことがあります」を表わす現在完了形の理解を深めます。・医療について新しい情報を得るために、論文等も読めるように解説します。（発展）
14回	講義のレビュー	今までの講義の中で、特に重要な箇所の理解を深めます。
15回	講義のまとめ	講義の疑問点を振り返りながら、理解を深めます。

成績評価	○レポート（B5　5枚前後）40%　○英語練習ノート　60%　※レポート及び英語練習ノートの作成方法については、授業内での指示に従ってください。	受講上のルール・留意点	○テキストは予習時、授業時、復習時に埋めるべき所はどんどん書き込んでください。　○授業時は理解しながら板書を写してください。　○復習時は英語練習ノートを併用し、学んだ英語をスラスラ書けるまで練習を重ねて下さい。理解した英語を流れるように心地よく書けることが一番大切です。　○ノート（英語用の罫線入り）は板書用と英語練習用の２冊（B5版・筆記体見本付き）を用意して下さい。

課題やレポートに関するフィードバック
必要に応じて授業時にフィードバックします。

	書名	著者名	出版社名
教科書	「CD付き　書いて覚える！大人のための英語ドリル」	糸井江美・浜松健二共著	ナツメ社
参考書			
オフィスアワー	授業終了時にお願いします。		

科　目	保健体育	単位・時間数	2単位・30時間
担当講師	深瀬　勝久	学　年	1年生　前期
実績経験	資格 体育学学士・作業療法士	スポーツ技術指導員・作業療法士の実務経験を活かし、身体運動を中心とした実技と公衆衛生等を中心とした保健の講義を行う。	

授業の位置づけ	将来、障がい者の「障がいがあってもスポーツをしたい」というニーズに対して、自らが指導が出来るようになる。また、パラスポーツ等、障がい者スポーツに対しての知識を持ち、将来担当する患者に必要に応じて紹介が出来るようにする。 生涯スポーツの意義を理解し、スポーツへの動機付けを図る。また、障がいや加齢に応じたスポーツの段階付けやルールの変更を行えるようにする。	
到達目標	①対象の状況にあった身体運動プログラムの計画が作成出来る。 ②運動プログラムの進行が出来る。 ③障がい者スポーツの種目やルール等を理解出来る。	
授業形態	講義・演習	対面授業・一部遠隔授業

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	スポーツの特性	オリエンテーション・公衆衛生について・スポーツの種類・目的
2回	スポーツの特性	障がい者スポーツ・生涯スポーツについて
3回	スポーツ演習	デモンストレーション
4回	スポーツ演習	指導計画作成（個別）
5回	スポーツ演習	指導計画作成（グループ　指導計画）
6回	スポーツ演習	指導計画作成（グループ　演習準備）
7回	スポーツ演習	スポーツ演習１～３グループ
8回	スポーツ演習	スポーツ演習１～３グループ
9回	スポーツ演習	スポーツ演習４～６グループ
10回	スポーツ演習	スポーツ演習４～６グループ
11回	スポーツ演習	体育実技（集団でのスポーツ）
12回	スポーツ演習	体育実技（集団でのスポーツ）
13回	パラスポーツ	パラスポーツの紹介
14回	パラスポーツ	パラスポーツの実践
15回	パラスポーツ	パラスポーツの実践

成績評価	演習での参加状況30％ 実技のレポート70％	受講上のルール・留意点	グループで行う演習に関して、必ず役割を持ち、傍観者にならないこと。 実技時には動きやすい服装、運動靴で参加する

課題やレポートに関するフィードバック
演習は終了後にＦＢ、レポートは各自ＦＢを行う。

	書名	著書名	出版社名
教科書	無し		
参考書			
オフィスアワー	月～木　14時～21時30分　教員室 k-fukase@nichireha.ac.jp		

科　目	社会学	単位・時間数	1単位・ 24時間
担当講師	服部　慶亘	学　年	1年生　後期

実績経験	資格	中学生、高校生、（大学生）などの指導経験をもとに「教育相談」を行い、また「教育相談」講座を幼稚園・保育士養成課程で担当したことがある。その時の経験や事例をふまえて講義する。
	文学修士 中学校・高等学校専修免許状 図書館司書 学校図書館司書教諭	

授業の位置づけ	健康の定義に「身体的・精神的・社会的に完全に良好な状態」とありますが、その実現のためには様々な問題が存在します。それらについて、社会学的な発想を以て説明していきます。 講義は、受講生自身も陥りがちな（問題）行動を例示し、パワーポイント・テキスト・プリント・視聴覚資料（マンガ、ＣＤ、ＤＶＤ）などを理解の助けとします。	
到達目標	人間関係の基礎的部分を学び、医療を「施す側」と「施される側」の意識の違いを理解することによって、広く社会に貢献する人材を養成することを目標とします。	
授業形態	講義	対面授業

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	オリエンテーション（ガイダンス）	社会学の性格、および講義の展開方法・目標について確認します。
2回	状況（情況）判断（1）	状況（情況）的影響をもとに、人間の特徴を考えます。
3回	状況（情況）判断（2）	絶対－相対の関係性から、人間の特徴を考えます。
4回	レディネス	「何をしても“うまくいく人”と“うまくいかない人”の違い」と「リハビリ」の関係性を考えます。
5回	社会的動物としての人間（1）	「社会」とは何かを理解し、人間と社会の関係を考えます。
6回	社会的動物としての人間（2）	「福祉」の本質について理解します。
7回	社会的動物としての人間（3）	「生理的早産」である人間について理解します。
8回	社会的動物としての人間（4）	「社会的自我」をもとに『Let It Go』について考えます。
9回	コミュニケーション（1）	「コミュニケーション」の本質について考えます。
10回	コミュニケーション（2）	「コミュニケーション」の仕組みについて理解します。
11回	コミュニケーション（3）	日本人の「コミュニケーション」を理解します。
12回	まとめ	理想的な人間関係・医療関係を築くために、何が必要かを考えます。

成績評価	定期試験（70%）、授業参画度（20%）、小レポート（10%）により、総合的に判断します。	受講上のルール・留意点	定期試験は、記述式の問題を出題します（授業をシッカリ聴いていれば、おそらく大丈夫だと思います）。 小レポートは、授業の最初に簡単なコメントを書いてもらうような形式を数回実施予定です。 なお、「全講義回数の３分の２以上の出席」が単位認定に必要です。

課題やレポートに関するフィードバック
小レポートは、講義内容に即したものをコメントしてもらいます。提出されたコメントは、その日の講義の解説内容に活かし、それをフィードバックとします。

	書名	著書名	出版社名
教科書	改訂ストレス・スパイラル一悩める時代の社会学	服部慶亘	新協（ジャパ
参考書	必要に応じて、資料（プリント）を配布します。		
オフィスアワー	質問・相談などは、講義の前後に教室（または控室）にて受け付けます。 また、担当者出講日以外はメールで受け付けます（メールアドレスは、開講時にお伝えします）。		

科　目	人間関係論	単位・時間数	2単位・ 30時間
担当講師	川村　啓輔	学　年	1年生　前期
実績経験	資格		
	臨床心理士・公認心理師		

授業の位置づけ	対人援助職を志すみなさんにとって，人間関係やコミュニケーションについて学ぶことは必須です。この講義では，人間関係やコミュニケーションにおける基礎的な部分を扱います。はじめに，人間関係やコミュニケーションの概論の講義を行います。その中で，講師の自験例や参考書の事例などを用いながら，ディスカションを行います。また，人を相手にする職業は，同時に自分自身に向き合う必要があります。そのため，心理検査を行うことやロールプレイを通して，自分や相手を知りながら，実践的に学びを深めていきましょう。	
到達目標	臨床現場で必要とされる最も基礎的な能力は人間関係です。まずは自分を知ること，そして，他者を知ることへと繋がるような知識の習得を目指します。対人援助職としても，また，一人の“人”としても，他者の視点を持って，人と関われるということは，大切なことです。このような，コミュニケーションの“核”となるものを身につけることを目標とします。	
授業形態	講義	対面と遠隔の併用授業

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	オリエンテーション	講義内容・進め方の確認
2回	話をきくものとしての心得	対人援助職とは，感情労働，バーンアウト
3回	自己と他者①	自己と他者について，エゴグラムの実施→レポート
4回	自己と他者②	“私”について
5回	コミュニケーション①	コミュニケーションについて
6回	コミュニケーション②	みる力，きく力，伝える力
7回	コミュニケーション③	コミュニケーションの中で起きる現象について
8回	コミュニケーション④	言語・非言語コミュニケーション，身体性について
9回	臨床現場における対人関係	治療者ー患者関係について，治療の空間について
10回	心理検査の体験①	ロールシャッハテストの体験＋ディスカッション→レポート
11回	心理検査の体験②	バウムテストの体験＋ディスカッション→レポート
12回	心理検査の体験③	風景構成法の体験＋ディスカッション→レポート
13回	子どもの臨床・大人の臨床	主に精神疾患や発達障害について取り上げる
14回	事例検討	教科書に載っている事例を使いディスカッションをする
15回	まとめ	全体のまとめ，学期末レポートについて

成績評価	レポートの提出	受講上のルール・留意点	授業の中で何度かレポート課題を出します（現段階では４回を予定）。さらに，学期末の試験として，もう１回レポート課題を出します。計５回のレポート提出によって，成績の評価をします。 ※下記の参考書『看護のための精神医学』は必要な回にコピーして配布するので，購入しなくて良いです。

課題やレポートに関するフィードバック
基本的にメールを使って，講師にレポートを提出してもらいます。疑問点や質問があれば，メールに書いていただければ，返信いたします。

	書名	著書名	出版社名
教科書	PT・OTのためのコミュニケーション実践ガイド	山口美和	医学書院
参考書	看護のための精神医学	中井久夫・山口直彦	医学書院
オフィスアワー	授業前後の休憩時間		

科　目	解剖学Ⅰ	単位・時間数	1単位・　30時間
担当講師	肥後　心平	学　年	1年生　前期
実績経験	資格		
	医学（博士）		

授業の位置づけ	人体各部の名称および構造の理解	
到達目標	解剖学、細胞学、組織学、発生学の概要を理解し、骨・関節、筋の位置と構造を理解、習得する	
授業形態	講義	対面場合によってはオンデマンド

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	解剖学総論	解剖学の内容、用語、機能と形態の関係
2回	細胞学概論・組織学総論	細胞の構造と機能、組織の分類と構造、機能
3回	骨学・関節学	概論・骨と関節の組織学
4回	骨学・関節学	頭蓋骨
5回	骨学・関節学	軸骨格
6回	骨学・関節学	上肢の骨
7回	骨学・関節学	下肢・骨盤の骨
8回	確認テスト・解説	1-7回授業内容の確認テストと解答解説
9回	筋肉学	上肢の筋1
10回	筋肉学	上肢の筋2
11回	筋肉学	下肢の筋1
12回	筋肉学	下肢の筋2
13回	筋肉学	頭部・頸部・胸部の筋
14回	筋肉学	腹部・背部の筋
15回	確認テスト・解説	9-14回授業内容の確認テストと解答解説

成績評価	定期試験・レポート	受講上のルール・留意点	授業時間数の３分の１を超えて欠席した者には単位を与えない

課題やレポートに関するフィードバック

	書名	著書名	出版社名
教科書	標準理学療法学・作業療法学 解剖学	野村　嵯	医学書院
参考書			
オフィスアワー			

科　目	解剖学Ⅱ	単位・時間数	1単位・　30時間
担当講師	澤井　信彦	学　年	1年生　後期
実績経験	資格		
	医学（博士）		

授業の位置づけ	人体各部の名称および構造の理解	
到達目標	脈管および内臓の位置と構成を理解し、用語を習得する	
授業形態	講義	オンデマンド授業

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	脈管系概論・心臓の構造	
2回	心臓の構造と働き	刺激伝導系、心臓の栄養血管
3回	動脈系	頭頚部、四肢、体幹の動脈系
4回	静脈系	頭頚部、四肢、体幹の静脈系
5回	リンパ系	リンパ管、リンパ組織と免疫系
6回	消化器系	消化管
7回	消化器系	消化腺
8回	呼吸器系	上気道、縦隔
9回	呼吸器系	下気道、気管支、肺
10回	泌尿器系	骨盤内臓器、腎臓の構造
11回	泌尿器系	尿管、膀胱、尿道
12回	男性生殖器系	
13回	女性生殖器系	
14回	内分泌系	内分泌腺、視床下部-下垂体
15回	内分泌系	末梢の内分泌組織

成績評価	定期試験・レポート	受講上のルール・留意点	授業時間数の３分の１を超えて欠席した者には単位を与えない

課題やレポートに関するフィードバック

	書名	著書名	出版社名
教科書	標準理学療法学・作業療法学 解剖学	野村　嵯	医学書院
参考書			
オフィスアワー			

科　目	解剖学Ⅲ	単位・時間数	1単位・ 30時間
担当講師	五十嵐　広明	学　年	1年生　前期
実績経験	資格 高等学校教諭二級普通免許状理科 中学校教諭一級普通免許状　理科	東邦大学医学部教員34年（その内専任講師27年）、 東京保健医療専門職大学リハビリテーション学部教授（1年） 医学部の教員として長年解剖学教育に携わって来た経験を基に、単に解剖学用語を羅列して覚えてもらう講義ではなく、その用語の深い意味合い、用語と用語の関連性などを、独自に作成した講義資料、自分で作成した顕微鏡写真、多くの蔵書から選んだ画像などを使用して講義を行う。	

授業の位置づけ	神経組織の成り立ちを学習した後、神経系がどのような過程で形成されるのか（発生）を習得する。末梢から中枢（脳、脊髄）に、あるいは中枢（脳、脊髄）から末梢に情報を伝える神経路（伝導路）を念頭に置いて、脊髄から大脳皮質に至る形で講義を進行させる。末梢から脳へ感覚を伝える代表的な感覚性神経路（上行性神経路）、伝えられた刺激に対する脳の反応を末梢に伝える運動性神経路（下行性神経路）を学んだ後、末梢神経である脳脊髄神経と自律神経系の成り立ちを習得する。最後に、中枢に伝える感覚の受容器が存在する皮膚、および視覚器、平衡聴覚器の発生と構造（つくり）および簡単な働きについて学習する。
到達目標	神経系を構成する神経組織、および神経系の発生を理解したうえで、神経系（中枢神経系、末梢神経系）の構造（つくり）を理解する。さらに、感覚器（皮膚、視覚器、平衡聴覚器）の構造（つくり）を理解する。
授業形態	講義　　「対面授業」あるいは「対面と遠隔の併用授業」

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	解剖学総論	解剖学とは、解剖学の歴史、解剖学用語（人体の区分と名称）
2回	組織学総論(神経組織)	組織とは、神経細胞(ニューロン)、神経終末、シナプス、神経膠細胞(グリア)
3回	神経系総論	神経系の発生と区分、脳室、脈絡叢、灰白質、白質、核、神経節、髄膜
4回	神経系各論　(中枢神経系) 1	脊髄、菱脳（髄脳）：延髄
5回	神経系各論　(中枢神経系) 2	菱脳（後脳）：橋、小脳
6回	神経系各論　(中枢神経系) 3	中脳、前脳：間脳
7回	神経系各論　(中枢神経系) 4	前脳：終脳
8回	神経系各論 (中枢神経系の伝導路) 1	神経路（伝導路）の種類、上行性伝導路（体性感覚および深部感覚の伝導路）
9回	神経系各論 (中枢神経系の伝導路) 2	上行性伝導路(視覚の伝導路、聴覚の伝導路)、下行性伝導路(錐体路系、錐体路系以外の伝導路)
10回	神経系各論（末梢神経系）1	脳脊髄神経（脳神経）
11回	神経系各論（末梢神経系）2	脳脊髄神経（脊髄神経）
12回	神経系各論（末梢神経系）3	自律神経系（交感神経、副交感神経）
13回	感覚器1	皮膚
14回	感覚器2	視覚器〔眼球、副眼器（眼瞼、結膜、眼筋）〕
15回	感覚器3	平衡聴覚器（外耳、中耳、内耳）

成績評価	全講義終了後に筆記試験を実施して評価する(100%)。　試験の問題形式は国家試験に準拠した多肢選択問題（A-type, X2-type）とする。	受講上のルール・留意点	授業時間数の3分の1以上欠席した者には単位を与えない

課題やレポートに関するフィードバック

	書名	著書名	出版社名
教科書	予め配付するプリントを使用して講義を行うので、特に教科書は指定しない。		
参考書			
オフィスアワー	授業前後の休憩時間		

科　目	機能解剖学Ⅰ	単位・時間数	1単位・　30時間
担当講師	福澤　阿弾	学　年	1年生　前期
実績経験	資格 作業療法士	作業療法士として回復期リハビリテーション病院、老人保健施設、通所介護施設、訪問看護ステーション、放課後等デイサービスにて勤務経験あり。 その経験を活かし、身体の動きを理解するための構造や運動および骨・筋・神経・脈管の触察について実技を交えながら講義を行う。	

授業の位置づけ	作業療法士として治療を行うにあたり、運動器の構造と運動のつながりを理解することはとても重要である。そのつながりを理解したうえで、骨や筋・神経・脈管を骨標本だけではなく人体を触察することで理解を深めていき、作業療法評価学や治療学に活かしていく。	
到達目標	運動器の構造と運動のつながりを理解する。 骨・筋・神経・脈管の触診ができ、筋の起始・停止・走行を理解する。	
授業形態	講義・演習	対面授業

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	身体部位の名称 関節の名称と分類	身体部位の名称及び関節の名称と分類を骨標本と照らし合わせながら理解する
2回	運動の面と軸 関節運動の名称	運動の面と軸を基に関節運動の名称を理解する
3回	下肢・体幹の骨・関節の名称	下肢・体幹の骨や関節の名称を骨標本と照らし合わせながら理解する
4回	下肢・体幹の関節運動について	下肢・体幹の関節運動を理解する
5回	下肢・体幹の骨指標の触察	骨盤・大腿骨・脛骨・腓骨・足根骨・趾骨の骨指標を触察する
6回	下肢の筋・神経・脈管を触察①	大殿筋・中殿筋・大腿筋膜張筋・縫工筋の触察をする
7回	下肢の筋・神経・脈管を触察②	梨状筋・大腿方形筋・腸骨筋・大腰筋・大腿動脈の触察をする
8回	下肢の筋・神経・脈管を触察③	大腿四頭筋・大腿二頭筋・半腱様筋・半膜様筋の触察をする
9回	下肢の筋・神経・脈管を触察④	長内転筋・大内転筋・薄筋・前脛骨筋の触察をする
10回	下肢の筋・神経・脈管を触察⑤	長趾伸筋・長母趾伸筋・長腓骨筋・短腓骨筋の触察をする
11回	下肢の筋・神経・脈管を触察⑥	腓腹筋・ヒラメ筋・後脛骨筋の触察をする
12回	体幹の筋・神経・脈管を触察	腰方形筋・腹直筋・内腹斜筋・外腹斜筋・膝窩動脈・足背動脈の触察をする
13回	形態計測について	形態計測の目的や手順、方法、注意点についての講義
14回	下肢の肢長計測	下肢の肢長計測を演習にて行う
15回	下肢の周径計測	下肢・体幹の周径計測を演習にて行う

成績評価	筆記試験：６０％ 実技試験：４０％	受講上のルール・留意点	・講義には指定した服装、身だしなみで出席する。 ・始業時に着替え等の準備ができていない場合は遅刻とする。 ・スマホ等の機器を不要に操作したり私語が多いなど、他の生徒の受講の妨げになる場合は退室を命ずることがある。 ・講義時間数の1/3以上欠席したものには単位を与えない。

課題やレポートに関するフィードバック
講義では全体に、演習では全体または個別にフィードバックを行う

	書名	著書名	出版社名
教科書			
参考書			
オフィスアワー	授業前後の休憩時間		

科　　目	機能解剖学Ⅱ	単位･時間数	1単位･　30時間
担当講師	福澤　阿弭	学　年	1年生　前期
実績経験	資格 作業療法士	作業療法士として回復期リハビリテーション病院、老人保健施設、通所介護施設、訪問看護ステーション、放課後等デイサービスにて勤務経験あり。 その経験を活かし、身体の動きを理解するための構造や運動および骨・筋・神経・脈管の触察について実技を交えながら講義を行う。	

授業の位置づけ	作業療法士として治療を行うにあたり、運動器の構造と運動のつながりを理解することはとても重要である。 そのつながりを理解したうえで、骨や筋・神経・脈管を骨標本だけではなく人体を触察することで理解を深めていき、作業療法評価学や治療学に活かしていく。	
到達目標	運動器の構造と運動のつながりを理解する。 骨・筋・神経・脈管の触診ができ、筋の起始・停止・走行を理解する。	
授業形態	講義・演習	対面授業

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	身体部位の名称 関節の名称と分類	身体部位の名称及び関節の名称と分類を骨標本と照らし合わせながら理解する
2回	頭頸部・上肢の骨・関節の名称	頭頸部・上肢の骨や関節の名称を骨標本と照らし合わせながら理解する
3回	頭頸部・上肢の関節運動について	頭頸部・上肢の関節運動を理解する
4回	頭頸部・上肢の骨指標の触察	頭蓋骨・胸骨・鎖骨・肩甲骨・上腕骨・橈骨・尺骨・手根骨・指骨の骨指標を触察する
5回	上肢の筋・神経・脈管を触察①	僧帽筋・大菱形筋・小菱形筋・肩甲挙筋・前鋸筋の触察をする
6回	上肢の筋・神経・脈管を触察②	大胸筋・広背筋・大円筋・棘上筋・棘下筋の触察をする
7回	上肢の筋・神経・脈管を触察③	小円筋・肩甲下筋・三角筋・烏口腕筋の触察をする
8回	上肢の筋・神経・脈管を触察④	上腕三頭筋・上腕二頭筋・上腕筋・腕橈骨筋の触察をする
9回	上肢の筋・神経・脈管を触察⑤	撓側手根屈筋・長掌筋・尺側手根屈筋・円回内筋・方形回内筋の触察をする
10回	上肢の筋・神経・脈管を触察⑥	浅指屈筋・深指屈筋・長母指屈筋・長橈側手根伸筋・短橈側手根伸筋・尺側手根伸筋の触察をする
11回	上肢の筋・神経・脈管を触察⑦	総指伸筋・回外筋・長母指外転筋・長母指伸筋・短母指伸筋の触察をする
12回	上肢の筋・神経・脈管を触察⑧	短母指外転筋・短母指屈筋・母指対立筋・小指対立筋・母指内転筋の触察をする
13回	頭頸部の筋・神経・脈管を触察	胸鎖乳突筋・頸動脈・上腕動脈・橈骨動脈の触察をする
14回	上肢の肢長計測	上肢の肢長計測を演習にて行う
15回	上肢・体幹の周径計測	上肢・体幹の周径計測を演習にて行う

成績評価	筆記試験：６０％ 実技試験：４０％	受講上のルール・留意点	・講義には指定した服装、身だしなみで出席する。 ・始業時に着替え等の準備ができていない場合は遅刻とする。 ・スマホ等の機器を不要に操作したり私語が多いなど、他の生徒の受講の妨げになる場合は退室を命ずることがある。 ・講義時間数の1/3以上欠席したものには単位を与えない。

課題やレポートに関するフィードバック
講義では全体に、演習では全体または個別にフィードバックを行う

	書名	著書名	出版社名
教科書			
参考書			
オフィスアワー	授業前後の休憩時間		

科　　目	機能解剖学Ⅲ	単位･時間数	1単位･　　30時間
担当講師	阿部　英人	学　年	1年生　後期
実績経験	資格 作業療法士	病院３年、介護関連施設７年、教育機関１０年	

授業の位置づけ	身体障害分野において神経疾患患者を担当する機会は多く、その障害像を理解する上で各神経系の構造、機能などの知識は非常に重要である。また、前期期間に既に履修している内容であるため、知識として習得されているか確認、復習する授業である。 授業方法については講義とグループワークを行う。グループワークでは学習したことをグループ内で発表し、知識の確認を行う。	
到達目標	神経系の構造および機能を図示し説明することが出来る。	
授業形態	講義	対面授業または対面と遠隔の併用授業

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	神経一般	オリエンテーション　神経とは、ニューロンの構造
2回	神経一般	神経の興奮と伝導、興奮の伝達
3回	中枢神経系	大脳の構造と機能
4回	中枢神経系	大脳の構造と機能
5回	中枢神経系	大脳の構造と機能
6回	中枢神経系	間脳の構造と機能
7回	中枢神経系	間脳の構造と機能
8回	中枢神経系	脳幹の構造と機能
9回	中枢神経系	脳幹の構造と機能
10回	中枢神経系	小脳の構造と機能
11回	中枢神経系	小脳の構造と機能
12回	運動機能の調節	錐体路と錐体街路
13回	運動機能の調節	神経の伝導路（上行性伝導路と下行性伝導路）
14回	末梢神経	腕神経叢の構成、上肢の筋と神経支配
15回	末梢神経	上肢の筋と神経支配

成績評価	課題４０％（各単元ごとに実施する） 定期試験６０％	受講上のルール・留意点	

課題やレポートに関するフィードバック
フィードバックは全体に実施する

	書名	著書名	出版社名
教科書	標準理学療法学・作業療法学　専門基礎分野　解剖学	奈良 勲 / 鎌倉 矩子	医学書院
参考書			
オフィスアワー	休憩時間等		

科　目	生理学Ⅰ	単位・時間数	1単位・ 30時間
担当講師	飯村　佳織	学　年	1年生　前期
実績経験	資格 はり師、きゅう師	生理学の研究者（専門家）としての経験と、教育機関における非常勤講師としての経験を活かし、生理学についてまんべんなくかつ重要な点を正確に理解できるよう講義を行う。	

授業の位置づけ	教科書に沿って講義します。生理学Ⅰで学ぶ「神経系」は、生理学の他分野の消化器や泌尿器などと違いイメージしづらく、初めて生理学を学ぶ者にとっては、理解が難しい内容も多く含んでいると思います。しかし、国家試験で出題される頻度が高く、また、ほかの教科との関連も深い分野となります。そのため、生理学全体のなかで多くの時間をこの神経系にとり、一つ一つ丁寧に解説していきたいと思います。	
到達目標	人体の生理機能のうち、神経系・筋・運動について理解し基礎知識を身につける。	
授業形態	講義	主に遠隔授業 （場合により対面と遠隔の併用授業）

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	総論	身体の成り立ち，生体恒常性，細胞，物質代謝
2回	神経系一般（1）	神経とは，ニューロンの構造と働き
3回	神経系一般（2）	神経の興奮と伝導，興奮の伝達
4回	神経系　（1）	中枢神経系（分類と機能、脊髄）
5回	神経系　（2）	中枢神経系（小脳、脳幹、間脳）
6回	神経系　（3）	中枢神経系（大脳）
7回	神経系　（4）	末梢神経系
8回	神経系　（5）	自律神経系
9回	筋	骨格筋の構造と働き、筋の収縮の仕組み、筋のエネルギー供給の仕組み
10回	運動　（1）	骨格筋の神経支配
11回	運動　（2）	運動の調節（脊髄）
12回	運動　（3）	運動の調節（脳幹、小脳、大脳基底核）
13回	運動　（4）	運動の調節（大脳皮質）
14回	運動　（5）	錐体路系と錐体外路系、発声と発語
15回	総復習	これまでのまとめ、定期試験について

成績評価	①講義毎に実施する課題（小テストなど）　50% ②定期試験　50%	受講上のルール・留意点	①毎回講義の最後に課題を出し、講義時間内で実施し、提出していただきます（授業の進み具合によって変更あり）。 ②すべての講義終了後に定期試験を実施します。また、授業時間数の３分の１以上欠席した者には単位を与えることはできません。

課題やレポートに関するフィードバック
FBは講義内で全体に実施する。

	書名	著書名	出版社名
教科書	生理学第3版	内田さえ・原田玲子ほか	医歯薬出版
参考書			
オフィスアワー	授業前後の休憩時間		

科　目	生理学Ⅱ	単位・時間数	1単位・ 30時間
担当講師	飯村　佳織	学　年	1年生　前期

実績経験	資格	生理学の研究者（専門家）としての経験と、教育機関における非常勤講師としての経験を活かし、生理学についてまんべんなくかつ重要な点を正確に理解できるよう講義を行います。
	はり師、きゅう師	

授業の位置づけ	教科書に沿って講義します。生理学Ⅱでは生理学Ⅰで学んだ「神経・筋・運動系」以外のすべての生理学の分野を学びます。範囲が広い分1回の授業で実施する容量も多いです。そのため、各分野「血液・循環・呼吸・消化と吸収・栄養代謝・体温・排泄・内分泌・生殖・感覚」で特に重要な点を中心に解説していきたいと思います。生理学Ⅰと生理学Ⅱで教科書1冊を学び終えます。	
到達目標	人体の生理機能のうち，血液・循環・呼吸・消化と吸収・栄養代謝・体温・排泄・内分泌・生殖．感覚について理解し，基礎知識を身につける。	
授業形態	講義	主に遠隔授業 （場合により対面と遠隔の併用授業）

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	血液・免疫	血液の組成と働き、血球の生成・分化、止血作用、白血球と免疫機能
2回	循環（1）	心血管系、心臓の構造と機能
3回	循環（2）	血液循環、循環の調節
4回	呼吸	呼吸器系，ガス交換と運搬、呼吸運動とその調節
5回	消化と吸収（1）	消化管の運動、排便
6回	消化と吸収（2）	消化液の分泌、栄養素の吸収、肝臓の働き
7回	栄養・代謝（1）	肝臓の働き、栄養素の働きと代謝（1）
8回	栄養・代謝（2）、体温	栄養素の働きと代謝（2）、体温調節
9回	排泄	腎臓の尿生成機構、蓄尿と排尿
10回	内分泌（1）	ホルモンの特徴、各ホルモンの種類とその働き（1）
11回	内分泌（2）	各ホルモンの種類とその働き（2）
12回	生殖・成長と老化	男性・女性生殖器の働き、妊娠と出産、成長と老化
13回	感覚（1）	感覚の一般、体性感覚、内臓感覚、痛覚
14回	感覚（2）	味覚と嗅覚、聴覚、平衡感覚、視覚
15回	総復習	これまでのまとめ、定期試験について

成績評価	①講義毎に実施する課題 （小テストなど）　40％ ②定期試験　60％	受講上のルール・留意点	①毎回講義の最後に課題を出し、講義時間内で実施し、提出していただきます（授業の進み具合によって変更あり）。 ②すべての講義終了後に定期試験を実施します。 また、授業時間数の３分の１以上欠席した者には単位を与えることはできません。

課題やレポートに関するフィードバック
FBは講義内で全体に実施します。

	書名	著書名	出版社名
教科書	生理学第3版	内田さえ・原田玲子ほか	医歯薬出版
参考書			
オフィスアワー	授業前後の休憩時間		

科　目	生理学実習	単位・時間数	1単位・　30時間
担当講師	坪井・越智・海津	学　年	1年生　後期

実績経験	資格	日本大学の専任講師として生理学の講義および実習指導歴３５年。その経験をもとに、生体に起こる現象を実際に観察し、座学の知識の再確認となる実習にします。
	歯科医師	

授業の位置づけ	座学で習った生体の運動機能、感覚機能の知識の再確認および理解を深めることができる実習を目指します。ヒトの骨格筋から筋肉活動状態を表す筋電図を記録することにより、実際の運動時や負荷をかけた時の筋の活動状態変化を観察します。それによって、反射や随意運動に関する理解を深めます。ウシガエルの坐骨神経標本を用いて複合活動電位を記録します。それによって、活動電位の発生、伝導やシナプス伝達についての知識を再確認します。また、皮膚への刺激により誘発される触覚や痛覚の感覚閾値、感覚点の分布、２点弁別閾の測定を行います。それによって、感覚の受容機構、認知機構などの知識の再確認と理解を深めていきます。
到達目標	人体の運動機能（反射、随意運動の機構）、神経の活動電位の発生と伝導機構、感覚機能（皮膚感覚機構）を説明できる。
授業形態	実習と講義　　対面

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	オリエンテーション、実習講義（運動と筋電図）	実習の進め方、注意事項、成績評価について、筋の構造と収縮の講義、運動と筋電図実習のやり方説明
2回	実習（運動と筋電図）-1	四肢関節の伸張や屈曲運動とそれに伴なう筋電図放電の観察の実習
3回	実習（運動と筋電図）-2	四肢関節の伸張や屈曲運動とそれに伴なう筋電図放電の分析の実習
4回	データ整理（運動と筋電図）	運動と筋電図実習のデータ整理、レポート作成
5回	実習講義（運動負荷と筋電図）	反射と随意運動の講義、運動負荷と筋電図実習のやり方説明
6回	実習（運動負荷と筋電図）-1	運動負荷時の筋電図の記録の実習
7回	実習（運動負荷と筋電図）-2	運動負荷時の筋電図の分析の実習
8回	実習講義（神経の興奮と伝導）	神経の興奮、伝導、シナプス伝達に関する講義、神経の興奮と伝導の実習のやり方説明
9回	実習講義（皮膚感覚）	体性感覚に関する講義、皮膚感覚実習のやり方説明
10回	実習（神経の興奮と伝導）-1	カエルの坐骨神経標本を用いた興奮と伝導の実習（観察と記録）
11回	実習（神経の興奮と伝導）-2	カエルの坐骨神経標本を用いた興奮と伝導の実習（分析）
12回	実習（皮膚感覚）	皮膚感覚閾値（触覚閾値、痛覚閾値、2点弁別閾など）の測定実習
13回	データ整理（皮膚感覚）	皮膚感覚閾値実習に関するデータ解析、レポート作成
14回	データ整理（運動負荷と筋電図）	運動負荷時の筋電図の実習のデータ整理、レポート作成
15回	データ整理（神経の興奮と伝導）	神経の興奮と伝導実習のデータ解析、レポート作成

成績評価	１０枚程度の実習レポート（ひとり合計４通）により評価する。 ２５ｘ４通＝１００	受講上のルール・留意点	欠席１回まではレポート（２０枚程度）を課す。２回以上の欠席をすると単位を与えない。班単位で実習をするので、積極的に参加すること。

課題やレポートに関するフィードバック
レポート返却によりフィードバックを実施する。

	書名	著書名	出版社名
教科書	教科書は特に指定しない。資料を配布する。		
参考書	生理学　第3版	東洋療法学校協会（内田さえ、原田玲子他著）	医歯薬出版
オフィスアワー	授業前後の休憩時間またはメール		

科　　目	運動学Ⅰ	単位・時間数	1単位・　30時間
担当講師	栗原実里	学　年	1年生　後期
実績経験	資格	資格：作業療法士 病院勤務、訪問リハビリテーション、訪問看護でのリハビリテーションを経験。 実務経験を交え講義を行う。	

授業の位置づけ	リハビリテーションで対象者を評価・治療するためには、身体の基本的な構造や機能、各関節の動き方を理解しておく必要がある。運動学Ⅰでは生体力学、解剖学・生理学の知識を用い、上肢の運動メカニズムや機能障害について、講義と演習を交えて学習していく。	
到達目標	上肢の関節運動を、解剖学、生理学、運動学の専門用語を用いて適切に表現できる。 上肢の正常な運動メカニズムや、機能障害について説明できる。	
授業形態	講義と演習 対面授業	

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	生体力学の基礎知識①	骨・関節について
2回	生体力学の基礎知識②	筋の構造と筋力について
3回	生体力学の基礎知識③	重力、モーメント、てこについて
4回	肩甲帯・肩・肘・前腕	構造と機能
5回	肩甲帯・肩・肘・前腕	筋の走行と作用
6回	肩甲帯	運動メカニズム
7回	肩	運動メカニズム
8回	肩	運動メカニズム
9回	肘関節	運動メカニズム
10回	前腕	運動メカニズム
11回	手関節・手指	構造と機能
12回	手関節・手指	筋の走行と作用
13回	手関節・手指	運動メカニズム
14回	手の機能と機能障害	手のアーチ、手の機能、手の機能障害と変形
15回	手の機能と機能障害	上肢の神経支配と感覚

成績評価	課題：40% 筆記試験：60%	受講上のルール・留意点	課題は4回提出（各10%） ①生体力学の基礎知識 ②肩甲帯・肩の運動 ③肘関節・前腕の運動 ④手関節・手指の運動と機能障害 課題は10問程度の設問について解答するものである。 授業時に配布するので、欠席時は取りにくること。 （各A4用紙2枚程度）

課題やレポートに関するフィードバック
課題を返却し、全体に行う。

	書名	著書名	出版社名
教科書	基礎運動学　第6版補訂	中村隆一、齋藤宏、長崎浩	医歯薬出版
参考書	PT・OTビジュアルテキスト専門基礎　運動学	山崎敦	羊土社
オフィスアワー	火・土・日曜日以外、午後17時まで。 それ以外はメールで相談。		

科　目	人間発達学	単位・時間数	1単位・　30時間
担当講師	大山　敬子	学　年	1年生　後期
実績経験	資格 作業療法士	平成１３年作業療法士免許取得後、０歳～５０歳代の発達障碍児者にかかわり、特別支援学校にて勤務、人間発達学の重要性を講義に取り入れていきたい。	

授業の位置づけ	胎児期から高齢期までの人間の発達について学びます。各時期において、身体的機能・運動的機能・認知的機能・情緒的社会機能がどのような相互関係で発達するのかを学習します。	
到達目標	各時期についてまとめたプリントを配布し、プリントに沿って授業を進めて行きます。	
授業形態	講義	対面授業、場合によっては遠隔授業（ZOOM）

授業計画

回数	項目	
１回	オリエンテーション 人間発達学とは・胎児期	人間発達学で何を学ぶ？発達概念の歴史変遷。
２回	胎児期：反射と反応	人間の発達は胎児期から始まっている　　生きるための反射と反応
３回	新生児期	『出生から4週間目』の新生児の発達
４回	乳児期前半	『出生後4～8週』『出生後2～5ヵ月』の２つの時期。
５回	乳児期後半	『出生後5～8ヵ月』『出生後8～12ヵ月』の２つの時期。
６回	乳児期の摂食『離乳食』	哺乳から離乳食完了までの口腔機能の発達
７回	NATIONAL GEOGRAPHIC 「赤ちゃんの不思議etc」	１歳までの発達の振り返りとビデオでの学習
８回	幼児期前半（１歳台）	『12ヵ月～18ヵ月』『18ヵ月～24ヵ月』の２つの時期。
９回	幼児期前半（２歳台）	『24ヵ月～30ヵ月』『30ヵ月～36ヵ月』の２つの時期。
10回	幼児期後期（年少・年中）	『3歳代(幼少)』『4歳代(年中)』の２つの時期。
11回	幼児期後期（就学期前の１年）	『5歳代(年長・就学前)』
12回	学童期	小学生の発達
13回	青年期	『前期:中学生・高校生』『後期:18～22歳』の１つの時期。
14回	成人期	『前期:22～35歳』『中期:35～50歳』『後期：50～65歳』
15回	高齢期	『65歳～』人間は死ぬまで発達する？

成績評価	筆記試験100％	受講上のルール・留意点	授業時間数の３分の１を超えて欠席した者には単位を与えない

課題やレポートに関するフィードバック

	書名	著書名	出版社名
教科書	コメディカルのための専門基礎分野テキスト 人間発達学　　第3版	福田　恵美子 編集	中外医学社
参考書	標準理学療法学・作業療法学　専門基礎分野　人間発達学 障害児者の摂食・嚥下・呼吸リハビリテーション		医学書院 医歯薬出版
オフィスアワー			

科　　目	臨床心理学	単位・時間数	1単位・　30時間
担当講師	橋本　景子	学　年	1年生　前期
実績経験	資格 臨床心理士	カウンセラーとして32年間、これまでのべ２万人を超えるカウンセリングを行ってきた。2020年に臨床心理士資格を取得。その後はSCとして、中学校や高校、専門学校、大学等でカウンセリングとそれに関する講義を行ってきたので、人の心について考え、事例を元に実践的な講義を行っていく。(三重県臨床心理士会・元会長)	

授業の位置づけ	私たちの心のしくみについて、臨床心理学の立場から”心”というものを捉えていく。そうすることで作業療法士として利用者に関わる時、あるいは一人の大人として人に関わる時、人間理解に通じるだけではなく、自分自身の生き方にも変化が生じてくる。
到達目標	①心の病・心の傷はなぜ起きるのかを理解する ②ストレスから起きる様々な症状についてその概略を知る ③心理療法に関する著名な人物のアプローチを知る ④様々な心理療法についてその概略を知る ⑤この授業を通して、自分を振り返るきっかけとする
授業形態	講義　　遠隔授業（ZOOM）

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	臨床心理学とは	カウンセリングと相談の違い/心の構造　意識と無意識
2回	心理的問題の分類①	神経症と精神病/統合失調症とうつ病
3回	心理的問題の分類②	神経症レベルの問題
4回	心理的問題の分類③	PTSD、心身症、知的障害、学習障害等について
5回	心理的問題の分類④	社会的行動の問題/人格障害等について
6回	心理アセスメント	さまざまな心理テスト
7回	心理療法①	フロイトの理論
8回	心理療法②	ユングの理論とロジャースの理論
9回	心理療法③	行動療法→認知行動療法へ、論理療法、ゲシュタルト療法
10回	その他の療法	箱庭療法、芸術療法、内観療法、催眠療法
11回	現代の病	多重人格　ビデオ視聴　「現代の病」を知る
12回	カウンセリングの実際①	DVDから学ぶ/DVD視聴
13回	カウンセリングの実際②	DVDから「カウンセリング」というものを理解する/ディスカッションと質問
14回	カウンセリングの実際③	DVDから絵画療法と箱庭療法の見方を学ぶ
15回	まとめと振り返り	心理療法のプロセスとまとめ

成績評価	試験80%、発表や質問等20%	受講上のルール・留意点	人は自分で言葉を発し、それを自分の耳で聞いて初めて自分の思いを本当に理解することができます。講義を止めても構いませんので、ぜひあなたの頭に浮かんできたことを言葉にしてみてください。

課題やレポートに関するフィードバック
FBは全体に実施する

	書名	著書名	出版社名
教科書	現代心理学入門5 臨床心理学	倉光　修	岩波書店
参考書	ドラマなどから学ぶのが一番だと思っています。		
オフィスアワー	作業療法学科の教員を通して連絡をしてください。		

科　　目	小児科学	単位・時間数	１単位・１５時間
担当講師	右田　真　　他	学　　年	１年・後期

教育目標	小児科では理学療法、作業療法を要する小児・思春期に特有の疾患について理解する。
教育内容	治療に理学療法、作業療法が重要な役割を果たす小児・思春期の疾患について講義形式で習得する。

講義内容

回数	担当講師	日程	講　義　内　容
１回	小児科（川上）	10/19	成長・発達
２回	（川上）	10/19	神経疾患
３回	（右田）	10/25	先天異常
４回	（高木）	11/1	筋、骨疾患
５回	（平山）	11/8	重症心身障害児
６回	（平山）	11/15	発達障害
７回	（右田）	11/22	小児の代表的な疾患１
８回	（植田）	11/29	小児の代表的な疾患２

定期試験は別日程にて実施

評価方法	試験にて評価する。

教科書 標準理学療法学･作業療法学　小児科学（医学書院）
参考書　ナースのミカタ　小児看護（医学書院）

科　目	精神医学	単位・時間数	2単位・ 30時間
担当講師	埜崎　都代子	学　年	1年生　後期
実績経験	資格 作業療法士・精神保健福祉士	作業療法士として40年、このうち教員経験が30年ほどですが、常勤・非常勤を含め、ずっと臨床に並行して携わっております。臨床は、神経難病・精神科デイケア・認知症高齢者・発達障害児支援などの経験があり、現在も認知症高齢者・発達障害児支援に携わっています。25年ほど前に精神保健福祉士の資格を取得しています。	

授業の位置づけ	精神科作業療法学を学ぶにあたって土台となる精神医学の基礎知識を養う。代表的な精神疾患について疾患概念・症状・治療法等について理解し、知識を習得する。	
到達目標	各種精神疾患の疾患概念・症状・治療法等について知識を習得する	
授業形態	講義・演習	対面もしくは遠隔授業との併用

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	精神障害の分類	精神医学とは。精神障害の成因と分類
2回	精神機能の障害と精神症状	精神症状の把握と各種症状の概念
3回	精神障害の分類診断と評価	診断・評価の方法
4回	脳器質性精神障害	認知症・その他
5回	精神作用物質による精神および行動の障害	アルコール・薬物依存
6回	てんかん	てんかんの定義・種類
7回	統合失調症	統合失調症の疾患概念
8回	統合失調症	統合失調症患者の行動特性
9回	気分障害	うつ病
10回	気分障害	躁うつ病
11回	神経症性障害	不安神経症・強迫神経症・その他
12回	生理的障害および身体的要因に関連した疾患	摂食障害その他
13回	人格障害	パーソナリティー障害、行動障害
14回	発達障害	精神遅滞・自閉症・自閉症スペクトラムその他
15回	まとめ	精神医療の歴史・リハビリテーションその他

成績評価	レポート20%、発表１０%・テスト７０%の予定	受講上のルール・留意点	レポート1回、発表1回、試験1回実施する予定。

課題やレポートに関するフィードバック
FBは、授業内その他で適宜行う。レポートは返却する。

	書名	著書名	出版社名
教科書	標準理学療法・作業療法「精神医学」	奈良勲、鎌倉矩子　監修	医学書院
教科書	統合失調症患者の行動特性：その支援とＩＣＦ	昼田源四郎	金剛出版
オフィスアワー	授業前後の休憩時間		

作業療法学科　　昼間部

科　　目	リハビリテーション医学概論	単位・時間数	１単位・３０時間
担当講師	草野 修輔	学　　年	１年、前期
実務経験	資格：医師	経験年数	病院・教育機関等

教育目標	リハビリテーション医学概論に関する基本的知識を習得する。　　授業方法は対面にて行う。
教育内容	リハビリテーション医学の歴史、概念、理念、障害分類、障害の診断・評価法、リハビリテーション関連職種の役割、社会福祉制度、義肢装具、代表的疾患のリハビリテーションなどについて、最新情報を含むプリント資料などを用いて講義を行う。

講義内容

回数	項　　目	講　　義　　内　　容
1回	リハビリテーション総論①	リハビリテーション医学の歴史、定義、障害分類
2回	リハビリテーション総論②	リハビリテーション関連職種、関連法規、社会福祉制度
5回	障害学①	運動障害・感覚障害
6回	障害学②	高次脳機能障害　他
7回	リハビリテーション評価・検査法・治療法	各種障害の評価法・検査法、リハビリテーションにおける治療法
8回	リハビリテーション治療学	義肢・装具療法
9回	代表的疾患のリハビリテーション①	脳血管障害のリハビリテーション
10回	代表的疾患のリハビリテーション②	脊髄損傷のリハビリテーション
11回	代表的疾患のリハビリテーション③	切断および骨関節疾患のリハビリテーション
12回	代表的疾患のリハビリテーション④	小児疾患のリハビリテーション
13回	代表的疾患のリハビリテーション⑤	がんのリハビリテーション
14回	代表的疾患のリハビリテーション⑥	内部障害のリハビリテーション
13回	代表的疾患のリハビリテーション⑦	認知症のリハビリテーション
14回	代表的疾患のリハビリテーション⑧	廃用症候群のリハビリテーション
15回	まとめ	

定期試験は別日程にて実施

評価方法　筆記試験による

教科書　なし

科　目	作業療法概論	単位・時間数	1単位・ 30時間
担当講師	埜﨑　都代子	学　年	1年生　前期
実績経験	資格 作業療法士・精神保健福祉士	作業療法士として40年、このうち教員経験が30年ほどですが、常勤・非常勤を含め、ずっと臨床に並行して携わっております。臨床は、神経難病・精神科デイケア・認知症高齢者・発達障害児支援などの経験があり、現在も認知症高齢者・発達障害児支援に携わっています。25年ほど前に精神保健福祉士の資格を取得しています。	

授業の位置づけ	作業療法士として学習を開始するにあたって、4年間の学びの概要を理解し、作業療法士への動機を高めるための基礎となる授業である。1) 作業療法の定義、概念、作業療法の哲学・歴史　2) 作業療法過程　3) リハビリテーションにおける作業療法の役割の学習を通じて、他の様々な教科を学習する意義を理解し、主体的・積極的な学習意欲を高める。	
到達目標	作業療法とは何か、リハビリテーションにおける作業療法の役割とは何かを理解し、説明することができる。	
授業形態	講義・演習	対面と遠隔授業の併用

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	オリエンテーション	作業療法の概略、ビデオ視聴と討論
2回	作業療法の哲学	作業療法の哲学、概念
3回	作業療法の定義、目的、対象	理学療法士および作業療法士法、その他関連法規、作業療法の定義、専門領域と対象
4回	作業療法の手段	作業の定義、作業の治療的意味
5回	作業療法の歴史	世界および日本の作業療法の歴史
6回	今後学ぶ必要のある知識と技術	日本の作業療法を取り巻く現状と作業療法の役割
7回	作業療法が基盤とする知識、技術、理論	今後学ぶ必要のある知識と技術
8回	作業療法の過程	作業療法評価から介入までの過程
9回	領域別作業療法	身体障害
10回	領域別作業療法	精神障害
11回	領域別作業療法	発達障害
12回	領域別作業療法	老年期障害
13回	作業療法とは	作業療法実践ビデオの視聴およびグループワーク
14回	作業療法とは	発表および意見交換
15回	まとめ	職業倫理およびまとめ

成績評価	レポート20%、発表10%、期末試験の成績７０%を総合して評価する	受講上のルール・留意点	レポート1回、発表1回、試験1回実施する予定。

課題やレポートに関するフィードバック
FBは、授業内その他で適宜行う。レポートは返却する。

	書名	著書名	出版社名
教科書	標準作業療法学 専門分野　作業療法学概論	二木淑子・能登真一編集	医学書院
参考書			
オフィスアワー	授業前後の休憩時間		

科　　目	基礎作業学	単位･時間数	1単位･ 24時間
担当講師	大倉　久美子	学　年	1年生　後期
実績経験	資格 作業療法士	作業療法士としての実務経験を活かし、実際の現場で作業分析をどのように活用しているか実例を交えながら講義を行う。	

授業の位置づけ	作業療法において「作業」は治療・援助の目的であり手段でもある。その「作業」を分析する視点を養うため、作業分析の目的と意味を理解し、具体的な分析方法の知識を獲得することが必要である。 授業方法：講義、演習、グループワーク	
到達目標	・作業とは何かを理解する。 ・作業の分類について理解する。 ・ひとが作業を行うことの意義を理解する。 ・作業の特性を理解する。	
授業形態	講義・演習	対面授業（必要に応じて遠隔の併用授業）

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	作業療法について	基礎作業学とは何か／作業療法とは
2回	作業とは何か	作業とは何か／作業と活動、作業活動という用語
3回	作業とは何か	作業の分類
4回	ひとと作業	ライフサイクルと作業／一日の生活と作業
5回	ひとと作業	脳と作業／手と作業／身体と作業
6回	作業の特性	作業の特性(作業と結果の特性、ひとが作業をすること、ともに作業をすること)
7回	作業と生活機能	作業遂行に必要な機能(感覚運動機能、精神認知機能、活動機能)
8回	作業を分析する	作業分析とは／作業分析の目的／作業分析の種類
9回	作業を分析する	包括的作業分析
10回	作業を分析する	限定的作業分析
11回	作業を分析する	作業分析を事例で理解する
12回	作業を行う際の留意点	作業の用い方(目的として用いる、手段として用いる)

成績評価	・課題　　(20%) ・筆記試験（80%）	受講上のルール・留意点	【課題】作業分析を行い、まとめる。 【筆記試験】教科書・講義資料および講義内容から出題。

課題やレポートに関するフィードバック
フィードバックは全体に実施する。

	書名	著書名	出版社名
教科書	ひとと作業・作業活動　新版	山根寛	三輪書店
参考書			
オフィスアワー	随時		

科　　目	基礎作業学演習	単位・時間数	1単位・30時間
担当講師	栗原 実里・田中 英之	学　年	1年生 後期
実績経験	資格 作業療法士	病院勤務、訪問リハビリテーション、訪問看護でのリハビリテーションを経験。実務経験を交え講義を行う。	

授業の位置づけ	医療・福祉領域におけるリハビリテーションの一手段として作業療法があり、作業療法では様々な活動を用いて患者様のリハビリテーションに応用していく。本講義ではあくまでその一例として「室内におけるアクティビティ」を取り上げ、実体験を通して治療への活用方法を考えてもらう。活動について解説した後、実際の活動に従事して作品の完成を目指す。	
到達目標	（1）作業療法のアクティビティを体験し、作品の完成を目指すことができる。（2）具体的な作業活動を通じて、治療への応用がイメージできる。	
授業形態	講義・演習	対面と遠隔の併用授業

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	オリエンテーション	授業概要説明（手作りテーション）
2回	演習1－1	手作りテーション①／手工芸①
3回	演習1－2	手作りテーション②／手工芸②
4回	演習1－3	手作りテーション③／手工芸③
5回	演習1－4	手作りテーション④／手工芸④
6回	演習1－5	手作りテーション⑤／手工芸⑤
7回	演習1－6	手作りテーション⑥／手工芸⑥
8回	演習1－7	手作りテーション⑦／手工芸⑦
9回	演習2－1	手作りテーション①／手工芸①
10回	演習2－2	手作りテーション②／手工芸②
11回	演習2－3	手作りテーション③／手工芸③
12回	演習2－4	手作りテーション④／手工芸④
13回	演習2－5	手作りテーション⑤／手工芸⑤
14回	演習2－6	手作りテーション⑥／手工芸⑥
15回	演習2－7	手作りテーション⑦／手工芸⑦

成績評価	課題100％	受講上のルール・留意点	3分の1を超える授業時間数を欠席したものは試験が受けられない。

課題やレポートに関するフィードバック
フィードバックは全体に実施する

	書名	著書名	出版社名
教科書	なし　（資料を配布する）		
参考書	・つくる／あそぶを治療に生かす作業活動実習マニュアル	古川宏	医歯薬出版
オフィスアワー	火・土・日曜日以外、午後17時まで。 それ以外はメールで相談。		

科　　目	体験実習	単位・時間数	1単位・45時間
担当講師	手塚　雅之	学　年	1年生　前期
実績経験	資格 作業療法士・健康運動実践指導者	精神科病院の臨床経験５年、その後「専門学校」を中心に教育歴１８年。養成教育にたずさわりながら、身障系病院、高齢者施設、精神病院などでも経験を重ねた。それらの実務経験をもとに講義を行う。	

授業の位置づけ	作業療法士を養成するための専門教育が本格化する前に、様々な体験を通して、今後学んでいく専門領域の具体的なイメージがわくよう準備する授業である。施設見学や障害体験、リハビリテーションの具体的な手法を体験していく。	
到達目標	（1）医療人としてふさわしい態度を身につけることができる。（2）作業療法士のかかわる領域について体験し、感想を述べることができる。（3）障害を持つと何が困るのか、疑似体験を通して自分の考えを述べることができる。	
授業形態	講義・演習	対面と遠隔の併用授業

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	オリエンテーション	授業概要説明
2回	態度教育（1）	医療機関における接遇
3回	態度教育（2）	医療機関における接遇
4回	リハビリ体験（1）	骨と筋／触診①
5回	リハビリ体験（2）	筋力増強訓練Ⅰ
6回	リハビリ体験（3）	筋力増強訓練Ⅱ
7回	リハビリ体験（4）	筋力増強訓練Ⅲ
8回	リラックス体験（1）	骨と筋／触診②
9回	リラックス体験（2）	ボディワークⅠ
10回	リラックス体験（3）	ボディワークⅡ
11回	リラックス体験（4）	ボディワークⅢ
12回	障害体験（1）	視覚障害
13回	障害体験（2）	車いす体験
14回	障害体験（3）	上肢の障害
15回	障害体験（4）	下肢の障害
16回	障害体験（5）	精神障害の体験
17回	障害体験（6）	障害体験のまとめと発表
18回	施設見学	バリアフリー
19回	施設見学	福祉機器
20回	施設見学	介助犬
21回	施設見学	病院・作業所
22回	施設見学	施設見学のまとめと発表
23回	体験実習まとめ	体験実習と今後の展望

成績評価	授業内試験50%、課題50%	受講上のルール・留意点	3分の1を超える授業時間数を欠席したものは試験が受けられない。

課題やレポートに関するフィードバック
フィードバックは全体に実施する

	書名	著書名	出版社名
教科書	なし　（資料を配布する）		
参考書			
オフィスアワー	・「木曜日以外」または「メールで相談可」 ・上記以外でも、空いている時間は対応可能です。		

科　目	身体障害評価学Ⅰ	単位・時間数	1単位・　30時間
担当講師	福澤　阿彌	学　年	1年生　後期

実績経験	資格	作業療法士として回復期リハビリテーション病院、老人保健施設、通所介護施設、訪問看護ステーション、放課後等デイサービスにて勤務経験あり。 その経験を活かし、身体障害分野で行われる関節可動域測定及び徒手筋力検査をについて実技を交えながら講義を行う。
	作業療法士	

授業の位置づけ	作業療法士として治療を行うにあたり、対象者の身体機能や生活動作能力を正しく評価することはとても重要である。 身体障害分野における作業療法評価の目的や手段を充分に理解したうえで、関節可動域測定および筋力検査の手技を体得し、対象者の身体機能を正しく評価できるようになる。	
到達目標	身体障害分野における作業療法評価の目的及び手段を理解する。 関節可動域測定では測定の目的や方法及び注意点を理解し、適切な方法で正しい測定が行えるようになる。 筋力検査では検査の種類や目的、方法及び注意点を理解し、適切な方法で正しい検査が行えるようになる。	
授業形態	講義・演習	対面授業

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	作業療法における評価について	作業療法評価の目的及び手段や技術について理解する
2回	関節可動域測定について	関節可動域測定の目的及や注意点、結果における解釈を理解する
3回	肩関節の関節可動域測定	肩関節屈曲・伸展・外転・内転・外旋・内旋・水平屈曲・水平伸展の関節可動域測定
4回	肘関節・前腕・手関節の関節可動域測定	肘関節屈曲・伸展、前腕回外・回内、手関節掌屈・背屈・橈屈・尺屈の関節可動域測定
5回	母指の関節可動域測定	撓側外転・尺側内転・掌側外転・掌側内転、MP関節屈曲・伸展、IP関節の屈曲・伸展、対立の関節可動域測定
6回	手指の関節可動域測定	MP関節屈曲・伸展、PIP関節屈曲・伸展、DIP関節屈曲・伸展、外転・内転の関節可動域測定
7回	股関節・膝関節の関節可動域測定	股関節屈曲・伸展・外転・内転・外旋・内旋、膝関節屈曲・伸展の関節可動域測定
8回	足関節・足部の関節可動域測定	足関節底屈・背屈、足部外がえし・内がえし・外転・内転の関節可動域測定
9回	筋力評価について	筋力評価の種類や目的、方法及び注意点、結果における解釈を理解する
10回	肩関節の徒手筋力検査	肩関節屈曲・伸展・外転・外旋・内旋・水平屈曲・水平伸展の徒手筋力検査
11回	肘関節・前腕・手関節の徒手筋力検査	肘関節屈曲・伸展、前腕回外・回内、手関節掌屈・背屈の徒手筋力検査
12回	母指の徒手筋力検査	撓側外転・掌側外転・内転、MP関節屈曲・伸展、IP関節の屈曲・伸展、対立の徒手筋力検査
13回	手指の徒手筋力検査	MP関節屈曲・伸展、PIP関節屈曲、DIP関節屈曲、外転・内転の徒手筋力検査
14回	股関節の徒手筋力検査	股関節屈曲・屈曲外転膝屈曲位での外旋・伸展・外転・屈曲位からの外転・内転・外旋・内旋の徒手筋力検査
15回	膝関節・足関節の徒手筋力検査	膝関節屈曲・伸展、足関節底屈・背屈ならびに内がえし・内がえし・底屈をともなう外がえしの徒手筋力検査

成績評価	筆記試験：１００％	受講上のルール・留意点	・講義には指定した服装、身だしなみで出席する。 ・始業時に着替え等の準備ができていない場合は遅刻とする。 ・スマホ等の機器を不要に操作したり私語が多いなど、他の生徒の受講の妨げになる場合は退室を命ずることがある。 ・講義時間数の1/3以上欠席したものには単位を与えない。

課題やレポートに関するフィードバック
全体または実技内では個別にフィードバックを行う

	書名	著書名	出版社名
教科書			
参考書			
オフィスアワー	授業前後の休憩時間		

科　目	作業療法基礎演習Ⅰ	単位・時間数	1単位・　30時間
担当講師	福澤　阿彌	学　年	1年生　後期
実績経験	資格 作業療法士	作業療法士として回復期リハビリテーション病院、老人保健施設、通所介護施設、訪問看護ステーション、放課後等デイサービスにて勤務経験あり。 その経験を活かし、身体障害分野で行われる関節可動域測定及び徒手筋力検査をについて実技を交えながら講義を行う。	

授業の位置づけ	作業療法士として治療を行うにあたり、対象者の身体機能や生活動作能力を正しく評価することはとても重要である。 関節可動域測定および徒手筋力検査の手技を体得し、対象者の身体機能を正しく評価できるようになる。	
到達目標	関節可動域測定では基本軸・移動軸を理解し、適切な方法で正しい測定が行えるようになる。 徒手筋力検査では各段階の判断基準を理解し、適切な方法で正しい検査が行えるようになる。	
授業形態	演習	対面授業

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	肩関節の関節可動域測定	肩関節屈曲・伸展・外転・内転・外旋・内旋・水平屈曲・水平伸展の関節可動域測定
2回	肘関節・前腕・手関節の関節可動域測定	肘関節屈曲・伸展、前腕回外・回内、手関節掌屈・背屈・橈屈・尺屈の関節可動域測定
3回	母指の関節可動域測定	橈側外転・尺側内転・掌側外転・掌側内転、MP関節屈曲・伸展、IP関節の屈曲・伸展、対立の関節可動域測定
4回	手指の関節可動域測定	MP関節屈曲・伸展、PIP関節屈曲・伸展、DIP関節屈曲・伸展、外転・内転の関節可動域測定
5回	股関節・膝関節の関節可動域測定	股関節屈曲・伸展・外転・内転・外旋・内旋、膝関節屈曲、伸展の関節可動域測定
6回	足関節・足部の関節可動域測定	足関節底屈・背屈、足部外がえし・内がえし・外転・内転の関節可動域測定
7回	上肢・手指・下肢の関節可動域測定	上肢・手指・下肢の関節可動域測定の総復習
8回	肩関節の徒手筋力検査	肩関節屈曲・伸展・外転・外旋・内旋・水平屈曲・水平伸展の徒手筋力検査
9回	肘関節・前腕・手関節の徒手筋力検査	肘関節屈曲・伸展、前腕回外・回内、手関節掌屈・背屈の徒手筋力検査
10回	母指の徒手筋力検査	橈側外転・掌側外転・内転、MP関節屈曲・伸展、IP関節の屈曲・伸展、対立の徒手筋力検査
11回	手指の徒手筋力検査	MP関節屈曲・伸展、PIP関節屈曲、DIP関節屈曲、外転・内転の徒手筋力検査
12回	股関節の徒手筋力検査	股関節屈曲・屈曲外転膝屈曲位での外旋・伸展・外転・屈曲位からの外転の徒手筋力検査
13回	股関節・膝関節の徒手筋力検査	股関節内転・外旋・内旋、膝関節屈曲・伸展の徒手筋力検査
14回	足関節の徒手筋力検査	足関節底屈・背屈ならびに内がえし・内がえし・底屈をともなう外がえしの徒手筋力検査
15回	上肢・手指・下肢の徒手筋力検査	上肢・手指・下肢の徒手筋力検査の総復習

成績評価	実技試験：１００％	受講上のルール・留意点	・講義には指定した服装、身だしなみで出席する。 ・始業時に着替え等の準備ができていない場合は遅刻とする。 ・スマホ等の機器を不要に操作したり私語が多いなど、他の生徒の受講の妨げになる場合は退室を命ずることがある。 ・講義時間数の1/3以上欠席したものには単位を与えない。

課題やレポートに関するフィードバック
全体または実技内では個別にフィードバックを行う

	書名	著書名	出版社名
教科書			
参考書			
オフィスアワー	授業前後の休憩時間		

科　　目	運動学Ⅱ	単位・時間数	1単位・　30 時間
担当講師	栗原実里	学　年	2年生　前期
実績経験	資格	資格：作業療法士 病院勤務、訪問リハビリテーション、訪問看護でのリハビリテーションを経験。 実務経験を交え講義を行う。	

授業の位置づけ	リハビリテーションで対象者を評価・治療するためには、身体の基本的な構造や機能、各関節の動き方を理解しておく必要がある。運動学Ⅱでは1年生で学んだ生体力学、解剖学・生理学の知識を用い、下肢・体幹の運動メカニズムや機能障害についてを講義と演習を交えて学習していく。	
到達目標	下肢・体幹の関節運動を、解剖学、生理学、運動学の専門用語を用いて適切に表現できる。 下肢・体幹の正常な運動メカニズムや、機能障害について説明できる。 歩行に関する基礎知識を理解し、専門用語を用いて適切に表現できる。	
授業形態	講義と演習 対面と遠隔の併用授業	

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	下肢帯と股関節①	下肢帯の骨と関節について
2回	下肢帯と股関節②	股関節の構造と機能
3回	股関節③	股関節の運動メカニズム
4回	膝関節①	膝関節の構造と機能
5回	膝関節②	膝関節の運動メカニズム
6回	足の関節①	足の関節の構造と機能
7回	足の関節②	足の関節の運動メカニズム
8回	足の関節③	足の関節運動の機能障害
9回	下肢の神経	下肢の神経叢と神経支配
10回	脊椎	頸椎・胸椎・腰椎の解剖と運動メカニズム
11回	体幹・呼吸	体幹の運動と呼吸運動
12回	歩行①	正常歩行の基礎知識
13回	歩行②	正常歩行の基礎知識と異常歩行について
14回	顔面および頭部	顔面及び頭部の運動メカニズムを学ぶ
15回	運動学習	運動学習の基礎知識を学ぶ

成績評価	課題：40% 筆記試験：60%	受講上のルール・留意点	課題は4回提出（各10%） ①下肢帯と股関節の運動 ②膝・足の関節の運動と機能障害 ③脊椎・体幹の運動 ④歩行・運動学習 課題は10問程度の設問について解答するものである。 授業時に配布するので、欠席時は課題を取りにくること。（各A4用紙2枚程度）

課題やレポートに関するフィードバック
課題を返却し全体にフィードバックを行う

	書名	著書名	出版社名
教科書	基礎運動学　第6版補訂	中村隆一、齋藤宏、長崎浩	医歯薬出版
参考書	PT・OTビジュアルテキスト専門基礎　運動学	山崎敦	羊土社
オフィスアワー	火・土・日曜日以外、午後17時まで。 それ以外はメールで相談。		

科　目	運動学実習	単位・時間数	1単位・ 30時間
担当講師	栗原実里	学　年	2年生　前期
実績経験	資格	資格：作業療法士 病院勤務、訪問リハビリテーション、訪問看護でのリハビリテーションを経験。 実務経験を交え講義を行う。	

授業の位置づけ	リハビリテーションで対象者を評価・治療する際には、その人の姿勢や動作を観察する必要がある。運動学実習では、姿勢や動作を観察し、解剖学・生理学・運動学の知識を使い分析・考察をする力を、演習を中心とした授業を通し学んでいく。	
到達目標	1.生体力学、機能解剖学、生理学、運動学の知識を用いて、ヒトの姿勢・運動・動作を観察・分析し、専門用語を用いて適切に記述できるようになる。 2.実験・実習を通して現象を論理的に分析し、科学的に考察が出来るようになる。	
授業形態	講義・演習	対面授業

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	運動と動作分析	動作分析の方法を学ぶ
2回	姿勢の分析	座位・立位姿勢を観察し、記録する
3回	寝返り	寝返り動作を観察、分析し、記録する
4回	起き上がり	起き上がり動作を観察、分析し、記録する
5回	立ち上がり・着座	立ち上がりと着座を観察・分析する
6回	立ち上がり・着座	立ち上がりと着座を考察、記録する
7回	歩行	正常歩行を観察、分析する
8回	歩行	正常歩行を考察、記録する
9回	歩行	異常歩行を観察、分析する
10回	歩行	異常歩行を考察、記録する
11回	階段昇降	階段昇降を観察、分析する
12回	階段昇降	階段昇降を記録する
13回	握力	手関節の肢位による握力の違いを分析する
14回	握力	手関節の肢位による握力の違いを考察し、記録する
15回	二関節筋	上肢の二関節筋の作用を分析し、記録する

成績評価	レポート100%	受講上のルール・留意点	レポート6回提出。各A4用紙5枚以内。 ①姿勢分析 ②寝返り・起き上がり ③立ち上がりと着座 ④歩行 ⑤階段昇降 ⑥握力と二関節筋

課題やレポートに関するフィードバック
レポートを返却し全体に行う

	書名	著書名	出版社名
教科書	動作分析臨床活用講座～バイオメカニクスに基づく臨床推論の実践～	石井慎一郎	ﾒｼﾞｶﾙﾋﾞｭｰ
参考書	理学療法 作業療法テキスト　運動学実習	石川朗	中山書店
オフィスアワー	火・土・日曜日以外、午後17時まで。 それ以外はメールで相談。		

科　目	内科学・老年学Ⅰ	単位・時間数	2単位　・　15時間
担当講師	宗像　一雄	学　年	2年生　前期

実績経験	資格	医師として日本医科大学病院にて勤務、その実務経験を活かし、実例を交えながら講義を行う。
	医師	

授業の位置づけ	リハビリテーションの対象のなる患者は、多数の内科系疾患を合併していることが多く、内科系疾患の理解がないと適切なリハビリテーションが実施できないことや、現在のチーム医療という観点からも内科系疾患の理解が必要である。内科学全般にわたり、病態、症候、検査、治療について主にスライド利用した講義にて解説する	
到達目標	主要な内科疾患の病態、症候、検査、治療について理解する	
授業形態	講義	「対面授業」もしくは「遠隔授業」

授業計画

回数		講義内容
1回	内科総論	内科学とは、診断と治療の実際（POS、POMR、診断学、EBM、クリニカルパス他
2回	症候学	発熱、全身倦怠感、食欲不振、悪心・嘔吐、易感染性、意識障害、めまい他
3回	循環器総論	心血管系の解剖と生理、主な症候、診断法
4回	循環器各論Ⅰ	高血圧、低血圧、虚血性心疾患（狭心症、心筋梗塞）、心筋疾患
5回	循環器各論Ⅱ	弁膜症、先天性心疾患、心不全
6回	循環器各論Ⅲ	不整脈、肺性心、大動脈疾患、末梢血管疾患、心臓リハビリテーション
7回	呼吸器総論	肺の解剖と生理、症候と病態生理、臨床検査所見
8回	呼吸器各論Ⅰ	感染性肺疾患、慢性閉塞性肺疾患、びまん性汎細気管支炎、LAM、気管支喘息、
9回	呼吸器各論Ⅱ	サルコイドーシス、ウェゲナー肉芽腫症、拘束性肺疾患、肺腫瘍、肺循環障害
10回	呼吸器各論Ⅲ	胸膜の疾患、横隔膜の疾患、呼吸異常、呼吸不全、呼吸リハビリテーション
11回	消化器総論	解剖と生理、症候と病態生理、検査法
12回	消化器各論Ⅰ	口腔疾患、食道疾患、胃・十二指腸疾患
13回	消化器各論Ⅱ	小腸疾患、大腸疾患、肛門疾患
14回	肝胆膵疾患総論	肝胆膵腹膜の解剖と生理、検査法
15回	肝胆膵疾患各論	肝胆疾患各論、膵疾患各論、腹膜疾患各論

成績評価	国家試験に準じた形式の試験	受講上のルール・留意点	私語を控えること

課題やレポートに関するフィードバック
予習・復習時の疑問点を解説する

	書名	著書名	出版社名
教科書	標準理学療法・作業療法学　専門基礎分野　内科学	奈良勲・鎌倉矩子	医学書院
参考書			
オフィスアワー			

科　目	内科学・老年学Ⅱ	単位・時間数	2単位　・　15時間
担当講師	宗像　一雄	学　年	2年生　後期

実績経験	資格	医師として日本医科大学病院にて勤務、その実務経験を活かし、実例を交えながら講義を行う。
	医師	

授業の位置づけ	リハビリテーションの対象のなる患者は、多数の内科系疾患を合併していることが多く、内科系疾患の理解がないと適切なリハビリテーションが実施できないことや、現在のチーム医療という観点からも内科系疾患の理解が必要である。内科学全般にわたり、病態、症候、検査、治療について主にスライド利用した講義にて解説する	
到達目標	主要な内科疾患の病態、症候、検査、治療について理解する	
授業形態	講義	「対面授業」もしくは「遠隔授業」

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	血液・造血器疾患総論	血液の成分と生理、造血と血液細胞の分化、症候、検査法
2回	血液疾患各論Ⅰ	赤血球系の疾患、白血球系の疾患
3回	血液疾患各論Ⅱ	リンパ性細網内皮系の疾患、M蛋白血症、出血性疾患、血栓性疾患
4回	代謝性疾患総論	代謝とは、栄養素とエネルギー、糖質、脂質、蛋白質、ビタミン、無機質
5回	代謝性疾患各論	糖尿病、インスリノーマ、脂質異常症、メタボリックシンドローム他
6回	内分泌疾患総論	内分泌総論、内分泌腺とホルモンの解剖、検査法
7回	内分泌疾患各論	視床下部疾患、下垂体疾患、甲状腺疾患、副甲状腺疾患、副腎疾患
8回	腎・泌尿器疾患総論	腎の解剖と生理、症候と病態生理、検査法
9回	腎・泌尿器疾患各論Ⅰ	腎不全、糸球体疾患、尿細管疾患、
10回	腎・泌尿器疾患各論Ⅱ	尿路系疾患、前立腺疾患、電解質代謝の異常
11回	膠原病・アルルギー疾患・免疫不全総論	免疫とは、免疫担当細胞、免疫グロブリン、体液性免疫、細胞性免疫、アレルギー
12回	膠原病・アルルギー疾患・免疫不全各論Ⅰ	アレルギー性疾患、膠原病
13回	膠原病・アルルギー疾患・免疫不全各論Ⅱ	リウマチ性疾患、免疫不全
14回	感染症総論	感染症とは、感染症の成立、感染症をおこす病原体、感染経路他
15回	感染症各論	細菌感染症、真菌症、ウィルス感染症、原虫感染症、寄生虫感染病、プリオン病

成績評価	国家試験に準じた形式の試験	受講上のルール・留意点	私語を控えること

課題やレポートに関するフィードバック
予習・復習時の疑問点を解説する

	書名	著書名	出版社名
教科書	標準理学療法・作業療法学　専門基礎分野　内科学	奈良勲・鎌倉矩子	医学書院
参考書			
オフィスアワー			

科　目	整形外科学Ⅰ	単位・時間数	2単位・30時間
担当講師	小杉・宮本・佐々木	学　年	2年生　前期
実績経験	資格	整形外科医師、日本整形外科学会専門医、臨床経験30年以上	
	医師		

授業の位置づけ	整形外科学は、上肢、下肢、体幹の運動器官を専門に扱う科で、骨、関節、筋肉、神経などが関係する分野である。骨折や捻挫などの外傷と、変形性関節症や関節リウマチなど、さまざまな疾患がある。　これら運動器の外傷や疾患の治療には、リハビリテーションに関わる理学療法士、作業療法士、義肢装具士などの参加が極めて重要である。 前期では、整形外科学の概論から、主に全身に関する疾患についての講義を行う。 後期では、上肢、下肢、体幹などの部位別の疾患や外傷、およびスポーツなどの特殊な項目の講義を行う。	
到達目標	整形外科学の講義、前期、後期を通じて、①運動器の構造と機能を理解する、②運動器に生じる主なる疾患や外傷の知識を得る、③運動器疾患の病態、障害を理解して、治療手段につなげる能力を養う、ことを目的とする。	
授業形態	講義	対面と遠隔の併用授業などの可能性

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	整形外科学とは	整形外科とは、リハビリテーションとのかかわり
2回	運動器の解剖	運動器の構造
3回	外傷総論	骨折総論、関節損傷
4回	軟部組織損傷	軟部組織の外傷の総論、熱傷概論、筋区画症候群
5回	リウマチ性疾患1	関節リウマチ
6回	リウマチ性疾患2	脊椎関節炎
7回	関節疾患	変形性関節症
8回	関節疾患	結晶性関節症、化膿性関節炎、骨髄炎
9回	骨粗鬆症	骨粗鬆症の概念、診断、治療、トピックス
10回	ロコモティブシンドローム	ロコモティブシンドロームの概念、運動器不安定症、フレイル
11回	神経筋疾患	末梢神経障害（手根管症候群、肘部管症候群、前骨間神経麻痺、後骨間神経麻痺、胸郭出口症候群、橈骨神経麻痺）
12回	小児の外傷	小児の骨折の概論と各論
13回	腫瘍、	運動器の腫瘍（骨腫瘍、軟部腫瘍）、腫瘍性疾患
14回	血行障害	血行障害
15回	切断	切断肢（切断術、義肢、合併症、リハビリテーション）

成績評価	テスト　１００％	受講上のルール・留意点	国家試験に準じた設問

課題やレポートに関するフィードバック
FBは全体に実施する

	書名	著書名	出版社名
教科書	整形外科学テキスト（改定第４版）	高橋　邦泰、芳賀　信彦　編	南江堂
参考書			
オフィスアワー	授業前後の休憩時間		

科　目	整形外科学Ⅱ	単位・時間数	2単位・30時間
担当講師	小杉・宮本・佐々木	学　年	2年生　後期

実績経験		
	資格	整形外科医師、日本整形外科学会専門医、臨床経験30年以上
	医師	

授業の位置づけ	整形外科学は、上肢、下肢、体幹の運動器官を専門に扱う科で、骨、関節、筋肉、神経などが関係する分野である。骨折や捻挫などの外傷と、変形性関節症や関節リウマチなど、さまざまな疾患がある。　これら運動器の外傷や疾患の治療には、リハビリテーションに関わる理学療法士、作業療法士、義肢装具士などの参加が極めて重要である。前期では、整形外科学の概論から、主に全身に関する疾患についての講義を行う。後期では、上肢、下肢、体幹などの部位別の疾患や外傷、およびスポーツなどの特殊な項目の講義を行う。	
到達目標	整形外科学の講義、前期、後期を通じて、①運動器の構造と機能を理解する、②運動器に生じる主なる疾患や外傷の知識を得る、③運動器疾患の病態、障害を理解して、治療手段につなげる能力を養う、ことを目的とする。	
授業形態	講義	対面と遠隔の併用授業などの可能性

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	肩、肩甲帯	肩の外傷、肩関節脱臼、腱板損傷、上腕骨近位端骨折などの外傷
2回	肘	肘関節周辺の骨折、肘関節周辺の外傷、変性疾患、下肢用症候群、絞扼性神経炎、前腕骨骨折、ulna varinat , TFCC
3回	手	手指の変形性関節症（Heberden, CM関節症）、過使用症候群（腱炎など）、手関節～手指の外傷（橈骨遠位端骨折、手根骨骨折（舟状骨骨折、月状骨脱臼）、手指の骨折）
4回	股関節	変形性関節症、大腿骨近位端骨折、先天性股関節脱臼、ペルテス、骨盤骨折
5回	膝関節	変形性膝関節症、膝関節の外傷
6回	足	足関節外傷、足関節疾患
7回	脊椎疾患（腰椎）	腰椎の疾患、腰椎椎間板ヘルニア、脊柱管狭窄症、神経根症
8回	脊椎疾患（頚椎）	頚椎の疾患、神経根症、など
9回	脊髄損傷	脊髄損傷、急性期、慢性期、合併症（褥瘡、尿路感染症、肺炎など）
10回	障害者スポーツ	障害者スポーツの諸問題
11回	脆弱性骨折	脆弱性骨折の諸問題（大腿骨近位端骨折を中心に）
12回	慢性疼痛疾患	慢性疼痛症候群（CRPS,　線維筋痛症、など）
13回	スポーツ整形外科	スポーツ整形外科、スポーツ外傷、スポーツ障害、疲労骨折, RICE, など
14回	小児整形外科疾患	４大小児整形外科疾患（発育性股関節脱臼、斜頸、握り母指、内反足）、骨系統疾患
15回	整形外科的診断学	総括として。　整形外科的診察法、検査法、治療法の概略

成績評価	テスト　１００％	受講上のルール・留意点	国家試験に準じた設問

課題やレポートに関するフィードバック
FBは全体に実施する

	書名	著書名	出版社名
教科書	高橋　邦奏、芳賀　信彦　編	高橋　邦奏、芳賀　信彦　編	南江堂
参考書			
オフィスアワー	授業前後の休憩時間		

科　目	神経内科学Ⅰ	単位・時間数	2単位・ 30時間
担当講師	加藤　陽久	学　年	2年生　前期
実績経験	資格 医師	脳神経内科医として20年以上の臨床実務経験から、リハビリテーションへの神経内科学の関与の重要性を説く。	

授業の位置づけ	将来、リハビリテーションに関わる医療人として活動するために必要な神経内科学の基礎知識を学ぶ。高齢化社会がすすみ、疾患を有しても、充実した人生を歩むことが望まれることから、リハビリテーションへの期待はますます高まるばかりである。リハビリテーションの対象となる疾患として、整形外科疾患とともに、脳卒中や神経変性疾患をはじめとした神経内科学分野の疾患は主要な疾患群であり、高齢化社会を迎えた本邦にあっては、神経内科学疾患を有する患者が増加することは想像に難くない。このことから神経内科学を理解することは、リハビリテーションに関わる医療人として必須の要素となる。本講義では、神経内科学について、神経症候学・神経学的検査・神経疾患各論へと講義を進め、解説していく。
到達目標	神経内科学総論を理解する
授業形態	講義　　対面授業もしくはオンデマンド

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	神経系の基礎	神経系の解剖・生理
2回	神経診察Ⅰ	意識
3回	神経診察Ⅱ	高次脳機能Ⅰ
4回	神経診察Ⅲ	高次脳機能Ⅱ
5回	神経診察Ⅳ	脳神経系Ⅰ
6回	神経診察Ⅴ	脳神経系Ⅱ
7回	神経診察Ⅵ	脳神経系Ⅲ
8回	神経診察Ⅶ	運動系Ⅰ
9回	神経診察Ⅷ	運動系Ⅱ
10回	神経診察Ⅸ	不随意運動
11回	神経診察Ⅹ	感覚系・反射
12回	神経系の検査Ⅰ	神経画像Ⅰ
13回	神経系の検査Ⅱ	神経画像Ⅱ
14回	神経系の検査Ⅲ	生理学的検査
15回	神経系の検査Ⅳ	脳脊髄液検査

成績評価	テスト100%	受講上のルール・留意点	講義には積極的な姿勢で臨まれたい。

課題やレポートに関するフィードバック
フィードバックは適宜実施する。

	書名	著書名	出版社名
教科書	神経内科学テキスト　第4版	江藤文夫・飯島節　編	南江堂
参考書	ベッドサイドの神経の診かた 第18版	田崎義昭・斎藤佳雄 著	南山堂
オフィスアワー	授業前後の休憩時間		

科　目	神経内科学Ⅱ	単位･時間数	2単位･ 30時間
担当講師	加藤　陽久	学　年	2年生　前期
実績経験	資格	脳神経内科医として20年以上の臨床実務経験から、リハビリテーションへの神経内科学の関与の重要性を説く。	
	医師		

授業の位置づけ	将来、リハビリテーションに関わる医療人として活動するために必要な神経内科学の基礎知識を学ぶ。高齢化社会がすすみ、疾患を有しても、充実した人生を歩むことが望まれることから、リハビリテーションへの期待はますます高まるばかりである。リハビリテーションの対象となる疾患として、整形外科疾患とともに、脳卒中や神経変性疾患をはじめとした神経内科学分野の疾患は主要な疾患群であり、高齢化社会を迎えた本邦にあっては、神経内科学疾患を有する患者が増加することは想像に難くない。このことから神経内科学を理解することは、リハビリテーションに関わる医療人として必須の要素となる。本講義では、神経内科学について、神経症候学・神経学的検査・神経疾患各論へと講義を進め、解説していく。	
到達目標	神経内科学各論を理解する	
授業形態	講義	オンデマンド

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	脳血管障害Ⅰ	虚血性脳血管障害
2回	脳血管障害Ⅱ	出血性脳血管障害
3回	脳血管障害Ⅲ	その他の血管障害
4回	変性疾患Ⅰ	パーキンソン病とその類縁疾患
5回	変性疾患Ⅱ	脊髄小脳変性症
6回	変性疾患Ⅲ	運動ニューロン疾患、他
7回	脱髄性疾患	多発性硬化症、他
8回	末梢神経疾患	ギラン・バレー症候群、他
9回	筋疾患	筋ジストロフィー、他
10回	神経筋接合部疾患	重症筋無力症、他
11回	腫瘍・脊髄疾患	脳腫瘍、他
12回	感染性疾患	髄膜炎、他
13回	先天異常・内科系疾患	内科系疾患における神経障害、他
14回	外傷・自律神経疾患・機能性疾患	頭痛・めまい・てんかん、他
15回	認知症疾患	アルツハイマー病、他

成績評価	テスト	受講上のルール・留意点	講義には積極的な姿勢で臨まれたい。

課題やレポートに関するフィードバック
フィードバックは適宜実施する。

	書名	著書名	出版社名
教科書	神経内科学テキスト　第4版	江藤文夫・飯島節　編	南江堂
参考書	ベッドサイドの神経の診かた 第18版	田崎義昭・斎藤佳雄 著	南山堂
オフィスアワー	授業前後の休憩時間		

科　目	病理学概論	単位・時間数	1単位・ 15時間
担当講師	プルカット・アルミラ	学　年	2年生　前期
実績経験	資格	大学病院などで行ってきた病理検査経験を生かし、実例と国家試験問題の解説などを交えながら講義を行う。	
	医師		

授業の位置づけ	病理学は基礎医学の総まとめおよび臨床医学への橋渡し役となっている。解剖や生理学で学んだ人体の正常構造と機能にどんな異常が生じて患者が苦しんでいるのか、 要するに「疾病の成り立ち」を理解する基礎である。すべての医療従事者に共通して患者の病態を正確に把握するために病気の原因、発生メカニズム、経過と転帰を深く理解することが求められるので、病理学の学習が必須とされる。 講義では病因となる内因と外因を踏まえ、全身の各臓器で共通する、退行・進行性病変、循環障害、炎症・感染症、免疫疾患、腫瘍、先天異常などの概念や主要疾患、そして、各臓器の各疾患の特徴にについて説明する。 授業はプレゼンテーション形式で行われる。
到達目標	1) 進行・退行性病変，代謝障害、循環障害，炎症，腫瘍，奇形などの疾患群を総論的に説明できる。 2) 疾患に関わる病理学的用語を理解し、正しく使える。 3) 他の講座で学ぶ疾患と本講座の知識との関連性を見出し説明できる。
授業形態	講義　　遠隔授業

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	病理学の概要　病因論	病理学の概念ついて理解する、疾病の外因・内因を理解する
2回	退行・進行性病変	変生、萎縮、壊死、アポトーシスについて学ぶ 肥大、過形成、化生、異型性及び再生について学ぶ
3回	代謝異常	生命を維持するための代謝及び代謝異常により引き起こされる病態について学ぶ
4回	循環障害①	血液循環の基礎、局所循環障害について理解する
5回	循環障害②　　炎症	全身循環の病因・病態について理解する。炎症の経過と生体の反応を理解する
6回	感染症　　腫瘍①	感染症の成り立ち及び感染症を引き起こす主な病原体ついて理解する 腫瘍の特徴、命名と分類、形態、悪性腫瘍の進展形式を学ぶ
7回	腫瘍②	進行度、発生原因と発がんメカニズムを学ぶ
8回	先天異常、奇形	遺伝性疾患、染色体異常と奇形の基礎を学ぶ

成績評価	定期試験100％　　(授業時間数の3分の1以上欠席した者には単位を与えない)	受講上のルール・留意点	・定期試験は筆記試験を行う ・不合格者対象に再試験を行う ・定期試験範囲を授業中に重要とされる内容や配布される演習問題等とする

課題やレポートに関するフィードバック
FBは全体に実施する。

	書名	著書名	出版社名
教科書	標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 病理学(第4 版) (ISBN 978-4-260-02871-4)	奈良　勲 ら	(医学書院)
参考書			
オフィスアワー	授業前後の休憩時間に対応します。 p-almira@stu.nichireha.ac.jp		

科　目	リハビリテーション医学概論Ⅱ	単位・時間数	2単位・　30時間
担当講師	工藤征四郎・佐々木和裕	学　年	2年生　前期
実績経験	資格		
	社会福祉士		

授業の位置づけ	この授業では、リハビリテーション概論に関する基本的知識を習得する。 社会福祉とは何か。他の政策との比較や歴史的経緯をもとに理解する。
到達目標	リハビリテーション・社会福祉における基本的な概念や知識、理論を習得する。基本的な用語について、（丸暗記ではなく）よく理解して、自分の言葉で説明できるようにする。 最終的に国の財政との関係について理解する。
授業形態	講義　　併用授業

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	福祉・医療・保健等の状況	リハビリテーションと深い関連を有する福祉・医療・保健等の状況
2回	福祉・医療・保健等の状況	日本の高齢化の進展と少子化の現状
3回	福祉・医療・保健等の状況	日本の高齢化対策
4回	福祉・医療・保健等の状況	後期高齢者医療制度
5回	福祉・医療・保健等の状況	介護保険について
6回	福祉・医療・保健等の状況	障害者の現状
7回	福祉・医療・保健等の状況	国民医療費の動向
8回	社会保障の歴史的経緯	日本の社会保障の歴史的経緯　　飛鳥～江戸時代
9回	社会保障の歴史的経緯	日本の社会保障の歴史的経緯　　第二次世界大戦以降
10回	社会保障の国際比較	日本の社会保障の国際比較その他
11回	将来の問題点	今後の社会保障の行方
12回	国の経済や財政力	財政再建
13回	国の経済や財政力	日本の抱える諸問題　　福祉・医療・保健等の状況
14回	診療報酬	国民医療費増加抑制対策
15回	診療報酬	リハビリテーションに関する診療報酬の現状

成績評価	定期試験：筆記試験100％	受講上のルール・留意点	授業では、確認の問題を行うことがある。講義をよく聞きできるだけメモを取るようにする。私語で回りに迷惑をかけないこと。

課題やレポートに関するフィードバック

	書名	著書名	出版社名
教科書	リハビリテーション概論（手作り最新版）	工藤征四郎　　授業前に配布	
参考書			
オフィスアワー	授業前後の休憩時間		

科　目	作業療法管理学	単位・時間数	2単位・　30時間
担当講師	五十嵐千代子	学　年	2年生　後期

実績経験	資格	作業療法士として病院勤務などの実務経験を活かし、実例を交えながら講義を行う
	作業療法士	

授業の位置づけ	・作業療法士は国の社会保障制度（医療保険や介護保険など）のもとで従事していることを認識する。 ・この制度下でさまざまな職業の方々と共に職務を遂行していく「多職種連携」について知る。 ・これからの日本の人口構造や制度の変化に対応できる「マネジメント力」について知る。 ・「職場管理」「組織運営」について知る。 ・専門職としての「職業倫理」を知り、日頃より意識して行動できるようにする。 ・卒業後も専門職として自己研鑽が必要であることを知る。
到達目標	・「医療保険」と「介護保険」について対象者、保険の概要について説明することができる。 ・「障害者総合支援法」や「就労支援」について対象者や内容の説明をすることができる。 ・専門職に求められる「職業倫理」について説明することができる。 ・職場の「管理」「運営」について具体例を挙げて説明することができる。 ・「質の保証」と「リスクマネジメントについて説明できる。 ・卒後教育について説明できる。
授業形態	講義・演習　　対面と遠隔の併用授業

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	働くということ	社会人基礎力の講義　在学中に身につけることについて個人ワークとグループディスカッション。発表。＊①
2回	社会保障制度	医療保険と介護保険　保険の対象とその概要について講義後に図でまとめて理解をする。＊②
3回	障害者・障害児サービス	障害者手帳、障害者総合支援法　についての講義
4回	就労支援	就労支援に関する施設と内容　就労支援の概要を把握し居住地域の就労支援施設を調べてシートにまとめる。＊③
5回	地域における予防・保健	行政におけるリハビリテーション　地域包括ケアシステムの講義　事例の紹介
6回	職業倫理	専門職に求められる職業倫理についての講義後に自己研鑽の必要性についてグループワーク、発表。＊④
7回	身分法と倫理綱領	法律／職能団体　講義後に作業療法士として勤務できる条件についてグループワーク、発表。＊⑤
8回	業務管理	部門の役割／療法士の業務　組織、記録、診療報酬についての講義
9回	労務管理	労働条件管理や労働環境の整備についての講義、新聞記事を用いた労働に関する問題提起とグループディスカッション。発表。＊⑥
10回	組織マネジメント	組織マネジメント　リーダーシップとマネジメントの講義と身近な事例のグループ検討。発表。＊⑦
11回	多職種連携と地域連携	他職種連携　講義と連携事例の紹介
12回	〃	地域連携　地域ケア会議の動画を観ての感想を記載する。＊⑧
13回	医療の質とリスクマネジメント	患者満足度と質／リスクマネジメント　日常のリスクマネジメントについての演習。＊⑨
14回	養成教育と卒後教育	養成教育と卒後教育　専門職になるためとなった後の教育についての講義
15回	〃	自己研鑽、職能団体の役割、学会、学術活動についての講義

成績評価	○＊①～⑨までの成果物（各５点×９）45点 定期試験　55点　計100点 ○授業時間数の３分の１以上欠席した者には単位を与えない	受講上のルール・留意点	スマートフォン、PCなどは指示のあったときのみ使用してください。

課題やレポートに関するフィードバック
授業内は口頭フィードバック、記載したものに関してはコメントを付けて返却。

	書名	著書名	出版社名
教科書	リハビリテーション管理学	斉藤秀之　能登真一	医学書院
参考書			
オフィスアワー	平日　9時～17時（木曜日以外）教員室 メールでの連絡は常に受け付けますが、返信には時間を要する場合あり。		

科　目	身体障害評価学Ⅱ	単位・時間数	2単位・48時間
担当講師	五十嵐千代子・伴野麻矢	学　年	2年生　前期
実績経験	資格 作業療法士	作業療法士として病院勤務などの実務経験を活かし、実例を交えながら講義を行う	

授業の位置づけ	「上肢骨折」「末梢神経損傷」「関節リウマチ」「脊髄損傷」に関して、原因・症状、体や生活上の障害などについて学ぶ。またそれぞれの評価について1年生で習ったことの応用や、疾患独自の評価と治療について学ぶ。
到達目標	・それぞれの疾患の原因や医学的治療、障害像について説明することができる。 ・疾患の特徴に沿った評価について説明できる。 ・個々に求める生活行為を向上させるための作業療法治療・援助などについて説明できる。
授業形態	講義・演習　　対面と遠隔の併用授業

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	脊髄損傷（頚髄損傷を中心に）	脊髄の構造と働きについて　講義
2回		脊髄を損傷すると生じる機能障害について講義
3回		心身機能・身体構造の評価講義
4回		心身機能・身体構造の評価　関節可動域検査、筋力の検査方法について演習
5回		心身機能・身体構造の評価　感覚障害の検査演習
6回		心身機能・身体構造の評価　筋緊張の検査演習
7回		ASIA、ザンコリーの分類、フランケル分類についての講義
8回		機能レベル別のADLの到達度について講義と演習
9回		機能レベル別のADLの到達度について講義と演習
10回		機能レベル別のADLの到達度について講義と演習
11回		筋力・筋持久力の維持、増強の講義と演習
12回		知覚再教育の講義と演習
13回	関節リウマチ	関節リウマチの発生機序、病態像、医学的治療について講義
14回		関節リウマチの障害像と評価、作業療法について講義
15回	上肢骨折	骨、関節の構造、骨代謝について、骨折とは（骨折の分類）、治癒過程と治癒条件　講義
16回		骨折の医学的治療、評価について講義、作業療法プログラムについて講義
17回		上腕骨骨折・肘関節脱臼・前腕骨骨折
18回		手根骨・中手骨の骨折
19回		評価について
20回		作業療法プログラムについて
21回	末梢神経損傷	末梢神経の分類、構造、機能、末梢神経損傷の原因、分類、医学的治療（修復方法）
22回		末梢神経損傷の評価
23回		末梢神経損傷の評価と作業療法プログラムについて講義
24回		末梢神経損傷の作業療法プログラムについて講義

成績評価		受講上のルール・留意点	
	○授業時間数の３分の１以上欠席した者には単位を与えない		・スマートフォン、PCなどは指示のあったときのみ使用してください。 ・脊髄損傷の演習ではTシャツ・ジャージ・スニーカーなど動きやすい服装で参加してください。

課題やレポートに関するフィードバック
フィードバックは全体に実施する。

	書名	著書名	出版社名
教科書	標準作業療法学　作業療法評価学　第３版 作業療法学全書　身体障害	編集　能登真一 編集　菅原洋子	医学書院 協同医書出版
参考書	解剖学、生理学、整形外科学の教科書		
オフィスアワー	平日　9時～17時　教員室 伴野・五十嵐宛のメールでの連絡は常に受け付けますが、返信には時間を要する場合あり。		

科　目	身体障害評価学演習	単位・時間数	1単位・ 45時間
担当講師	伴野　麻矢	学　年	2年生 後期

実績経験	資格	臨床・教育：24年
	作業療法士	

授業の位置づけ	身体障害領域の中でも脳血管疾患の対象者を診る機会が多くあります。この授業では脳血管疾患の病態・基礎知識と評価の基礎から実践までを学びます。臨床では疾患の病態や障害特性を把握した上での評価がとても大切です。 実際の対象者を前に評価をすることを前提に評価時の態度や身だしなみ、話し方なども作業療法士に必要な技能です。臨床でより実践的な技能を身に着けていくことを心掛け、この授業を受講してください。
到達目標	身体障害領域の脳血管疾患の基礎知識と評価の基礎から実践までを学び、模擬患者に必要な評価を実施できる。
授業形態	講義・演習　（対面授業）

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	脳血管疾患について	中枢神経系の構造と機能・脳動脈と脳血管疾患について
2回		脳血管疾患の発生機序と分類・病態と障害
3回	脳血管障害の評価の概要	脳血管疾患の障害と評価内容の概要
4回		脳血管疾患の評価の流れ
5回	脳血管疾患の障害と評価	脳血管疾患の障害：反射と筋緊張の異常の機序（講義）
6回		脳血管疾患の評価：反射・筋緊張の亢進と関節拘縮の関係性と評価（講義）
7回		脳血管疾患の評価：反射と筋緊張の評価技法（演習）
8回		脳血管疾患の評価：反射と筋緊張の低下、亢進時のROMの評価技法（演習）
9回		脳血管疾患の障害：運動麻痺・運動失調・不随意運動（講義）
10回		脳血管疾患の評価：ブルンストロームの運動検査と回復段階（講義と演習）
11回		脳血管疾患の評価：ブルンストロームテスト（演習）
12回		脳血管疾患の評価：ブルンストローム（演習）
13回		脳血管疾患の評価：ブルンストロームと上田の片麻痺機能テスト（演習）
14回		脳血管疾患の障害：感覚・知覚（講義）
15回		脳血管疾患の評価：感覚・知覚の検査（演習）
16回		脳血管疾患の評価：バランス（姿勢反射）の知識と障害（講義）
17回		脳血管疾患の評価；バランス検査（演習）
18回		脳血管疾患の障害：脳神経（視野、眼球運動、咀嚼嚥下、構音）の障害
19回		脳血管疾患の評価：脳神経の評価（視野検査、追視検査）（演習）
20回	脳血管疾患の動作の評価	脳血管疾患の動作：基本動作の観察評価（講義・演習）
21回		脳血管疾患の動作：基本動作の観察評価（講義・演習）
22回	脳血管疾患の画像評価	脳血管疾患の画像の診かた：脳の解剖と機能、画像の種類、画像と病巣・障害予測
23回	脳血管疾患の評価のまとめ	脳血管疾患の障害と評価のまとめ（講義・演習）

成績評価	◎OSCE：実技テストを2回実施する（症例を提示し、症例を想定した評価が実施できるかをテストする） 1回目：反射・筋緊張の評価、片麻痺機能検査（25点）、 2回目：②感覚検査、視野検査、追視検査、バランス機能検査（25点） ◎定期末筆記試験（50点）	受講上のルール・留意点	評価実技は沢山の練習が大切です。授業内のみならず、各自で自主練習をしてください。

誤題やレポートに関するフィードバック

	書名	著書名	出版社名
教科書	作業療法学全書　身体障害 病気がみえるvol.7脳神経 標準作業療法　専門　作業療法評価学第3版		
参考書			
オフィスアワー			

科　　目	発達障害評価学	単位・時間数	１単位・30時間
担当講師	大西　麓子	学　　年	２学年・前期
実績経験	資格：作業療法士	経験年数	施設等　50年

教育目標	1．対象者に必要な評価治療過程を理解し、意義を説明できる。 2．評価の目的、評価の種類、評価の対象、評価方法について理解して説明できる。
教育内容	・発達障害の対象者に必要な評価計画を理解し、その構成を説明できる。 ・対象者に必要な評価方法を選択するために発達障害領域における検査法を学ぶ。 ・対象者に必要な評価を実施した結果をまとめ、解釈し、支援計画立案への方向付けを学ぶ。

講義内容　対面授業

回数	項目	講義内容
1回	［発達障害領域の評価治療過程・必要な情報収集］	評価治療過程、評価の目的、評価の種類、評価の対象、評価方法の選択について学ぶ。作業療法がかかわる領域、人間発達の知識の必要性を学ぶ.
2回	[感覚統合機能の評価]	発達障害児の状態像を理解し、人物画・感覚統合臨床観察による評価（グッドイナフ人物画知能検査）を学ぶ
3回	[感覚統合機能の評価]	ミラー幼児発達スクリーニング検査［ほかJPAN検査）を学ぶ
4回	[感覚統合機能の評価]	日本感覚質問紙・センソリープロファイルを学ぶ
5回	[知的機能の評価]	知的機能に必要な評価項目と実施、解釈について学ぶ.
6回	［観察を中心とした遊びの評価］	遊びの発達段階の評価や観察のポイントを学ぶ。遊びの場面を観察して記録し、考察する経験をする。
7回	[姿勢・運動の評価]	脳性まひの特徴を知り、反射・筋緊張・姿勢反応・姿勢の評価（GMFCS, GMFM）を学ぶ.
8回	[上肢機能評価]	脳性まひの特徴を知り、エアハート視覚機能評価/MACSを学ぶ.
9回	[視覚機能検査による評価]	エアハート視覚機能評価をとおして学ぶ。
10回	[視知覚発達検査による評価]	フロスティッグ視知覚検査/WAVESを学ぶ。
11回	[重症心身障害児の評価（姿勢・運動）]	ビデオを見ながら状態像を観察し、姿勢・手の機能の特徴を学び、対象者を評価(大島の分類・JASPER)を学ぶ.
12回	［日常生活動作の発達評価］	乳幼児発達指導法（PEDI)を日常生活動作の発達について学ぶ。
13回	[食事機能評価]	対象者の特徴を知り、口腔・上肢機能の評価方法を学ぶ
14回	[更衣動作機能の評価]	対象者の特徴を知り、更衣動作機能の評価方法を学ぶ
15回	[発達スクリーニングテストによる評価]	日本版デンバー式発達スクリーニング検査、遠城寺式乳幼児分析発達検査・乳幼児精神発達診断法について学ぶ。

評価方法	・筆記試験（８０％）　・授業態度（5%）　・実技テスト（１５％）
オフィスアワー	授業前後の休憩時間

	書名	著書名	出版社名
教科書	標準作業療法　専門分野　作業療法評価学　第3版	能登真一他編	医学書院
参考書	標準理学療法学・作業療法　専門基礎分野　人間	岩崎 清隆	医学書院
	作業療法学概論　ゴールドマスターテキスト　作業療法学概論　改訂第2版	長崎　重信監修　　里村恵子　編集	メジカルビュー社

科　　目	精神障害評価学	単位・時間数	1単位・30時間
担当講師	手塚 雅之	学　年	2年生　前期
実績経験	資格 作業療法士・健康運動実践指導者	精神科病院の臨床経験５年、その後「専門学校」を中心に教育歴１８年。養成教育にたずさわりながら、身障系病院、高齢者施設、精神病院などでも経験を重ねた。それらの実務経験をもとに講義を行う。	

授業の位置づけ	作業療法は精神科領域におけるリハビリテーションの中心に据えられており、作業療法を実施するにあたって、様々な精神障害者の特徴を知り、精神科作業療法の一連の流れを理解しておく必要がある。本講義では精神科作業療法を実施する際に、初期の段階で必須となる「評価技法」について、その意義・目的・方法を解説する。精神障害のある人を理解し援助するための基礎技法は、「人を理解する」という観点から他の分野にも通用する大切な技法であり、医療従事者としては必須の能力である。	
到達目標	精神科作業療法における「評価方法」の一環として、（1）患者理解・自己理解について説明できる。（2）精神科作業療法の評価の基礎技法・要点について説明できる。	
授業形態	講義・演習	対面と遠隔の併用授業

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	評価学の概要	精神科における「観察」と「評価」
2回	評価とは	一連の流れ／情報収集より大事なこと
3回	観察（1）	第一印象とノンバーバルサイン
4回	観察（2）	ノンバーバルサイン
5回	患者・自己理解	関与しながらの観察／自己の治療的活用／精神機能の評価
6回	観察（3）	生活の観察
7回	観察（4）	作業遂行能力の観察
8回	観察（5）	日常生活の観察
9回	評価手法（1）	興味チェックリスト／箱作り法
10回	評価手法（2）	HTPテスト
11回	評価プロセス	評価と治療／リハビリテーションの流れ
12回	評価のまとめ（1）	臨床思考過程／ICF／評価のまとめ
13回	評価のまとめ（2）	臨床思考過程／ICF／評価のまとめ
14回	治療目標の設定	長期目標・短期目標
15回	講義のまとめ	評価学のまとめ

成績評価	試験80%、課題20%	受講上のルール・留意点	3分の1を超える授業時間数を欠席したものは試験が受けられない。

課題やレポートに関するフィードバック
フィードバックは全体に実施する

	書名	著書名	出版社名
教科書	・精神障害と作業療法	山根寛	三輪書店
参考書	・精神障害作業療法学	山口芳文	メジカルビュー社
オフィスアワー	・「木曜日以外」または「メールで相談可」 上記以外でも、空いている時間は対応可能です。		

科　目	作業療法基礎演習Ⅱ	単位・時間数	2単位・60時間
担当講師	阿部英人	学　年	2年生　前期
実績経験	資格		
	作業療法士		

授業の位置づけ	作業療法は「評価に始まり、評価に終わる」と言われるほど作業療法士が対象者を「評価」をすることはとても大切です。 対象者の情報・状態を正確に捉えることが『評価』です。そのためには、正確な検査・測定や面接技法などを学び、正しい方法で評価を実施できることが必要です。 この授業では作業療法の主な3つの領域である身体障害、精神障害、発達障害分野における評価技法を実技・演習を通じて習得します。
到達目標	①身体障害分野の検査測定の目的、内容を理解し適切な方法で実施できる。 ②精神障害評価学で学んだ精神科領域における「作業療法評価の技法」を演習を通して経験し実施できる。 ③発達障害についての疾患知識を学び、評価を理解し、説明できる。発達障害の問題解決のために必要な評価及び支援内容を理解し説明できる。
授業形態	演習　　対面授業

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	身体障害分野①　担当：栗原	バイタルサイン　講義と実技
2回		
3回	身体障害分野②　担当：栗原	上肢機能検査　講義と実技
4回		
5回	身体障害分野③　担当：伴野	知覚検査　感覚の伝導路と感覚の種類
6回		感覚検査の意義と目的　中枢神経系疾患と末梢神経損傷における感覚検査の違い
7回		表在感覚の検査　演習
8回		深部感覚の検査　演習
9回		複合感覚の検査　演習
10回		感覚検査のまとめ
11回	精神障害分野　講義オリエンテーション 担当：手塚	対人コミュニケーションの演習を行う
12回	精神障害分野　他者・自己の理解	自己肯定感・自己管理能力について演習を通して学ぶ
13回		
14回	精神障害分野　観察・面接（観る）	観察から非言語的情報を読み取る体験を行う
15回	精神障害分野　観察・面接（聴く）	対人コミュニケーションにおいて聴く練習を行う
16回	精神障害分野　観察・面接（伝える）	伝え方、伝わり方の演習を行う
17回	精神障害分野　医療面接	信頼関係を築くための面接・質問を考える
18回		医療場面における面接を体験する
19回	精神障害分野　観察（作業面接）	作業面接の観察・記録をする
20回		
21回	発達障害分野　知的機能の評価 担当：大西	知的機能に必要な評価項目と実施、解釈について学ぶ
22回		
23回	発達障害分野　発達障害児の評価	遊びの評価、視知覚機能、上肢の操作機能評価を学ぶ
24回		粗大運動機能評価
25回	発達障害分野　脳性麻痺児の評価（姿勢・運動）	脳性まひの特徴を知り、反射・筋緊張・姿勢反射・姿勢と手の機能を学ぶ
26回	発達障害分野　脳性麻痺児の上肢機能評価	脳性まひの特徴を知り、姿勢と手の機能、日常生活動作機能評価を学ぶ
27回	発達障害分野　重症心身障害児の評価	姿勢・手の機能の特徴を学ぶ、対象者の評価を学ぶ
28回	発達障害分野　摂食機能評価	対象者の特徴を知り口腔機能の評価方法を学ぶ
29回	発達障害分野　食事動作機能評価	対象者の特徴を知り食事動作機能の評価方法を学ぶ
30回	発達障害分野　整形外科疾患に対する評価（二分脊椎など）	疾患に合わせた評価、まとめを学ぶ

成績評価	レポート、筆記試験、実技試験などの結果を総合して評価を行う。 評価方法は各分野によって異なる。各分野の評価点は60％以上の得点を得なければならない。 いずれかの分野が60％に満たない場合は、当該分野について再試験を実施する。	受講上のルール・留意点	身障分野①②：担当教員　栗原 身障分野③　：担当教員　阿部 精神分野　：担当教員　手塚 発達分野　：担当教員　大西 実技の習得には練習が必要です。技法のみならず、評価を行う目的や評価方法など対象者に正確に提示・説明することも大切です。実技演習をする際は、実際の対象者を想定した練習を心掛けて取り組んでください。

課題やレポートに関するフィードバック

	書名	著書名	出版社名
教科書	（身体障害分野）標準作業療法学　作業療法評価学　能登真一　他　編集　医学書院 神経診察クローズアップ　正しい病巣診断のコツ　鈴木則宏　MEDICAL　VIEW （精神障害分野）標準作業療法学　作業療法評価学　能登真一　他　編集　医学書院 （発達障害分野）作業療法学ゴールドマスターテキスト　発達障害作業療法学　長崎重信　監修　MEDICAL　VIEW		
参考書			
オフィスアワー	各教員に確認のこと		

科　　目	身体障害治療学Ⅰ	単位・時間数	1単位・　30時間
担当講師	阿部　英人、五十嵐千代子	学　年	2年生　前期
実績経験	資格 作業療法士	病院３年、介護保険関連施設７年、教育機関１０年	

授業の位置づけ	○ＩＣＦとは2001年に世界保健機関（ＷＨＯ）総会において採択された人間の生活機能と障害の分類法である。作業療法を展開するにあたり、対象者個人の人物・物的・文化的環境との関わりを幅広く捉え、プラス面、マイナス面を同時に評価し、治療に結び付ける視点を養う必要がある。 ○循環器、呼吸器、糖尿病、腫瘍についての病態及び評価方法、治療法について講義を通して学ぶ。	
到達目標	①ICFの特徴について説明することが出来る。 事例をもとにICFの分類を行うことが出来る。 ③各疾患の病態を説明することが出来る。 ④各疾患の介入方法について説明することが出来る。	②
授業形態	講義・演習	対面授業または対面と遠隔の併用授業

授業計画

回数	項目	講義内容
１回	ICFについて	ICFの概念について
２回	ICFについて	ICFによる生活機能と障害の分類、環境因子の分類
３回	循環器疾患の作業療法	循環器の構造と機能
４回	循環器疾患の作業療法	循環器疾患の病態について
５回	循環器疾患の作業療法	循環器疾患の作業療法
６回	循環器疾患の作業療法	循環器疾患の作業療法
７回	呼吸器疾患の作業療法	呼吸器の構造と機能
８回	呼吸器疾患の作業療法	呼吸器疾患の病態について
９回	呼吸器疾患の作業療法	呼吸器疾患の作業療法
１０回	呼吸器疾患の作業療法	呼吸器疾患の作業療法
１１回	糖尿病疾患への作業療法	糖尿病疾患の病態について
１２回	糖尿病疾患への作業療法	糖尿病疾患の作業療法
１３回	腫瘍疾患への作業療法	腫瘍疾患の病態について
１４回	腫瘍疾患への作業療法	腫瘍疾患の作業療法
１５回	腫瘍疾患への作業療法	腫瘍疾患の作業療法

成績評価	定期試験100％	受講上のルール・留意点	

課題やレポートに関するフィードバック
フィードバックは全体に実施する

	書名	著書名	出版社名
教科書	作業療法学全書 第4巻　身体障害 標準作業療法学　作業療法評価学	菅原 洋子 編著 能登真一　他　編集	協同医書出版 医学書院
参考書			
オフィスアワー	随時		

科　目	身体障害治療学Ⅱ	単位・時間数	2単位・　30時間
担当講師	栗原英里、阿部英人、五十嵐千代子、田中勇次郎、村越妙美	学　年	2年生　後期
実績経験	資格 作業療法士	作業療法士として病院勤務などの実務経験を活かし、実例を交えながら講義を行う	

授業の位置づけ	・さまざまな原因で生じる筋力や関節の動きの問題に対して、どのように改善を図るのかを講義と演習で学ぶ。 ・進行性の病気に対する作業療法士としての関わり方を神経筋疾患の講義を通して学ぶ。 ・事故などの外傷だけではなく糖尿病などを原因として切断に至る方も多く、切断前後の評価や切断後の作業療法アプローチについて学ぶ。 ・病気や怪我によって自分の意思を口頭で伝えられない場合の意思伝達手段や、機器を使って利便性を図る工夫などについて学ぶ。	
到達目標	・筋力や関節運動に問題が生じる原因と改善方法について説明できる。 ・神経筋疾患の病態像と作業療法アプローチについて説明できる。 ・切断の前後の評価と術後の断端管理、作業療法アプローチ、義手義足が使用できるまでの過程を説明できる。 ・コミュニケーション機器、アクセシビリティ、意思伝達装置などの対象と機器・道具名など説明することができる。	
授業形態	講義・演習	対面と遠隔の併用授業

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	筋力の治療原理	筋力低下の原因、評価について　講義と演習
2回	筋力の治療原理	筋力の維持・改善の方法　講義と演習
3回	関節可動域の治療原理	関節可動域制限の原因、評価について　講義と演習
4回	関節可動域の治療原理	関節可動域の維持・改善の方法　講義と演習
5回	神経筋疾患	パーキンソン病の評価と作業療法アプローチ　講義
6回	神経筋疾患	筋萎縮性側索硬化症の評価と作業療法アプローチ　講義
7回	神経筋疾患	多発性硬化症の評価と作業療法アプローチ　講義
8回	神経筋疾患	脊髄小脳変性症の評価と作業療法アプローチ　講義
9回	切断	切断の原因、手術について。術前・術後評価について講義
10回	切断	切断者の事例を通しての作業療法アプローチについて講義
11回	熱傷	病態と医学的治療について講義
12回	熱傷	評価と作業療法アプローチについて講義
13回	コミュニケーション機器	コミュニケーション機器の使用について　講義と演習
14回	〃	アクセシビリティ・意思伝達装置について　講義と演習
15回	〃	〃

成績評価	・定期試験100点満点 ・授業時間数の３分の１以上欠席した者には単位を与えない	受講上のルール・留意点	・演習ではTシャツ・ジャージ・スニーカーなど動きやすい服装で参加するよう指示されることがあります。 ・スマートフォン、PCなどは指示のあったときのみ使用してください。

課題やレポートに関するフィードバック
フィードバックは全体に実施する。

	書名	著書名	出版社名
教科書	作業療法全書　改訂第3版　作業治療学１　身体障害	菅原洋子　編集	協同医書出版社
参考書			
オフィスアワー	平日　9時～17時　教員室 メールでの連絡は常に受け付けますが、返信には時間を要する場合あり。 田中先生、村越先生は外部講師のため授業前後の休憩時間		

科　　目	発達障害治療学Ⅰ	単位・時間数	1単位・30時間
担当講師	大西　麓子	学　　年	2学年・後期
実績経験	資格：作業療法士	経験年数	施設等 50年

教育目標	1．発達障害に対する主な疾患ついての作業療法の実際を学び、理解できる。 2．発達障害児の症例をとおして発達段階や疾患の特徴を踏まえた評価および支援目標や内容を説明できる。
教育内容	発達障害の主要疾患について症例をとおして発達段階や疾患の特徴を踏まえた評価、支援目標や内容について学ぶ。

講義内容　対面授業

回数	項目	講義内容
1回	発達障害の作業療法の概念、理論	発達障害の治療概念、枠組み、理論について理解する。発達障害の評価一治療過程を理解する。治療形態、後半のグループ分けの説明
2回	作業療法の実際	機器、自助具、装具の製作や操作体験
3回	姿勢・運動の治療の実際	姿勢の特徴と分析、上肢機能を促す治療を体験学習を通して学ぶ
4回	姿勢介助の実際・更衣動作へのアプローチ	実技を通して体験する(背臥位から寝返り、座位、四つ這いへ、移乗動作介助）更衣動作の援助方法と対象疾患を学ぶ
5回	摂食機能に対するアプローチ	摂食機能が困難な疾患を学ぶ。摂食介助方法を体験を通して学ぶ
6回	摂食機能に対するアプローチ	摂食機能が困難な疾患を学ぶ。摂食介助方法を体験を通して学ぶ
7回	遊びの治療的活用	遊具を体験して、活動を分析し、対象疾患を学ぶ.
8回	学習障害児、注意欠陥多動性障害、自閉症スペクトラム症等に対する作業療法の実際	発達障害児（注意欠陥多動性障害、自閉スペクトラム症など）の状態像の把握と作業療法の実際を学ぶ。ビデオ視聴、グループ発表①②③
9回	注意欠陥多動性障害、自閉症スペクトラム症・発達性協調運動障害等に対する作業療法の実際	発達障害児への机上活動、日常生活活動への作業療法の実際を学ぶ.
10回	2分脊椎症児に対する作業療法の実際への作業療法の実際	2分脊椎症児の特徴と作業療法の実際を学ぶ。グループ発表④
11回	筋ジストロフィー症児/重症心身障害児・者に対する作業療法の実際	筋ジストロフィー症児の特徴と作業療法の実際を学ぶ。グループ発表⑤
12回	知的障害児の作業療法の実際/ダウン症への作業療法の実際	ビデオを通して、状態像を把握し、上肢操作・知的発達を促すおもちゃや遊びについて学ぶ。グループ発表⑥
13回	重症心身障害児の作業療法の実際	遊具を体験して、活動を分析し、対象疾患を学ぶ. ビデオ視聴、グループ発表⑦
14回	脳性麻痺児・者に対する作業療法の実際	グループ発表は四肢麻痺⑧、両麻痺⑨、
15回	脳性麻痺児・者に対する作業療法の実際	グループ発表は片麻痺⑩、アテトーゼ⑪

評価方法	・筆記試験(８０％)　・実技テスト(１０％)　・課題(１０％) の総合判定
オフィスアワー	授業前後の休憩時間

	書名	著書名	出版社名
教科書	作業療法学　ゴールドマスターテキスト発達障害作業療法学	長崎　重信監修　　神作一実　編集	メジカルビュー社
参考書	脳性麻痺児の家庭療育 第４版	編著　：Nancie　R.　Finnie	医歯薬出版株式会社
	子どものリハビリテーション医学	伊藤利之　監修、小池純子編集	医学書院

科　　目	発達障害治療学Ⅱ	単位・時間数	１単位・30時間
担当講師	大西　麓子	学　　年	２学年・後期
実績経験	資格：作業療法士	経験年数	施設等　50年

教育目標	・発達障害についての基礎知識を学び、理解し、説明できる。 ・発達障害児の問題解決のために必要な評価および支援内容を理解し、説明できる。
教育内容	・人間発達学や発達障害評価学における知識を対象者に結び付けて考える。 ・対象者に必要な具体的な支援内容を学ぶ。

講義内容　対面授業

回数	項目	講義内容
１回	症例のまとめ方	症例の報告の書き方（評価ー分析・考察、治療目標・リハ目標。プログラムの過程を学ぶ。ICFに沿って、まとめ方を学ぶ。
２回	症例を通して評価をまとめる ケース１重症心身障害児）	動画を活用し脳性麻痺児を評価する。その後、評価を行う（個別、グループ学習・発表）
３回	症例を通して評価をまとめる（ケース１）	動画を活用し脳性麻痺児を評価する。その後、評価のまとめを行う（個別、グループ学習・発表）
４回	症例から問題点、治療方針をまとめる（ケース１）	直接的ＯＴと間接的ＯＴ。活動分析と関連した間接的なＯＴを提案する。
５回	症例を通して評価をまとめる （ケース２不随運動型脳性麻痺児）	動画を活用し脳性麻痺児を評価する。その後、評価を行う（個別、グループ学習・発表）
６回	症例から問題点、治療方針をまとめる（ケース２）	提示した症例の問題点・目標・治療方法を立案し治療を立案する。（個別、グループ学習・発表）
７回	症例を通して評価をまとめる。 （ケース３痙直型四肢麻痺児）	動画を活用し脳性麻痺児を評価する。その後、評価を行う（個別、グループ学習・発表）
８回	症例から問題点、治療方針をまとめる（ケース３）	提示した症例の問題点・目標・治療方法を立案し治療を立案する。（個別、グループ学習・発表）
９回	重症心身障害児の評価	脳性まひ児の特徴を理解し、評価方法を体験する。
10回	症例を通して評価をまとめる （ケース４発達障害児・知的障害児）	脳性まひ児の特徴を理解し、評価・治療方法を立案する。提示した症例の治療を立案する。（個別、グループ学習・発表）
11回	症例を通して目標・問題点・治療を立案する （ケース４）	発達障害児を提示し、日常生活技能を促す、上肢・認知機能に関連した活動を考案。（個別、グループ学習・発表）
12回	症例を通して評価をまとめる （ケース５発達障害児・知的障害児）	発達障害児を想定し、目標達成のための全身運動活動を考案し、関連した日常生活機能を考察する。（個別、グループ学習・発表）
13回	症例を通して評価をまとめる　（ケース５）	視知覚機能に関連した活動を提示し、活動分析を行う。関連した生活動作を考察する。（個別、グループ学習・発表）
14回	発達障害児の感覚統合評価と解釈	発達障害児の感覚統合評価の実技、解釈の練習を行う
15回	地域での作業療法	地域での作業療法の実際を学ぶ

評価方法	・筆記試験（４０％）　・授業態度（１０％）　・課題（５０％）の総合判定	
オフィスアワー	授業前後の休憩時間	

	書名	著書名	出版社名
教科書	脳性まひ児の家庭療育　第４版	編著　：Nancie　R.　Finnie	医歯薬出版
参考書	作業療法学　ゴールドマスターテキスト発達障害 作業療法学	長崎　重信監修　　神作一実　編集	メジカルビュー社

科　　目	精神障害治療学Ⅰ	単位・時間数	1単位・30時間
担当講師	山下 高介	学　年	2年生 後期
実績経験	資格 作業療法士	病院勤務・訪問看護などを経験。それらの実務経験を踏まえたうえで講義を行う。	

授業の位置づけ	作業療法は精神医療におけるリハビリテーションの中心に据えらており、評価から治療へいたる一連の流れや臨床思考過程を理解しておくことは、臨床の現場に出る前に必須のことである。患者様の精神疾患の種類により医療スタッフの接し方は変わり、治療のポイントも異なってくるため、疾患毎の特徴や回復の時期に応じた作業療法の進め方を解説する。国家試験の問題には良問も多く精神科作業療法の要点を的確にまとめている部分もあるので、それらを活用しながら理解につなげていく。	
到達目標	（1）評価から治療計画までの流れを症例検討を通して理解することができる。（2）治療構造と援助方法について理解できる。（3）回復過程に応じた作業療法と援助方法について理解できる。	
授業形態	講義・演習	対面と遠隔の併用授業

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	講義オリエンテーション	精神疾患と精神科作業療法
2回	評価から治療計画	作業療法の評価・治療の展開
3回	情報収集・観察・面接	情報収集・観察・面接の視点への理解
4回	作業療法の治療構造・作業活動の基本要素	作業活動の活用と治療構造の理解
5回	各評価からの全体像の把握と理解	治療構造の設定への流れの理解
6回	問題点・利点・焦点化	治療構造の設定への流れの理解
7回	治療的関わり・援助とは	治療的態度・援助への理解
8回	集団の活用	集団の効果への理解
9回	治療目標・治療構造	治療構造の設定への流れの理解
10回	統合失調症の作業療法	疾患の理解
11回	統合失調症の作業療法	各回復過程に応じた治療構造と援助
12回	統合失調症の作業療法	各回復過程に応じた治療構造と援助
13回	統合失調症の作業療法	行動特性の理解
14回	統合失調症の作業療法	国家試験問題実施
15回	統合失調症の作業療法	国家試験問題解説

成績評価	試験50%、課題50%	受講上のルール・留意点	3分の1を超える授業時間数を欠席したものは試験が受けられない。

課題やレポートに関するフィードバック
フィードバックは全体に実施する

	書名	著書名	出版社名
教科書	・精神障害と作業療法 ・精神疾患の理解と精神科作業療法	山根寛 朝日隆	三輪書店
参考書	・精神障害作業療法学	山口芳文	メジカルビュー社
オフィスアワー	メールで相談可。		

科　目	精神障害治療学Ⅱ	単位・時間数	1単位・30時間
担当講師	山下 高介	学　年	2年生 後期
実績経験	資格 作業療法士	病院勤務・訪問看護などを経験。それらの実務経験を踏まえたうえで講義を行う。	

授業の位置づけ	作業療法は精神医療におけるリハビリテーションの中心に据えらでおり、評価から治療へいたる一連の流れや臨床思考過程を理解しておくことは、臨床の現場に出る前に必須のことである。患者様の精神疾患の種類により医療スタッフの接し方は変わり、治療のポイントも異なってくるため、疾患毎の特徴や回復の時期に応じた作業療法の治療構造と援助方法について解説する。国家試験の問題には良問も多く精神科作業療法の要点を的確にまとめている部分もあり、精神医学で学んだ各疾患についてその知識を復習する。	
到達目標	（1）評価から治療方法までの流れを症例検討を通して理解することができる。（2）治療構造と援助方法について理解できる。（3）回復過程に応じた作業療法と援助方法について理解できる。	
授業形態	講義・演習	対面と遠隔の併用授業

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	気分障害の作業療法	疾患の理解
2回	気分障害の作業療法	症例検討
3回	気分障害の作業療法	治療構造と援助
4回	気分障害の作業療法	国家試験問題実施
5回	気分障害の作業療法	国家試験問題解説
6回	神経性障害の作業療法	疾患の理解
7回	神経性障害の作業療法	治療構造と援助
8回	神経性障害の作業療法	国家試験問題実施
9回	神経性障害の作業療法	国家試験問題解説
10回	人格障害の作業療法	疾患の理解と治療構造・援助
11回	摂食障害の作業療法	疾患の理解と治療構造・援助
12回	人格・摂食障害の作業療法	国家試験問題実施
13回	人格・摂食障害の作業療法	国家試験問題解説
14回	依存症の作業療法	疾患の理解と治療構造・援助
15回	大人の発達障害の作業療法	疾患の理解と治療構造・援助

成績評価	試験50%、課題50%	受講上のルール・留意点	3分の1を超える授業時間数を欠席したものは試験が受けられない。

課題やレポートに関するフィードバック
フィードバックは全体に実施する

	書名	著書名	出版社名
教科書	・精神障害と作業療法 の理解と精神科作業療法　・精神疾患	山根寛 朝日隆	三輪書店
参考書	・精神障害作業療法学	山口芳文	メジカルビュー社
オフィスアワー	メールで相談可。		

科　目	日常生活活動学	単位・時間数	1単位・ 30時間
担当講師	大倉　久美子	学　年	2年生　後期
実績経験	資格 作業療法士	作業療法士として、病院や地域で生活再建や生活の質の向上を支援してきた実務経験を活かして講義を行う。	

授業の位置づけ	「日常生活」は作業療法士が扱う専門性の高い重要な領域で、その専門性や他職種との連携における役割の質を高める必要がある。ADLの理解を深め、対象者がその人らしい「日常生活」を取り戻すための支援システムや、評価法を説明する。また、実際の福祉機器に触れ、知見を広める。 授業方法：講義、演習、グループワーク、発表	
到達目標	・日常生活活動(ADL)とは何か、その評価範囲と視点について説明することができる。 ・福祉機器について説明することができる。 ・ADLの支援システムについて説明することができる。 ・ADL評価とは何か、どのように行うのかを説明することができる。	
授業形態	講義・演習	対面授業（必要に応じて遠隔の併用授業）

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	オリエンテーション ADLの概念	ADL、IADL、APDLなどについて
2回	ADLとQOL	ADLとQOLの関係、ノーマライゼーションなどについて
3回	杖、歩行補助具、装具	杖と歩行器などの種類と使用方法について
4回	起居・移乗について	起居動作・移乗動作について
5回	車いすについて	車いすの種類・パーツの名称・使用方法などについて
6回	ADLの支援システム	介護保険と障害者総合支援法について
7回	国際福祉機器展	生活する上で用いられる福祉機器について
8回	国際福祉機器展	生活する上で用いられる福祉機器について
9回	国際福祉機器展の 課題発表	課題に沿った内容の発表
10回	日常生活の構成要素	狭義のADLを項目ごとに構成要素を見出す
11回	日常生活の構成要素	構成要素に含まれる意味合いを確認する
12回	評価と演習	ADL評価について
13回	評価と演習	代表的な数値で表す評価を模擬的に行う
14回	評価と演習	代表的な数値で表す評価を模擬的に行う
15回	評価と演習	評価のまとめと考察の方法について

成績評価	・レポート　(15%) ・発表　(15%) ・筆記試験　(70%)	受講上のルール・留意点	【レポート・発表】国際福祉機器展にて高齢者及び障害者(児)の日常生活の自立促進のための福祉機器、リハビリテーション機器や介護機器・用品について学び、内容をまとめ発表する。 【筆記試験】教科書・講義資料および講義内容から出題。

課題やレポートに関するフィードバック
フィードバックは全体に実施する。

	書名	著書名	出版社名
教科書	ADLとその周辺　評価・指導・介護の実際	伊藤利之　鎌倉矩子　監修	医学書院
参考書	標準作業療法学　作業療法評価学	岩崎テル子　他	医学書院
オフィスアワー	随時		

科　　目	地域作業療法学Ⅰ	単位･時間数	2単位･　30時間
担当講師	阿部　英人	学　年	2年生　後期
実績経験	資格 作業療法士	病院３年、介護保険関連施設７年、教育機関１０年	

授業の位置づけ	地域リハビリテーションとは「障害があるものもそうでないものも、安全にしかも安心して生活ができるように地域が変わっていくこと」である。病院や施設から住み慣れた地域へと移行するためには実際の生活を見据えたリハビリテーションの提供が必要である。この授業では障害者、高齢者を支える人的・物理的・社会制度的環境に関する知識も学ぶ。
到達目標	①地域リハビリテーションの取り組みと課題について理解する ②介護保険制度について説明することが出来る ③地域リハビリテーションにおける作業療法士の役割について理解する
授業形態	講義・演習　　対面授業または対面と遠隔の併用授業

授業計画

回数	項目	講義内容
１回	地域リハビリテーションの概念について	地域リハビリテーションとノーマライゼーション（グループディスカッション）
２回	地域リハビリテーションの概念について	地域リハビリテーションとノーマライゼーション（発表）
３回	地域リハビリテーションの概念について	ICIDHとICF
４回	社会資源について	バリアフリーとユニバーサルデザイン（講義・演習）
５回	社会資源について	バリアフリーとユニバーサルデザイン（身近にあるユニバーサルデザインの発表）
６回	社会資源について	介護保険制度
７回	地域リハビリテーション活動	地域包括ケアシステム
８回	地域リハビリテーション活動	行政で働く作業療法士の活動
９回	地域リハビリテーション活動	行政で働く作業療法士の活動
１０回	地域リハビリテーション活動	訪問リハビリテーションでの作業療法士の役割
１１回	地域リハビリテーション活動	訪問リハビリテーションでの作業療法士の役割
１２回	地域リハビリテーション活動	通所リハビリテーションでの作業療法士の役割
１３回	地域リハビリテーション活動	通所リハビリテーションでの作業療法士の役割
１４回	地域リハビリテーション活動	生活行為向上マネジメントの概要
１５回	地域リハビリテーション活動	生活行為向上マネジメント演習

成績評価	課題提出で評価	受講上のルール・留意点	

課題やレポートに関するフィードバック
フィードバックは全体に実施する

	書名	著書名	出版社名
教科書			
参考書			
オフィスアワー	随時		

科　目	地域実習セミナー	単位・時間数	1単位・　45時間
担当講師	大倉　久美子	学　年	2年生　後期

実績経験	資格	作業療法士として、訪問や通所など地域にて支援してきた実務経験を活かしてオリエンテーション、演習を行う。
	作業療法士	

授業の位置づけ	地域における施設の役割や機能、その中で働く作業療法士の業務を知ることにより、知識習得への動機づけを行うとともに、作業療法士としての基本的態度の獲得を目指す。 授業方法：演習・発表
到達目標	・施設のしくみや役割と医療機関とのつながりを理解する。　・作業療法士の業務と役割を理解する。 ・対象児・者を支援するチームとスタッフについて理解する。　・地域における対象児・者の生活について理解する。 ・作業療法士の実際を見聞きし、知識習得への動機づけを行う。 ・自身の見学態度を振り返り、作業療法士としての基本的態度を獲得する。
授業形態	演習・発表　　対面授業（必要に応じて遠隔の併用授業）

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	オリエンテーション	実習の目的や心構えについて
2回	演習	実習のマナーについて（身だしなみなど）
3回	演習	実習のマナーについて（連絡について）
4回	演習	実習のマナーについて（挨拶・言葉使い）
5回	演習	実習中の注意、対象者について
6回	演習	リスク管理
7回	演習	感染症対策について
8回	演習	模擬患者演習
9回	演習	模擬患者演習
10回	演習	模擬患者演習
11回	演習	模擬患者演習
12回	事前学習	地域のリハビリについて（地域とは）
13回	事前学習	地域のリハビリについて（支援システム）
14回	事前学習	訪問リハビリについて
15回	事前学習	通所リハビリについて
16回	事前学習	実習施設や分野に合わせた自己学習
17回	事前学習	分野ごとにグループワークで学習内容を共有する
18回	実習の報告まとめ	実習を終えて報告内容をまとめる
19回	実習の報告	実習の報告会
20回	実習の報告	実習の報告会
21回	実習の報告	実習の報告会
22回	実習の報告	実習の報告会
23回	振り返り	振り返りと今後の目標設定

成績評価	提出物（50％） 発表　（50％）	受講上のルール・留意点	

課題やレポートに関するフィードバック
FBは個別及び全体に実施する。

	書名	著書名	出版社名
教科書			
参考書			
オフィスアワー	随時		

科　目	地域実習	単位・時間数	1単位・45時間
担当講師	作業療法学科教員	学　年	2年生 後期
実績経験	資格 作業療法士		

授業の位置づけ	地域実習は、臨床実習指導者のもとで、地域で支援を必要とする人々や、その家族に作業療法を用いた援助を提供するための知識・技術を習得することを目的とする。 1．地域における作業療法および作業療法士の役割と機能を学ぶ 2．臨床実習指導者の指導、援助のもとに、地域での支援や援助の実際的方法を学ぶ 3．地域包括ケアシステムや生活行為の重要性について学ぶ
到達目標	今までの学内での講義・演習で修得した、知識をもとに、指導者の指導・援助のもと、地域での作業療法士の役割や、対象児・者への支援・援助を理解することを目標とする。 ①作業療法学生としての礼儀・礼節・接遇が体現でき、基本的なルールを遵守することができる。 ②実習に意欲的に取り組むことが出来る ③地域での作業療法および作業療法士の役割について説明することが出来る ④地域での他職種連携について、事例を用いながら説明することが出来る ⑤生活行為、および生活行為向上マネジメントの必要性を説明できる
授業形態	講義・演習・実習　　対面授業

授業計画

実習前・臨床実習・実習後の学習上の注意点
実習前 ①地域実習に関連する授業の指定教科書等・講義資料のポイントは実習前に整理し、確認すること。 ②地域包括ケアシステム、生活行為向上マネジメントの知識を整理し、確認すること。 臨床実習 ①臨床現場では作業療法分野だけでなく、多職種連携を常に思い浮かべて、広範囲の知識と技術を体系的に学んでいく。 ②臨床現場では積極的に様々なことを体験、見学するように努めること。 ③習得した知識は毎日書類（ポートフォリオ）として記録すること。 実習後 ①実習中に学んだ点を整理し、発表の準備を行うこと。 ②必要に応じて実習担当者と面談し、実習の総括を実施すること。 ③実習の成果を書類にまとめ、提出すること。

成績評価	実習地評価、課題・提出物もとに総合的に判断する。	受講上のルール・留意点	原則として遅刻、早退、欠席は認めない。

課題やレポートに関するフィードバック
実習地での課題やレポートのフィードバックは実習地で実施する。また、実習全体に対する相談およびフィードバックは、「実習中の電話やメール」「臨床実習地訪問の面談時」「実習終了後」に担当教員からも行う。

	書名	著書名	出版社名
教科書	臨床実習の手引き	学校資料	
参考書			
オフィスアワー	担当教員への連絡は電話またはメールで随時可能		

科　目	作業療法特講	単位・時間数	1単位・24時間
担当講師	作業療法学科教員・外部講師	学　年	3年生 後期
実績経験	資格 作業療法士	作業療法士として病院勤務などの実務経験を活かし、実例を交えながら講義を行う 専任教員・外部講師が自分の担当する対象者の症例報告を通して実践的な講義を行う	

授業の位置づけ	症例報告を通して作業療法の評価・治療についての理解を深める 各領域での臨床に触れ、その内容について理解できるようになる。	
到達目標	領域ごとの治療について理解出来る 領域ごとに合わせた理論を習得する 領域ごと、評価や治療で用いられる検査・評価方法について理解できる	
授業形態	講義・演習	対面授業・一部遠隔授業

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	オリエンテーション	臨床実習について
2回	オリエンテーション	臨床実習について
3回	症例検討	精神障害領域の症例検討
4回	症例検討	精神障害領域の症例検討
5回	症例検討	身体障害領域の症例検討（回復期）
6回	症例検討	身体障害領域の症例検討（回復期）
7回	症例検討	身体障害領域の症例検討（急性期）
8回	症例検討	身体障害領域の症例検討（急性期）
9回	症例検討	老年期障害領域の症例検討
10回	症例検討	老年期障害領域の症例検討
11回	症例検討	発達障害領域の症例検討
12回	症例検討	発達障害領域の症例検討

成績評価	症例検討報告30% レポート70%	受講上のルール・留意点	課題提出は締め切りを厳守 評価には授業全体の２／３の出席が必要

課題やレポートに関するフィードバック
終了後にＦＢを行う。

	書名	著書名	出版社名
教科書	なし		
参考書	各領域の教科書・授業資料		
オフィスアワー	随時		

科　目	作業療法研究法	単位・時間数	1単位・ 15時間
担当講師	埜崎　都代子	学　年	3年生　後期
実績経験	資格 作業療法士・精神保健福祉士	作業療法士として40年、このうち教員経験が30年ほどですが、常勤・非常勤を含め、ずっと臨床に並行して携わっております。臨床は、神経難病・精神科デイケア・認知症高齢者・発達障害児支援などの経験があり、現在も認知症高齢者・発達障害児支援に携わっています。25年ほど前に精神保健福祉士の資格を取得しています。	

授業の位置づけ	作業療法についての総合的な知識を土台に、エビデンスに基づいた実践をしていくために、また自ら主体的に問題意識をもち、解決し、新しい知見を開拓できるよう、科学的な研究手法について基礎知識を学習する。	
到達目標	研究姿勢・倫理・過程・各種研究手法について基礎知識を習得する	
授業形態	講義・演習および対面と遠隔授業の併用	

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	研究とは	研究とは何か　作業療法における研究の目的
2回	研究の様式と過程	研究様式の分類　　研究の流れ
3回	文献レビューの仕方	文献レビューの目的・検索方法・読み方およびテーマ提出
4回	文献研究	総説・メタアナリシス・理論
5回	研究倫理・管理・報告	研究の倫理と管理　論文の書き方と発表
6回	種々の研究法1	調査的研究・実験的研究・統計の方法
7回	種々の研究法2	シングルケース実験法・事例研究
8回	文献研究の発表	個別研究のグループ発表と全体発表および質疑

成績評価	文献検討のレポートと発表100%	受講上のルール・留意点	各自の興味あるテーマについて、実際に文献研究を行い発表していただく予定。

課題やレポートに関するフィードバック
FBは、授業内その他で適宜行う。レポートは返却する。

	書名	著書名	出版社名
教科書	作業療法士のための研究法入門	鎌倉矩子・宮前珠子・清水一	三輪書店
参考書	必要に応じ紹介		
オフィスアワー	授業前後の休憩時間		

科　目	作業療法総合演習Ⅰ	単位・時間数	2単位 ・ 60時間
担当講師	作業療法学科　教員	学　年	3年生　後期
実績経験	資格 作業療法士	各分野担当の教員 作業療法士として医療・療養・介護・療育施設にて治療を行ってきた実務経験を活かし、実例を交えながら講義・演習を行う。	

授業の位置づけ	臨床実習Ⅰの実施前に、実習直前の準備教育を行う。 1)身体障害系セミナー 2)老年期障害系セミナー 3)発達障害系セミナー 4)精神障害系セミナー 各評価学・治療学の振り返りの講義、実技演習。	
到達目標	事例報告を中心とした演習、評価実技などを共同学習において学び、評価実習や総合実習で必要な知識を確認する。各領域の評価学・治療学などの振り返りを通じて、作業療法についての理解を深める。	
授業形態	演習	対面と遠隔の併用授業

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	オリエンテーション	作業療法総合演習Ⅰの全体説明
2回	評価演習	身体障害分野① 情報収集
3回	評価演習	身体障害分野② 面接、観察
4回	評価演習	身体障害分野③ 検査
5回	評価演習	身体障害分野④ 測定
6回	評価演習	身体障害分野⑤ 全体像のまとめ
7回	評価演習	身体障害分野⑥ 目標設定
8回	評価演習	身体障害分野⑦ 考察
9回	評価演習	老年期障害分野① 情報収集
10回	評価演習	老年期障害分野② 面接、観察
11回	評価演習	老年期障害分野③ 検査
12回	評価演習	老年期障害分野④ 測定
13回	評価演習	老年期障害分野⑤ 全体像のまとめ
14回	評価演習	老年期障害分野⑥ 目標設定
15回	評価演習	老年期障害分野⑦ 考察
16回	評価演習	発達障害分野① 情報収集
17回	評価演習	発達障害分野② 面接、観察
18回	評価演習	発達障害分野③ 検査
19回	評価演習	発達障害分野④ 測定
20回	評価演習	発達障害分野⑤ 全体像のまとめ
21回	評価演習	発達障害分野⑥ 目標設定
22回	評価演習	発達障害分野⑦ 考察
23回	評価演習	精神障害分野① 情報収集
24回	評価演習	精神障害分野② 面接、観察
25回	評価演習	精神障害分野③ 検査
26回	評価演習	精神障害分野④ 測定
27回	評価演習	精神障害分野⑤ 全体像のまとめ
28回	評価演習	精神障害分野⑥ 目標設定
29回	評価演習	精神障害分野⑦ 考察
30回	まとめ	全体の振り返り、まとめ

成績評価	提出課題　50% 事例報告評価　50%	受講上のルール・留意点	提出課題は必要内容を記載して、提出期限内に提出すること。 授業時間数の3分の1以上欠席した者には、単位を与えない。

課題やレポートに関するフィードバック
フィードバックはクラス全体に実施する。

科　目	作業療法臨床セミナーⅠ	単位・時間数	2単位 ・ 60時間
担当講師	作業療法学科　教員	学　年	3年生　後期
実績経験	資格 作業療法士	分野担当ごとの各教員 作業療法士として医療・療養・介護・療育施設にて治療を行ってきた実務経験を活かし、実例を交えながら講義・演習を行う。	

授業の位置づけ	臨床実習Ⅰの実施前に、実習直前の準備教育を行う。 1)身体障害系セミナー 2)老年期障害系セミナー 3)発達障害系セミナー 4)精神障害系セミナー 専門領域別に事例報告を行い、質疑応答、討論を行う。 領域別の事例報告を踏まえて臨床実習Ⅱの準備学習を行う。	
到達目標	事例報告を中心とした相互学習を通じて、実習経験を共有し、次期の評価実習や総合実習で必要な知識を習得する。	
授業形態	演習	対面と遠隔の併用授業

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	オリエンテーション	作業療法臨床セミナーⅠの全体説明
2回	事例のまとめ	レポート・レジュメのまとめ方① 情報収集(一般、社会的、医学的)
3回	事例のまとめ	レポート・レジュメのまとめ方② 作用療法評価(面接、観察、検査・測定)
4回	事例のまとめ	レポート・レジュメのまとめ方③ 全体像のまとめ
5回	事例のまとめ	レポート・レジュメのまとめ方④ 目標設定 考察
6回	事例発表	身体障害分野① 症例A 発表
7回	事例発表	身体障害分野② 症例A 検討
8回	事例発表	身体障害分野③ 症例B 発表
9回	事例発表	身体障害分野④ 症例B 検討
10回	事例発表	身体障害分野⑤ 症例C 発表
11回	事例発表	身体障害分野⑥ 症例C 検討
12回	事例発表	老年期障害分野① 症例D 発表
13回	事例発表	老年期障害分野② 症例D 検討
14回	事例発表	老年期障害分野③ 症例E 発表
15回	事例発表	老年期障害分野④ 症例E 検討
16回	事例発表	老年期障害分野⑤ 症例F 発表
17回	事例発表	老年期障害分野⑥ 症例F 検討
18回	事例発表	発達障害分野① 症例G 発表
19回	事例発表	発達障害分野② 症例G 検討
20回	事例発表	発達障害分野③ 症例H 発表
21回	事例発表	発達障害分野④ 症例H 検討
22回	事例発表	発達障害分野⑤ 症例I 発表
23回	事例発表	発達障害分野⑥ 症例I 検討
24回	事例発表	精神障害分野① 症例J 発表
25回	事例発表	精神障害分野② 症例J 検討
26回	事例発表	精神障害分野③ 症例K 発表
27回	事例発表	精神障害分野④ 症例K 検討
28回	事例発表	精神障害分野⑤ 症例L 発表
29回	事例発表	精神障害分野⑥ 症例L 検討
30回	まとめ	全体の振り返り、まとめ

成績評価	提出課題　50% 事例報告評価　50%	受講上のルール・留意点	提出課題は必要内容を記載して、提出期限内に提出すること。 授業時間数の3分の1以上欠席した者には、単位を与えない。

課題やレポートに関するフィードバック
フィードバックはクラス全体に実施する。学生の事例報告を踏まえて、適宜フィードバックを行う。

科　目	身体障害治療学Ⅲ	単位・時間数	1単位・　30時間
担当講師	伊藤伸　仲木右京	学　年	3年生　前期

実績経験	資格	作業療法士として積極的に治療を行ってきた実務経験を活かし、実例を交えながら講義を行う
	作業療法士	

授業の位置づけ	1. 義肢（上肢義手）の基礎知識、適応となる対象者への作業療法介入を学ぶ。 2. ハンドセラピーの概要、代表各疾患のハンドセラピーの実際、スプリント作製実習	
到達目標	1. 義肢と装具の機能と適応について理解する。 2. 切断者に対する義肢装着訓練について理解する。 3. ハンドセラピーの目的、内容について知る。代表疾患のハンドセラピーについて知る。 4. スプリントの作製を経験する	
授業形態	講義	併用授業

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	上肢義手	義手の機能と適応　(zoom)
2回	上肢義手	上肢切断者への作業療法　(zoom)
3回	ハンドセラピー	ハンドセラピー学概論
4回	ハンドセラピー	ハンドセラピーの評価、進め方
5回	ハンドセラピー	ハンドセラピーの評価、進め方
6回	ハンドセラピー	末梢神経損傷に対するハンドセラピー
7回	ハンドセラピー	末梢神経損傷に対するハンドセラピー
8回	ハンドセラピー	末梢神経損傷に対するハンドセラピー
9回	ハンドセラピー	熱傷に対するハンドセラピー
10回	ハンドセラピー	手指拘縮に対するハンドセラピー
11回	ハンドセラピー	手指拘縮に対するハンドセラピー
12回	ハンドセラピー	スプリント作製実習（Thumb Spica）
13回	ハンドセラピー	〃
14回	ハンドセラピー	スプリント作製実習（Thumb Hole Wrist Cock-up ）
15回	ハンドセラピー	〃

成績評価	スプリント作成、定期試験 授業時間数の３分の１以上欠席した者には単位を与えない	受講上のルール・留意点	

課題やレポートに関するフィードバック
実技実習に関しては、必要であれば随時フィードバックされるが、個々にではなく、実習グループ全体に対して行われる場合もある。その他の講義に関する課題でのフィードバックは、担当教員に一任する。

	書名	著書名	出版社名
教科書	義肢装具のチェックポイント	日本整形外科学会／日本リハビリテーション医学会監修	医学書院
参考書			
オフィスアワー	授業前後の休憩時間		

科　目	身体障害治療学演習	単位・時間数	1単位・45時間
担当講師	伴野　麻矢	学　年	3年・前期
実績経験	資格：作業療法士	臨床・教育：24年	

授業の位置づけ	将来作業療法士を目指す学生として、作業療法士の視点で生活と障害の関係性を考えることはもとより、医療人として相応しい態度を培うことはとても大切です。この授業では計3回、脳血管障害の当事者の方々にご協力頂き、生活についての聞き取りや検査・測定など評価をさせて頂きます。当事者の方々と実際に関わることで作業療法の実践的な流れを体験するだけでなく、医療人としての自覚をもった行動を身に着けていく切っ掛けにしてください。 また、グループごとに報告会を行い、互いに得た知識や体験を共有します。臨床実習に向けた自己の課題の気づきになって欲しいと思います。
到達目標	①医療人としての相応しい態度を培い、心掛けた行動がとれる ②1.2年生で習得した知識や技術の習熟を図り、実践できる ③作業療法の実践的な流れ（評価までの準備、評価の実施、結果の見直しと解釈を体験する ④障害と生活の関係性を整理し作業療法士の視点で捉えることができる
授業形態	演習　　対面授業

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	オリエンテーション	演習の一連の流れの説明/演習の目的・目標について/グループ分け/注意事項の説明/担当ケースの提示
2回	評価計画を立てる前の準備	調べ学習（疾患について、予測される障害について、その障害の評価と方法について調べる）　※記録1
3回		〃 グループ内で学習内容の共有
4回	評価計画を立てる	一般情報や医学的情報で必要となる項目を列挙、それらが必要な理由を纏める　※記録2
5回		身体機能面で必要となる項目を列挙、それらの評価が必要な理由を纏める　※記録2 一般情報や医学的情報、身体機能面で必要となる評価をグループ内で共有/評価の優先順位を考える
6回	情報収集のための演習/身体機能の評価の練習	ケースから必要な情報を聞き取るための練習をする 身体機能面の評価練習（評価を一連の流れで練習する）
7回	第一回　ケース評価	各グループで計画した評価を実施する
8回		〃
9回		〃
10回	第一回目　評価の振り返りと第二回目の課題	振り返り（評価結果の妥当性検討、評価結果の解釈、態度面の振り返り）/第二回目に向けた評価計画をたてる
11回	第二回目の評価練習	各グループの評価計画の内容を練習する
12回	第二回目　ケース評価	各グループで計画した評価を実施する
13回		〃
14回		〃
15回	第二回目　評価の振り返りと第三回目の課題	振り返り（評価結果の妥当性検討、評価結果の解釈、態度面の振り返り）/第三回目に向けた評価計画をたてる
16回	第三回目の評価練習	各グループの評価計画の内容を練習する
17回	第三回目　ケース評価	各グループで計画した評価を実施する
18回		〃
19回		〃
20回	ケース評価結果から障害像と生活の結び付け	ケースの障害像、生活を捉え、グループ内で共有する
21回	発表準備	グループ内で発表準備をする
22回	ケース評価報告会	各グループごとにケース評価報告を発表する
23回		〃

成績評価	課題提出・内容点数50% 発表点数50%	受講上のルール・留意点	担当教員の指導の下、グループで協力して課題を進めてください。

課題やレポートに関するフィードバック
課題のフィードバックはグループ担当教員から各授業内で受けてください。

	書名	著書名	出版社名
教科書	※身体障害評価学や治療学の教科書を持参すること		
参考書			
オフィスアワー	各グループの担当教員に確認してください。		

科　　目	発達障害治療学演習	単位・時間数	１単位・３０時間
担当講師	大西　麓子	学　　年	３年・前期
実績経験	資格：作業療法士	経験年数	施設等　50年

教育目標	１．情報から障碍者の全体像を把握し、必要な評価項目を挙げられる。 ２．発達障害者の方と直接関わり、障害者の方を理解できる。 ３．発達障害児者の方の評価・観察・面接・検査をとおして生活に必要な支援目標や内容をレポートにまとめることができる。
教育内容	・障害者の方を招いての校内実習：①グループワークを中心に計画立案を行う②校内実習を通して、情報収集と評価、観察、面接、検査を実施する③評価結果をまとめ、問題点の焦点化と全体像の捉えなおし、ゴールの設定とプログラムを考える経験をする。

講義内容

回数	項目	講義内容
１回	障害者の方の情報提供発達障害治療学演習・企画書作成に向けてのオリエンテーション,	発達障害の評価一治療過程の確認企画書作成に必要な内容、手順と様式　機器の貸し出し方法と予算請求方法と期限,　障害児者5名の方の情報提供
２回	提供情報の共有化・レポート作成に向けての指導	校内実習のまとめと情報の共有化、レポート作成のポイント
３回	企画書のフィードバック（20分×３G）	提出した企画書について教員よりフィードバック
４回	企画書のフィードバック（20分×２G）	提出した企画書について教員よりフィードバック
５回	校内実習のシュミレーション（３0分×２G）と修正	企画書にそって校内実習の当日のシュミレーションを実施する
６回	校内実習のシュミレーション（３0分×２G）と修正	企画書にそって校内実習の当日のシュミレーションを実施する
７回	校内実習のシュミレーション（３0分×１G）と修正	企画書にそって校内実習の当日のシュミレーションを実施する
８回	１、２ケース準備(障害者の方を招いて)	企画書にそって校内実習準備（１，２，３）
９回	１ケース校内実習(障害者の方を招いて)	企画書にそって校内実習（１）
10回	２ケース準備と校内実習(障害者の方を招いて)	企画書にそって校内実習（2）
11回	３ケース準備と校内実習(障害者の方を招いて)	企画書にそって校内実習（3）
12回	４，５ケース準備(障害者の方を招いて)	企画書にそって校内実習準備（4,5）
13回	4,5ケース　校内実習(障害者の方を招いて	企画書にそって校内実習（4,5）
14回	4,5ケース　校内実習(障害者の方を招いて	企画書にそって校内実習（4,5）
15回	症例のまとめ（グループ学習）	評価結果をもとにまとめる

評価方法	課題レポート80%、授業態度（20%）
オフィスアワー	授業前後の休憩時間

	書名	著書名	出版社名
教科書	標準作業療法専門分野　作業療法　臨床実習とケーススタディー　第2版	市川和子編集	医学書院
参考書	標準作業療法　専門分野　作業療法評価学　第3版	能登真一他編	医学書院
	感覚統合Ｑ＆Ａ　第２版	土田玲子監修・石井孝弘・岡本武巳編集	協同医書出版

科　　目	老年期障害治療学	単位・時間数	2単位・　48時間
担当講師	阿部　英人	学　年	3年生　前期
実績経験	資格 作業療法士	病院３年、介護保険関連施設７年、教育機関１０年	

授業の位置づけ	現在、我が国の高齢化率は28％を超え、今後も上昇が予測され2036年には3人に1人が高齢者になる。作業療法士として高齢者を対象とした医療・福祉・保健などさまざまな領域で果たす役割は大きい。高齢者が人生の最終章を生きるということに注目し、作業療法の基本的姿勢及び生活支援を学ぶ。	
到達目標	①高齢社会となった背景と現状、社会施策の変遷について説明ができる。②高齢者の特徴について理解し、高齢期へのアプローチ過程を説明することが出来る。④認知症の病態、また、介入方法について説明することが出来る。⑤各疾患における高齢期特有の病態および介入方法について説明することが出来る	
授業形態	講義・演習	対面授業または対面と遠隔の併用授業

授業計画

回数	項目	講義内容
１回	高齢社会について	高齢者の定義、高齢社会になった背景、高齢化率の変化
２回	高齢社会について	高齢社会となった日本の現状について、社会施策について
３回	高齢期の特徴について	高齢期の課題、高齢期に多い疾患について
４回	高齢期の特徴について	高齢期の課題、高齢期に多い疾患について
５回	高齢期の作業療法「評価法」「目標設定と治療計画」	高齢期作業療法の実践「作業療法の過程」、心理・行動・環境面からのアプローチ
６回		高齢期作業療法の実践「作業療法の過程」、心理・行動・環境面からのアプローチ
７回	終末期における援助	終末期リハビリテーションの評価、治療
８回	高齢期に対する作業療法「疾患別」	循環器、呼吸器疾患
９回		整形疾患
１０回		整形疾患
１１回		神経疾患
１２回		神経疾患
１３回	認知症への作業療法	認知症の基礎知識（中核症状とＢＰＳＤ）
１４回	認知症への作業療法	認知症の基礎知識（中核症状とＢＰＳＤ）
１５回	認知症への作業療法	作業療法評価（検査と観察）
１６回	認知症への作業療法	作業療法評価（検査と観察）
１７回	認知症への作業療法	作業療法評価（ICF）
１８回	認知症への作業療法	作業療法の実践
１９回	認知症への作業療法	作業療法の実践
２０回	認知症への作業療法	作業療法の実践
２１回	高齢者作業療法	アクティビティの意義と適応について　テーマの決定
２２回	高齢者作業療法	アクティビティの意義と適応について講義・実習　発表
２３回	高齢者作業療法	レクリエーションの意義と適応について講義・実習　テーマの決定
２４回	高齢者作業療法	レクリエーションの意義と適応について講義・実習　発表

成績評価	課題10％ 験90％　　定期試	受講上のルール・留意点	

課題やレポートに関するフィードバック
フィードバックは全体に実施する

	書名	著書名	出版社名
教科書	認知症の作業療法　ソーシャルインクルージョンをめざして	小川敬之	医歯薬出版
参考書			
オフィスアワー	水曜日以外、メールの場合は随時		

科　　目	精神障害治療学演習	単位・時間数	1単位・45時間
担当講師	手塚 雅之	学　年	3年生 前期
実績経験	資格 作業療法士・健康運動実践指導者	精神科病院の臨床経験５年、その後「専門学校」を中心に教育歴１８年。養成教育にたずさわりながら、身障系病院、高齢者施設、精神病院などでも経験を重ねた。それらの実務経験をもとに講義を行う。	

授業の位置づけ	精神科では薬を用いた治療以外に、患者様の疾患の特性に合わせて作業療法・認知療法・行動療法・ＳＳＴ・カウンセリング・リラクゼーション法・ACTなど様々な治療・援助手法が用いられている。本講義ではそれら各種治療法の内容を「講義」により再確認するとともに、「演習」を通して具体的にどのような効果があるのか、自分自身を通して理解できるよう講義を進める。また精神科領域におけるアクティビティ（作業活動）の用い方についても解説する。	
到達目標	（1）精神科における薬物療法以外の各種治療法について、演習を通して実際に体験し、具体的にどのようなものか自分の意見を述べることができる。（2）各種治療法について、その意義・目的・方法などについて説明できる。（3）精神科におけるアクティビティ（作業活動）の活用方法について説明できる。	
授業形態	講義・演習	対面と遠隔の併用授業

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	統合失調症（1）	統合失調症の特徴とリハビリテーション（1）
2回	統合失調症（2）	統合失調症の特徴とリハビリテーション（2）
3回	うつ病	うつ病の特徴とリハビリテーション
4回	リラクゼーション（1）	漸進的筋弛緩法
5回	リラクゼーション（2）	呼吸法（1）
6回	リラクゼーション（3）	呼吸法（2）
7回	リラクゼーション（4）	自律訓練法
8回	認知行動療法（1）	行動療法
9回	認知行動療法（2）	認知療法
10回	認知行動療法（3）	マインドフルネス（1）
11回	認知行動療法（4）	マインドフルネス（2）
12回	認知行動療法（5）	ＳＳＴ（1）
13回	認知行動療法（6）	ＳＳＴ（2）
14回	心理療法（1）	アサーショントレーニング
15回	心理療法（2）	カウンセリング
16回	集団療法	集団療法について
17回	精神医療への道（1）	精神医療にたずさわるということ
18回	作業療法の構造	治療構造・作業療法の効果と目標
19回	作業療法（1）	統合失調症の作業療法（1）
20回	作業療法（2）	統合失調症の作業療法（2）
21回	作業療法（3）	うつ病の作業療法
22回	作業療法（4）	アクティビティの活用法
23回	精神医療への道（2）	心の悩みを抱える人へのアプローチ

成績評価	授業内試験50%、課題50%	受講上のルール・留意点	3分の1を超える授業時間数を欠席したものは試験が受けられない。

課題やレポートに関するフィードバック
フィードバックは全体に実施する

	書名	著書名	出版社名
教科書	・精神障害と作業療法	山根寛	三輪書店
参考書	・精神障害作業療法学	山口芳文	メジカルビュー社
オフィスアワー	・「木曜日以外」または「メールで相談可」　・上記以外でも、空いている時間は対応可能です。		

科　目	高次脳機能障害治療学	単位・時間数	1単位・ 30時間
担当講師	伴野　麻矢	学　年	3年生 前期
実績経験	資格	臨床・教育：24年	
	作業療法士		

授業の位置づけ	『高次脳機能』とは人が毎日の生活を営む上で欠かせないコミュニケーションや様々な行為の土台になる機能です。人間がその人らしい生活を送るためにとても必要な機能です。脳血管疾患や頭部外傷などで脳に損傷を負ってしまった場合、今までのその人らしさを失い、家族や周りの人たちはどう関われば良いのか困惑し、生活のしづらさを抱えてしまいます。 この授業では高次脳機能障害の障害特性を学び、その評価方法や社会生活においてどのような支障があり、それに対してどのような関わりが必要かを実例を交えながら講義を行います。高次脳機能障害にはたくさんの種類があり、障害特性を捉えにくい、イメージしづらい障害もありますが、講義内でなるべく多くのビデオや私が臨床で診てきた高次脳機能障害の方々の話を交えて皆さんがイメージしやすいよう解説します。自分の生活に置き換えて高次脳機能を捉えていくことも大切です。イメージを持ちながら受講して欲しいと思います。
到達目標	①高次脳機能に関わる脳の局在を説明できる。 ②それぞれの脳の局在が障害されたときどのような障害がでるか、障害名と障害特性を説明できる ②高次脳機能障害の評価概要を理解し、病態に応じた評価を選定、実施ができる。 ③病態・障害別の病態が生活上で及ぼす影響、問題を理解し、介入方法を説明できる。
授業形態	講義・演習

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	高次脳機能障害の基礎知識	脳の機能とは何か/高次脳障害とは何か/高次脳機能のプロセス
2回		脳の局在と機能/高次脳機能障害の病態と原因
3回	優位半球損傷による高次脳機能障害	言語野の機能/失語症とは/ 失語症の分類と病態に応じた評価
4回		失語症の病態に応じた介入
5回		失行症とは/失行症の分類と病態に応じた評価
6回		失行症の病態に応じた介入
7回	認知（対象認知）の障害による高次脳機能障害	失認の分類　①視覚性の認知とは/視覚失認の分類と病態 視覚失認の病態に応じた評価と介入/バリント症候群について
8回		②身体に関した失認/身体失認の分類と病態/身体失認の病態に応じた評価と介入/③病態失認の病態と評価/介入
9回	視空間認知の障害による高次脳機能障害	視空間失認の分類/半側空間無視の病態
10回		半側空間無視の評価（代表的な検査バッテリー）の紹介と介入/地誌的障害の病態と評価・介入
11回	注意機能の障害による高次脳機能障害	注意機能とは/注意の段階による分類/注意障害の病態に応じた評価（代表的なバッテリー）と介入
12回	記憶の障害による高次脳機能障害	記憶のメカニズム/記憶の構造/記憶の分類
13回		記憶障害の病態と評価・介入
14回	前頭葉機能の障害による高次脳機能障害	前頭葉機能について/遂行機能障害の病態/評価と介入
15回		社会的行動障害の病態/評価と介入 代表的な検査バッテリーの紹介

成績評価	定期試験	受講上のルール・留意点	※各項目でプリントを配布する。必ず持参すること

課題やレポートに関するフィードバック

	書名	著書名	出版社名
教科書	標準作業療法学　高次脳機能作業療法学	能登真一	医学書院
参考書	高次脳機能障害ポケットマニュアル第3版	原寛美	医歯薬出版
オフィスアワー	水曜日を除く平日（不在の場合はメールで相談してください）		

科　目	日常生活活動学演習	単位・時間数	1単位・ 45時間
担当講師	五十嵐千代子　一木愛子	学　年	3年生 前期
実績経験	資格 作業療法士	作業療法士として病院勤務などの実務経験を活かし、実例を交えながら講義を行う	

授業の位置づけ	作業療法の対象となる方々それぞれが求める生活像に対して、疾患の特徴や予後を踏まえ、体の機能を改善させるだけではなく、残っている機能を活用したり方法を変えることにより「できることを」増やしていくことが職業としての専門域である。「脳血管疾患（片麻痺）」「頚髄損傷（四肢麻痺）」「嚥下障害（食べることの障害）」「関節リウマチ（関節の様々な問題）」「パーキンソン病・筋萎縮性側索硬化症（進行性の病気）」を通して、不自由になった生活動作を改善させる方法や維持する方法などを学ぶ。
到達目標	・それぞれの心身機能の問題と日常生活障害について説明することができる。 ・日常生活活動の評価の方法や、疾患によっては評価の時間帯などを説明することができる。 ・残存機能の活かし方を説明できる。 ・日常生活の改善・維持の方法を説明できる。 ・リスク管理について説明することができる。
授業形態	講義・演習　　対面と遠隔の併用授業

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	日常生活活動における作業療法の基本的な考え方	日常生活活動の評価と事例検討
2回		
3回	脳血管疾患・片麻痺	起居動作　移動動作　講義・演習
4回		食事動作・整容動作　講義・演習
5回		更衣動作・排泄動作　講義・演習
6回		入浴動作・福祉用具や家屋の工夫　講義・演習
7回		生活関連動作　講義・演習
8回		生活関連動作　講義・演習
9回	嚥下障害	嚥下障害の評価と作業療法アプローチ　講義
10回	関節リウマチ	関節保護を用いての工夫　講義・演習
11回		自助具・動作指導について　講義・演習
12回	パーキンソン病	動作、姿勢、ミュニケーション障害　講義・演習
13回		病期に合わせた生活動作　講義・演習
14回	筋萎縮性側索硬化症	病期の進行に合わせた日常生活での工夫　講義・演習
15回		病期の進行に合わせた日常生活での工夫　講義・演習
16回	頚髄損傷	残存筋とADL動作の関係　講義・演習
17回		残存筋とADL動作の関係　講義・演習
18回		作業療法評価と作業療法アプローチ　講義・演習
19回		起居動作　移動動作　講義・演習
20回		食事動作・更衣動作　講義・演習
21回		整容動作　講義・演習
22回		排泄動作　講義・演習
23回		入浴動作　講義・演習

成績評価	○定期試験　100点満点 ○授業時間数の３分の１以上欠席した者には単位を与えない	受講上のルール・留意点	・演習ではジャージなどの動きやすい格好で参加するよう指示がありますので従ってください。 ・スマートフォン、PCなどは指示のあったときのみ使用してください。

課題やレポートに関するフィードバック
フィードバックは全体に実施する

	書名	著書名	出版社名
教科書	・ADLとその周辺　評価・指導・介助の実際 ・作業療法学全書　作業治療学１　身体障害 ・作業療法評価学　第3版	伊藤利之　鎌倉矩子　監修 菅原洋子　編集 能登真一	医学書院 協同医書 医学書院
参考書			
オフィスアワー	平日 9時～17時（木曜日以外）教員室 メールでの連絡は常に受け付けますが、返信には時間を要する場合あり。 非常勤講師は授業前後の休憩時間		

科　　目	職業関連活動学	単位・時間数	1単位・24時間
担当講師	伴野　麻矢	学　　年	3年生　前期
実績経験	資格	臨床・教育：24年	
	作業療法士		

授業の位置づけ	この授業では、人にとって『職業』とはどのような意味があるのかを考え、職業リハビリテーション概念、理論を知り、作業療法士が障害者の就労にどのような役割をもち、どのような関わりができるかを学ぶことを目的とします。 障害者が就労するための支援を考えたとき、作業療法士自身が「働くことの意味」を考え、職業選択の基準、病気や障害を抱えての就職活動をするときの思いをきちんと受け止め、就労支援に関わる理論背景を持って対応することが必要となります。 作業療法士の業務の中で職業関連活動は、病気や疾患、障害を抱えた人の生活の質、人生の質に大きく関わる大切な仕事です。そのためにも障害者の就労に関する理論、制度などの知識を習得し、症例を通して学習を進めていきましょう。
到達目標	①職業の定義、職業の意味と構成要素を説明できる ②障害者の就労支援体制を理解し説明できる ③障害者の就労支援における作業療法士の役割、関連機関との連携を理解し説明できる。 ④障害に応じた就労支援の在り方を考え、提案できる。
授業形態	講義・演習　　対面と遠隔の併用授業

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	『職業』の定義と意義 『職業関連活動』について	職業の定義、職業の意味を理解し『職業』とは何かを考え、理解する
2回	職業リハビリテーション活動の概念 就労支援の理論	職業リハビリテーションの役割、支援の戦略、就労支援に関する理論
3回	障害者の就労・障害者雇用の現状 就労支援制度と就労支援機関	障害者の就労と雇用について、就労支援制度と就労支援に関わる支援機関について
4回	職業リハビリテーションと 作業療法士の役割	障害者にとっての職業、作業療法士の役割
5回	就労支援における作業療法の流れ	就労支援における評価から訓練と就労まで
6回	障害別就労支援の実際①－1	精神障害の就労事例
7回	障害別就労支援の実際②－1	高次脳機能障害の就労事例
8回	障害別就労支援の実際③－1	身体障害の就労事例
9回	障害別就労支援の実際④－1	知的障害の就労事例
10回	まとめ	就労支援のまとめ
11回	就労支援に関する国家試験問題	就労に関する国家試験出題傾向について
12回	就労支援に関する国家試験問題	就労に関する国家試験出題傾向について

成績評価	授業時間数の３分の１以上欠席した者には単位を与えない。 課題内容５０％、定期試験５０％の配分で成績評価する。	受講上のルール・留意点	疾患別の病態や障害特性を理解した上で、就労を捉えていくことがとても大切です。暗記する学習ではなく、イメージしながら学習を進めてください。

課題やレポートに関するフィードバック

	書名	著書名	出版社名
教科書	作業療法学全書第12巻　職業関連活動　作業療法技術学4	平賀昭信・岩瀬義昭　編集 日本作業療法士協会　監修	協同医書出版
参考書			
オフィスアワー	水曜日を除く平日（不在の場合はメールで相談してください）		

科　目	作業療法総合演習Ⅱ	単位・時間数	2単位 ・ 60時間
担当講師	作業療法学科　教員	学　年	3年生　後期
実績経験	資格 作業療法士	各分野担当の教員 作業療法士として医療・療養・介護・療育施設にて治療を行ってきた実務経験を活かし、実例を交えながら講義・演習を行う。	

授業の位置づけ	臨床実習Ⅰの実施後に振り返りを行い、臨床実習Ⅱの準備教育を行う。 1)身体障害系セミナー 2)老年期障害系セミナー 3)発達障害系セミナー 4)精神障害系セミナー 各評価学・治療学の振り返りの講義、実技演習。	
到達目標	事例報告を中心とした演習、評価実技などを共同学習において学び、総合実習で必要な知識を確認する。評価学。治療学などの振り返りを通じて、作業療法についての理解を深める。	
授業形態	演習	対面と遠隔の併用授業

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	オリエンテーション	作業療法総合演習Ⅰの全体説明
2回	評価・治療演習	身体障害分野① 情報収集
3回	評価・治療演習	身体障害分野② 面接、観察
4回	評価・治療演習	身体障害分野③ 検査・測定
5回	評価・治療演習	身体障害分野④ 全体像のまとめ
6回	評価・治療演習	身体障害分野⑤ 目標設定
7回	評価・治療演習	身体障害分野⑥ 治療立案、再評価
8回	評価・治療演習	身体障害分野⑦ 考察
9回	評価・治療演習	老年期障害分野① 情報収集
10回	評価・治療演習	老年期障害分野② 面接、観察
11回	評価・治療演習	老年期障害分野③ 検査・測定
12回	評価・治療演習	老年期障害分野④ 全体像のまとめ
13回	評価・治療演習	老年期障害分野⑤ 目標設定
14回	評価・治療演習	老年期障害分野⑥ 治療立案、再評価
15回	評価・治療演習	老年期障害分野⑦ 考察
16回	評価・治療演習	発達障害分野① 情報収集
17回	評価・治療演習	発達障害分野② 面接、観察
18回	評価・治療演習	発達障害分野③ 検査・測定
19回	評価・治療演習	発達障害分野④ 全体像のまとめ
20回	評価・治療演習	発達障害分野⑤ 目標設定
21回	評価・治療演習	発達障害分野⑥ 治療立案、再評価
22回	評価・治療演習	発達障害分野⑦ 考察
23回	評価・治療演習	精神障害分野① 情報収集
24回	評価・治療演習	精神障害分野② 面接、観察
25回	評価・治療演習	精神障害分野③ 検査・測定
26回	評価・治療演習	精神障害分野④ 全体像のまとめ
27回	評価・治療演習	精神障害分野⑤ 目標設定
28回	評価・治療演習	精神障害分野⑥ 治療立案、再評価
29回	評価・治療演習	精神障害分野⑦ 考察
30回	まとめ	全体の振り返り、まとめ

成績評価	提出課題　50% 事例報告評価　50%	受講上のルール 留意点	提出課題は必要内容を記載して、提出期限内に提出すること。 授業時間数の3分の1以上欠席した者には、単位を与えない。

課題やレポートに関するフィードバック
フィードバックはクラス全体に実施する。

科　　目	地域作業療法学Ⅰ	単位･時間数	2単位･　　30時間
担当講師	阿部　英人	学　年	3年生　後期
実績経験	資格 作業療法士	病院３年、介護保険関連施設７年、教育機関１０年	

授業の位置づけ	地域リハビリテーションとは「障害があるものもそうでないものも、安全にしかも安心して生活ができるように地域が変わっていくこと」である。病院や施設から住み慣れた地域へと移行するためには実際の生活を見据えたリハビリテーションの提供が必要である。この授業では住環境整備を中心に作業療法士としての役割、支援方法について学ぶ。	
到達目標	①地域リハビリテーションの定義について理解する。②住宅改修の方法、	
授業形態	講義・演習	対面授業または対面と遠隔の併用授業

授業計画

回数	項目	講義内容
１回	地域リハビリテーションの概念について	地域リハビリテーションとノーマライゼーション（グループディスカッション）
２回	地域リハビリテーションの概念について	地域リハビリテーションとノーマライゼーション（発表）
３回	住環境整備総論	ICIDHとICF
４回	住環境整備総論	バリアフリーとユニバーサルデザイン（講義・演習）
５回	住環境整備総論	バリアフリーとユニバーサルデザイン（身近にあるユニバーサルデザインの発表）
６回	住環境整備各論	住宅改修の基本事項
７回	住環境整備各論	住宅改修の基本事項
８回	住環境整備各論	疾患・障害別にみる住環境整備（高齢者）
９回	住環境整備各論	疾患・障害別にみる住環境整備（片麻痺）
１０回	住環境整備各論	疾患・障害別にみる住環境整備（脊髄損傷）
１１回	住環境整備各論	疾患・障害別にみる住環境整備（神経疾患）
１２回	住環境整備各論	事例紹介
１３回	住環境整備各論	事例紹介
１４回	住環境整備各論	ケーススタディ（演習）
１５回	住環境整備各論	ケーススタディ（発表）

成績評価	課題の提出（100％）	受講上のルール・留意点	

課題やレポートに関するフィードバック
フィードバックは全体に実施する

	書名	著書名	出版社名
教科書			
参考書			
オフィスアワー	随時		

科　　目	臨床実習Ⅰ	単位・時間数	６単位・２７０時間
担当講師	臨床実習指導者、作業療法学科教員	学　　年	３年、後期

教育目標	作業療法の臨床の現状への理解と見聞を深める。対象者に対する検査・観察・面接などを体験し、その情報から対象者の状態像を考察し、作業療法目標を設定する技術を体得する。
教育内容	作業療法の臨床の臨床現場に出向き、資格のある作業療法士の指導のもとで、対象者の協力を得ながら検査・測定の手技を学び、面接および日常の行動観察を行い、情報を分析・統合する。

講義内容

回数	項　　目	講　　義　　内　　容
1週目	施設の概要を知る 作業療法の役割を知る 対象者と初回面接 対象者の評価	施設および作業療法室についてのオリエンテーションを受け、対象者の観察、作業活動の用い方、道具などに触れる。対象者の協力を得て、評価の実践を行う。
2週目	対象者の評価	作業療法士の指導のもとで、対象者の協力を得て、作業療法評価の実践を行う。必要な記録を残す。
3週目	対象者の評価 まとめ 作業療法目標の設定 実習終了の挨拶 事務手続き	作業療法士の指導のもとで、対象者の協力を得て評価の実践をし、情報の整理、統合、解釈を行い、作業療法目標を設定する。必要な記録を残す。

評価方法	臨床実習学生評定表に基づく

科　目	作業療法特論	単位・時間数	12単位・360時間
担当講師	作業療法学科教員	学　年	4年生　後期
実績経験	資格 作業療法士	作業療法士として病院勤務などの実務経験を活かし、実例を交えながら講義を行う 各領域の専門知識を活かし、学生との双方向での教育を行う。	

授業の位置づけ	基礎分野・専門基礎分野・専門分野の１年～4年前期までの学習を振り返り、作業療法実践のために必要な知識を再学習する。 臨床における実地的な知識をグループワークなどを通して習得する	
到達目標	解剖学・生理学・運動学・心理学などの基礎分野の知識を習得する 各臨床医学を含む専門基礎分野の知識を習得する 作業療法の専門分野の知識を各領域ごとに習得する	
授業形態	講義・演習	対面授業・一部遠隔授業

授業計画

回数	項目	講義内容
1期	基礎分野	解剖学・生理学・運動学・心理学などの基礎分野について（講義・グループワーク）
2期	専門基礎分野	各臨床医学などの専門基礎分野について（講義・グループワーク）
3期	専門分野	評価学・治療学などの作業療法専門分野について（講義・グループワーク）

成績評価	各期での試験100％	受講上のルール・留意点	グループで行う演習に関して、必ず役割を持ち、傍観者にならないこと。 評価には授業全体の２／３の出席が必要

課題やレポートに関するフィードバック
随時ＦＢを行う。

	書名	著書名	出版社名
教科書			
参考書	講義開始時に説明		
オフィスアワー	随時		

科　目	作業療法臨床セミナーⅡ	単位・時間数	2単位 ・ 60時間
担当講師	作業療法学科　教員	学　年	4年生　前期
実績経験	資格 作業療法士	分野担当ごとの各教員 作業療法士として医療・療養・介護・療育施設にて治療を行ってきた実務経験を活かし、実例を交えながら講義・演習を行う。	

授業の位置づけ	臨床実習Ⅱの実施前に、実習直前の準備教育を行う。 1)身体障害系セミナー 2)老年期障害系セミナー 3)発達障害系セミナー 4)精神障害系セミナー 専門領域別に事例報告を行い、質疑応答、討論を行う。 領域別の事例報告を踏まえて臨床実習Ⅱの振り返りを行う	
到達目標	事例報告を中心とした相互学習を通じて、実習経験を共有し、次期の総合実習や臨床現場で必要な知識を習得する。	
授業形態	演習	対面と遠隔の併用授業

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	オリエンテーション	作業療法臨床セミナーⅠの全体説明
2回	事例のまとめ	レポート・レジュメのまとめ方① 情報収集(一般、社会的、医学的)
3回	事例のまとめ	レポート・レジュメのまとめ方② 作用療法評価(面接、観察、検査・測定)
4回	事例のまとめ	レポート・レジュメのまとめ方③ 全体像のまとめ
5回	事例のまとめ	レポート・レジュメのまとめ方④ 目標設定 考察
6回	事例発表	身体障害分野① 症例A 発表
7回	事例発表	身体障害分野② 症例A 検討
8回	事例発表	身体障害分野③ 症例B 発表
9回	事例発表	身体障害分野④ 症例B 検討
10回	事例発表	身体障害分野⑤ 症例C 発表
11回	事例発表	身体障害分野⑥ 症例C 検討
12回	事例発表	老年期障害分野① 症例D 発表
13回	事例発表	老年期障害分野② 症例D 検討
14回	事例発表	老年期障害分野③ 症例E 発表
15回	事例発表	老年期障害分野④ 症例E 検討
16回	事例発表	老年期障害分野⑤ 症例F 発表
17回	事例発表	老年期障害分野⑥ 症例F 検討
18回	事例発表	発達障害分野① 症例G 発表
19回	事例発表	発達障害分野② 症例G 検討
20回	事例発表	発達障害分野③ 症例H 発表
21回	事例発表	発達障害分野④ 症例H 検討
22回	事例発表	発達障害分野⑤ 症例I 発表
23回	事例発表	発達障害分野⑥ 症例I 検討
24回	事例発表	精神障害分野① 症例J 発表
25回	事例発表	精神障害分野② 症例J 検討
26回	事例発表	精神障害分野③ 症例K 発表
27回	事例発表	精神障害分野④ 症例K 検討
28回	事例発表	精神障害分野⑤ 症例L 発表
29回	事例発表	精神障害分野⑥ 症例L 検討
30回	まとめ	全体の振り返り、まとめ

成績評価	提出課題　50% 事例報告評価　50%	受講上のルール・留意点	提出課題は必要内容を記載して、提出期限内に提出すること。 授業時間数の3分の1以上欠席した者には、単位を与えない。

課題やレポートに関するフィードバック
フィードバックはクラス全体に実施する。学生の事例報告を踏まえて、適宜フィードバックを行う。

科　目	地域作業療法学Ⅱ	単位・時間数	2単位・　30時間
担当講師	栗原実里	学　年	4年生　後期
実績経験	資格	資格：作業療法士 病院勤務、訪問リハビリテーション、訪問看護でのリハビリテーションを経験。 実務経験を交え講義を行う。	

授業の位置づけ	地域で活躍されてる各分野の作業療法士より、地域で働く作業療法士の実際を聞き、地域リハビリテーションについてを学ぶ。地域リハビリテーションとは障害を持つ子供、成人、高齢者やその家族が住み慣れたところで、安全に生き生きと生活できるようにサポートすることであり、地域で求められる作業療法士の役割や業務内容について症例を交えた講義で学ぶ。	
到達目標	1. 地域作業療法および地域のリハビリテーションについて理解する 2. 地域における作業療法の役割について理解する 3. 地域における多職種連携について理解する	
授業形態	講義 対面と遠隔授業の併用	

授業計画

回数	項目	講義内容
1回	地域作業療法概論	地域リハビリテーション、地域作業療法について
2回	訪問リハビリテーション①	訪問リハビリテーションが地域リハビリテーションで担う役割について
3回	訪問リハビリテーション②	訪問リハビリテーションの業務や作業療法士の役割について
4回	通所介護施設①	通所介護施設が地域リハビリテーションで担う役割について
5回	通所介護施設②	通所介護施設の業務や作業療法士の役割について
6回	介護老人保健施設①	介護老人保健施設が地域リハビリテーションで担う役割について
7回	介護老人保健施設②	介護老人保健施設の業務や作業療法士の役割について
8回	障害者支援施設①	障害者支援施設が地域リハビリテーションで担う役割について
9回	障害者支援施設②	障害者支援施設の業務や作業療法士の役割について
10回	発達障害支援①	発達障害者支援施設が地域リハビリテーションで担う役割について
11回	発達障害支援②	発達障害者支援施設の業務や作業療法士の役割について
12回	精神障害者支援①	精神障害者支援施設が地域リハビリテーションで担う役割について
13回	精神障害者支援②	精神障害者支援施設の業務や作業療法士の役割について
14回	高次脳機能障害者支援①	高次脳機能障害者支援施設が地域リハビリテーションで担う役割について
15回	高次脳機能障害者支援②	高次脳機能障害者支援施設の業務や作業療法士の役割について

成績評価	態度25% 課題50%	受講上のルール・留意点	毎回の講義毎にgoogleformで課題を提示する。 課題内容は、講義の感想と、臨床で働く上で自身の課題と目標についてを200字以内にまとめるものとする。 授業態度の評価は講習・演習に発言があり積極的に取り組んでいれば50点、

課題やレポートに関するフィードバック
個別に行う

	書名	著書名	出版社名
教科書	なし		
参考書	なし		
オフィスアワー	火・土・日曜日以外、午後17時まで。 それ以外はメールで相談。		

科　　目	臨床実習Ⅱ	単位・時間数	１６単位・７２０時間
担当講師	臨床実習指導者、作業療法学科教員	学　　年	４年、前・後期

教育目標	作業療法の臨床の現状への理解と見聞を深める。対象者に対する検査・測定・観察・面接などを体験し、その情報から対象者の状態像を考察し、作業療法計画を立案、実施し、再評価を行い、作業療法の実際的な技術を体得する。
教育内容	作業療法の臨床の臨床現場に出向き、資格のある作業療法士の指導のもとで、対象者の協力を得ながら検査・測定の手技を学び、面接および日常の行動観察を行い、情報を分析・統合し、作業療法計画立案、治療実施、再評価を実施する。

講義内容

回数	項　　目	講　　義　　内　　容
１週目	施設の概要を知る 作業療法の役割を知る 対象者と初回面接等を行う 対象者の評価を実施する	施設および作業療法室についてのオリエンテーションを受け、対象者の観察、作業活動の用い方、道具などに触れる。対象者の協力を得て、評価の実践を行う。
２～３週目	対象者の評価、 治療計画立案・実施	作業療法士の指導のもとで、評価結果から作業療法計画を立案する。必要な記録を残す。その他の課題の遂行
４～６週目	作業療法実施	作業療法士の指導のもとで、対象者の協力を得て治療の実践、観察、作業面接、治療計画変更等を行う。記録その他の課題の遂行。
７～８週目	再評価 治療経過のまとめおよび考察 今後の課題のまとめ　引継ぎ 実習終了挨拶 事務手続きの完了	作業療法士の指導のもとで、対象者の協力を得て治療の実践、観察、作業面接、治療計画変更等を行う。時期をみて再評価を行い、治療経過をまとめて考察する。記録その他の課題の遂行。

評価方法	臨床実習学生評定表に基づく